

鳥居松遺跡5次

円頭大刀編

2009年12月

(財) 浜松市文化振興財団

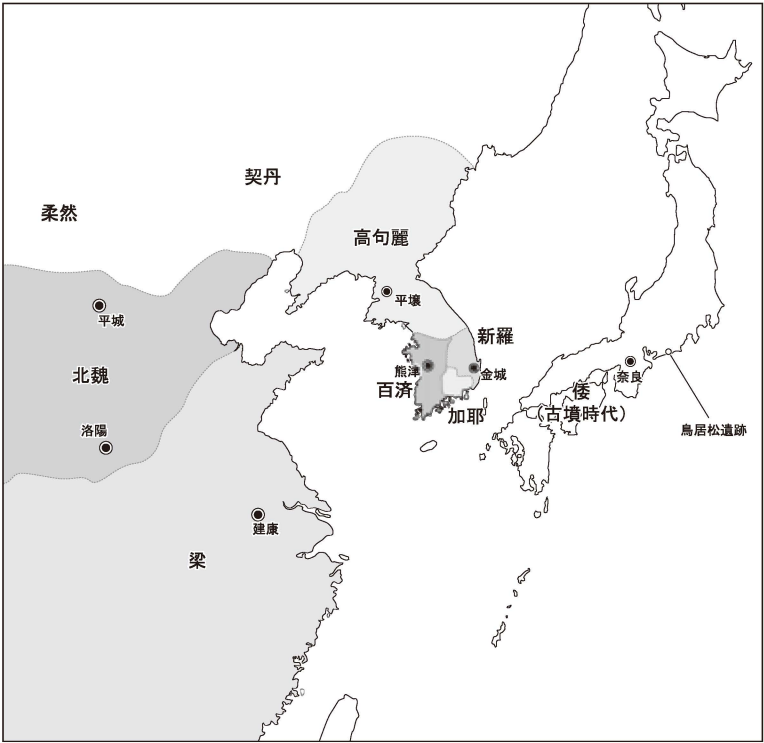


鳥居松遺跡 5 次

円頭大刀編

2009 年 12 月

(財) 浜松市文化振興財団



6世紀前葉の東アジア

例 言

- 1 本書は浜松市中区森田町 133 他において実施した鳥居松遺跡（5 次調査）の発掘調査にかかわる報告である。当発掘調査の報告書は、弥生時代編（第 1 分冊）、伊場大溝編（第 2 分冊）、円頭大刀編（第 3 分冊）の 3 部で構成される。本書は第 3 分冊に相当する円頭大刀編であり、自然河川である伊場大溝から出土した古墳時代後期の金銀装円頭大刀（本文中では、「円頭大刀」と略す）の調査成果を扱う。なお、調査にいたる経緯および調査経過については、第 1 分冊である弥生時代編に一括して掲載している。
- 2 当発掘調査は集合住宅建設および宅地造成に先立つ事前調査として実施した。調査は、株式会社マルハンおよびセキスイハイム東海株式会社の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。
なお、当初、集合住宅の建設が計画されていた対象地北側については、発掘調査終了後に開発計画が変更されたため、別途に発掘調査を実施した部分がある（財団法人浜松市文化振興財団 2009『鳥居松遺跡 6 次』）。
- 3 当発掘調査にかかわる契約期間は平成 19 年 11 月 9 日から平成 21 年 12 月 25 日までである。このうち現地発掘調査は、平成 20 年 1 月 4 日から 6 月 16 日の間に実施した。調査面積は 1200 m² である。
- 4 発掘調査は、安藤 憲、小粥良和、鈴木一有（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）が担当し、原田和子、鈴井けい子、藤森紀子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当非常勤職員）が補助した。
- 5 本書の編集、第 3 章 1 を除く執筆は鈴木一有が担当した。なお、第 3 章 1 については、西尾太加二、大森信宏（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）および村上 隆（京都国立博物館）が分担して執筆した。
- 6 調査の記録、出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構の略記号は以下の通りである。

SX：遺物集積

- 3 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

 土師器

 須恵器

- 4 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

（財）浜松市文化協会→浜文協

教育委員会→教委

- 5 本書で扱う出土須恵器の編年的位置づけについては、主に陶邑編年をもちいる。陶邑編年については、以下の文献を参考にした。

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

鳥居松遺跡 5 次 円頭大刀編

目 次

例 言

凡 例

第 1 章 序 論	1
-----------------	---

- | | |
|--------------------------|---|
| 1 円頭大刀出土地点の概要 | 1 |
| 2 円頭大刀の出土から報告に至る経緯 | 5 |

第 2 章 調査成果	7
------------------	---

- | | |
|-------------------|----|
| 1 円頭大刀の出土状態 | 7 |
| 2 円頭大刀の詳細 | 13 |

第 3 章 後 論	23
-----------------	----

- | | |
|---------------------------|----|
| 1 円頭大刀の保存処理と自然科学的調査 | 23 |
| 2 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜 | 33 |
| 3 伊場大溝における円頭大刀出土の意義 | 53 |

第 4 章 総 括	59
-----------------	----

- | | |
|-------------------|----|
| 1 発掘調査の成果 | 59 |
| 2 特筆すべきことがら | 59 |
| 3 今後の展望 | 60 |

図 版

図 版 目 次

1	円頭大刀出土状態（南東から）
2	柄頭・柄間詳細（1: 佩表 2: 佩裏）
3	1 円頭大刀（1: 佩表 2: 佩裏）
	2 柄頭・柄間側面（1: 背側 2: 刃側）
	3 責金具（1: 詳細 2: 装着状態）
4	1 柄頭詳細（1: 金板を外した状態 2: 金板表側 3: 金板裏側）
	2 柄頭・柄間詳細
5	柄頭・柄間X線透過写真
6	1 関部X線透過写真
	2 責金具X線透過写真

挿 図 表 目 次

Fig.1	伊場大溝の流路…………… 1	Fig.21	金属板の遺存状態……………18
Fig.2	潟湖と鳥居松遺跡の位置…………… 2	Fig.22	補修痕（1）……………19
Fig.3	伊場大溝の層位模式図…………… 3	Fig.23	補修痕（2）……………19
Fig.4	伊場大溝断面図…………… 4	Fig.24	鋌の位置……………19
Fig.5	円頭大刀検出作業…………… 5	Fig.25	柄間の詳細……………20
Fig.6	報道公開…………… 5	Fig.26	剥落した柄間の銀板……………20
Fig.7	取り上げ…………… 6	Fig.27	柄間の推定割付順序……………21
Fig.8	X線透過写真の検討…………… 6	Fig.28	責金具実測図……………21
Fig.9	伊場大溝 VII b 層…………… 7	Fig.29	円頭大刀復元図……………22
Fig.10	SX05 検出状況…………… 8	Fig.30	周辺土の除去作業……………23
Fig.11	SX05 土器出土状態…………… 8	Fig.31	柄の劣化状態……………23
Fig.12	SX05 遺物出土状態…………… 9	Fig.32	アルミ箔での保護……………23
Fig.13	SX05 遺物出土位置対応図……………10	Fig.33	ウレタン樹脂の流し込み作業……………23
Fig.14	SX05 出土主要遺物……………11	Fig.34	ウレタン樹脂による固定……………23
Fig.15	円頭大刀出土状態……………12	Fig.35	反転取り上げ……………23
Fig.16	円頭大刀部分名称……………13	Fig.36	ウレタン解体前……………24
Fig.17	円頭大刀実測図……………14	Fig.37	ウレタン解体作業…………… 24
Fig.18	龍文各部名称……………15	Fig.38	円頭大刀検出後…………… 24
Fig.19	柄頭・柄間詳細図……………16	Fig.39	クリーニング作業…………… 24
Fig.20	柄頭・柄間三次元陰影画像……………17	Fig.40	PEG 浸漬作業…………… 24

Fig.41	真空凍結乾燥作業	24	Fig.67	分析測点 (2)	29
Fig.42	金属部分保存処理前	25	Fig.68	分析測点 (3)	29
Fig.43	安定化処理作業	25	Fig.69	分析測点 (4)	29
Fig.44	修復作業	25	Fig.70	分析測点 (5)	29
Fig.45	保存処理後	25	Fig.71	分析測点 (6)	29
Fig.46	サンプリング箇所とサンプル	25	Fig.72	柄頭X線写真	31
Fig.47	木口 (×50)	26	Fig.73	柄頭金銀装飾の復元想定	32
Fig.48	柁目 (×50)	26	Fig.74	円頭大刀の全形復元想定	32
Fig.49	板目 (×50)	26	Fig.75	心葉形懸通孔をもつ円頭柄頭	33
Fig.50	サンプリング箇所	26	Fig.76	木彫金銀張技法をもつ装飾大刀	34
Fig.51	漆塗膜の断面構造	26	Fig.77	龍文・獣面文を表現する円頭大刀	35
Fig.52	A部分拡大	26	Fig.78	鳥居松遺跡例と類似する龍文の諸例	36
Fig.53	B部分拡大	27	Fig.79	双連珠菱形文の諸例	37
Fig.54	C部分拡大	27	Fig.80	連続波頭文の諸例	38
Fig.55	円頭大刀全形X線写真	27	Fig.81	円頭柄頭の形態比較	40
Fig.56	円頭大刀柄部X線写真	27	Fig.82	円頭大刀柄頭の諸例	42
Fig.57	円頭大刀貴金具X線写真	27	Fig.83	朝鮮半島出土円頭大刀・刀子の諸例	44
Fig.58	蛍光X線分析作業 (1)	28	Fig.84	日本出土円頭大刀の諸例 (1)	45
Fig.59	蛍光X線分析作業 (2)	28	Fig.85	日本出土円頭大刀の諸例 (2)	46
Fig.60	分析測点 (1)	28	Fig.86	円頭大刀変遷図	48
Fig.61	分析測点 (2)	28	Fig.87	円頭大刀の分布	53
Fig.62	分析測点 (3)	28	Fig.88	東海における装飾大刀の分布	54
Fig.63	分析測点 (4)	28	Fig.89	雪野山古墳における刀剣の出土状況	55
Fig.64	蛍光X線分析作業 (1)	29	Fig.90	伊場大溝における装身具の分布状況	56
Fig.65	蛍光X線分析作業 (2)	29			
Fig.66	分析測点 (1)	29	Tab.1	円頭大刀属性分析表	43

第1章 序 論

1 円頭大刀出土地点の概要

伊場大溝の流路 本書で取り扱う金銀装円頭大刀（以下、「円頭大刀」と略す）は、鳥居松遺跡で確認された自然河川、伊場大溝内から出土した。伊場大溝は、幅 20m、深さ 2.5m ほどの規模をもち、現在までに総延長 1700m ほどの流路が確認できている。伊場大溝内には水分を豊富に含む湿地性の堆積土が埋没しており、有機物の保存には最適である。古代敷智郡家と推定される伊場遺跡群（静岡県浜松市中区・南区）を貫いていることから、伊場大溝内からは 180 点以上の木簡をはじめとした文字資料が豊富に出土している。

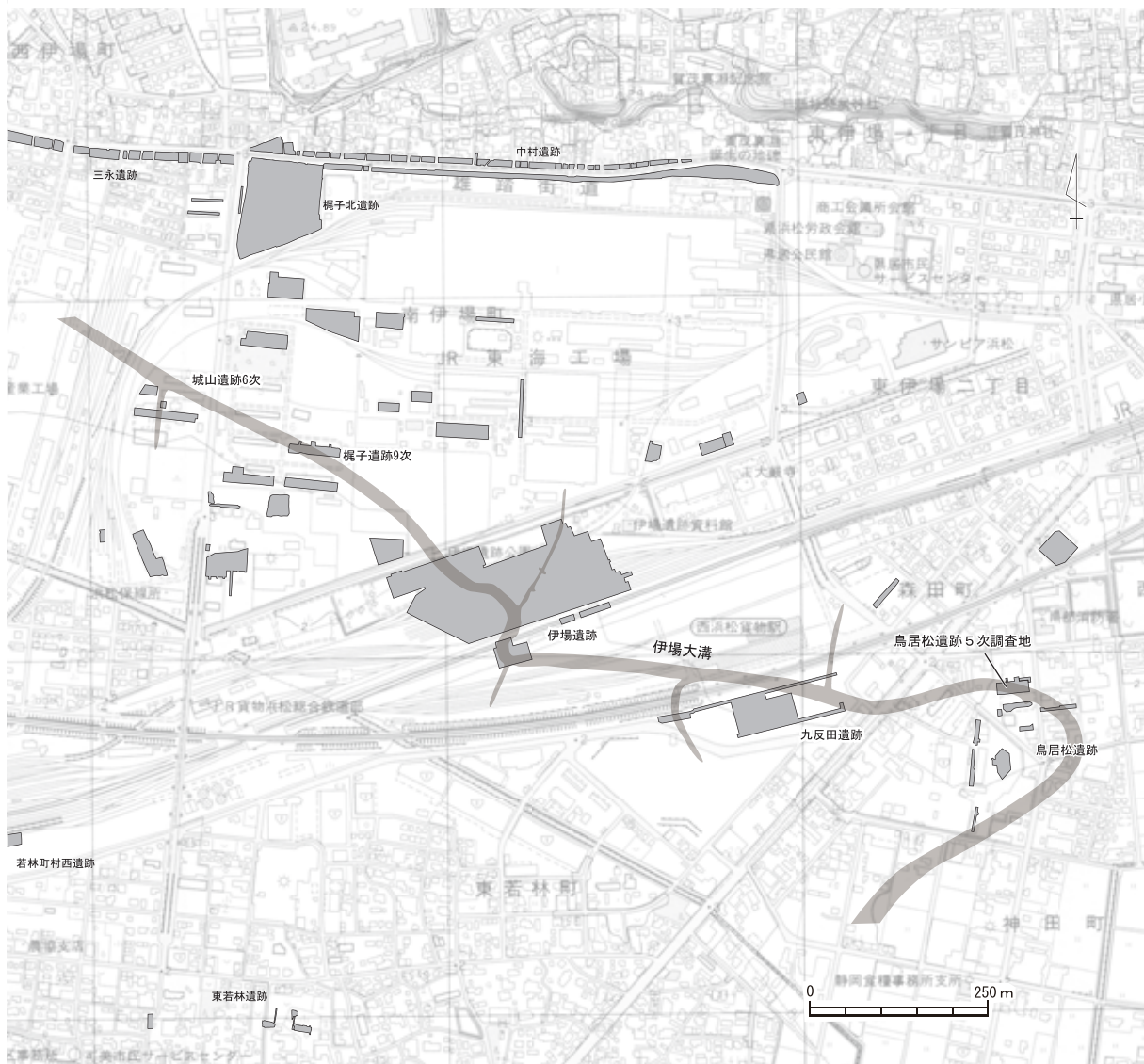


Fig.1 伊場大溝の流路



Fig.2 潟湖と鳥居松遺跡の位置

鳥居松遺跡の5次調査では、伊場大溝が東西方向から南北方向に大きく向きを変える状況を確認した（第2分冊『伊場大溝編』参照）。伊場大溝の下流部は未確認であるが、鳥居松遺跡において南に流れを変えていることから、浜松南部地域に広がる低湿地帯に流れ込み、古くは天竜川の流路の一つであった馬込川と合流して遠州灘と繋がっていたとみられる。伊場大溝の推定流路の延長方向には、かつて沼田池と呼ばれた沼地があった。沼田池は近世の絵図や明治時代の地形図にみられ、浜松南部地域にあった潟湖（ラグーン）の痕跡とみられる。古墳時代の潟湖がどの程度まで内陸に入り込んでいたかはなお不明瞭であるが、後背湿地の広がりや標高の比較から、鳥居松遺跡の南数百メートルあたりまで迫っていた可能性がある。

伊場大溝の層位 伊場大溝の折り重なる埋没土層の状況は、過去に伊場大溝を調査した伊場遺跡や梶子遺跡9次調査のそれと基本的には同一であり、第2分冊『伊場大溝編』に詳述したように、古墳時代中期から鎌倉時代に至る各堆積層を確認している。伊場大溝は古墳時代中期後葉（5世紀後葉）に形成されたとみられ、古墳時代後期後半（6世紀後半）および飛鳥時代（7世紀前葉）に若干の流路を変更し、奈良時代（8世紀）以降は水量を次第に減じて鎌倉時代（13世紀）には完全に埋没したものと捉えられる。

円頭大刀の出土位置 円頭大刀は、Ⅶb層と呼ぶ6世紀後半を中心とする堆積層から出土した。Ⅶb層は、下層の堆積層であるⅧ層を切り込んでいる。6世紀後半の比較的早い時点で、伊場大溝内の水量が急増し、古墳時代中期における川の流れを変えながら新たな流路が形成されたとみられる。この段階の堆積層であるⅦb層は、青灰色砂と灰色粘土の互層で、最深部には澱みのような川底溝が形成されている。川底溝は、ほとんどが砂で埋まっており、6世紀後半（遠江Ⅲ期中葉、TK43型式期）の須恵器が埋没している。川底溝の埋没初期の水流が比較的急激であったことをうかがわせている。

Ⅶb層最深部の川底溝は短期間のうちに埋没し、水流が穏やかになると、伊場大溝の底面には大量の土器が堆積するようになる。円頭大刀も、川底溝の埋没直後の伊場大溝底面から出土している。後述する土器集積SX05も同じ層位に形成されたもので、廃棄時の同時性がうかがえる。円頭大刀が埋没した時点での伊場大溝の規模については、上層部が新しい層位によって破壊されているため厳密な数値を示すことができないが、上層の堆積土層の状況から、幅20～22m、深さ約2.5mの規模であったとみられる。

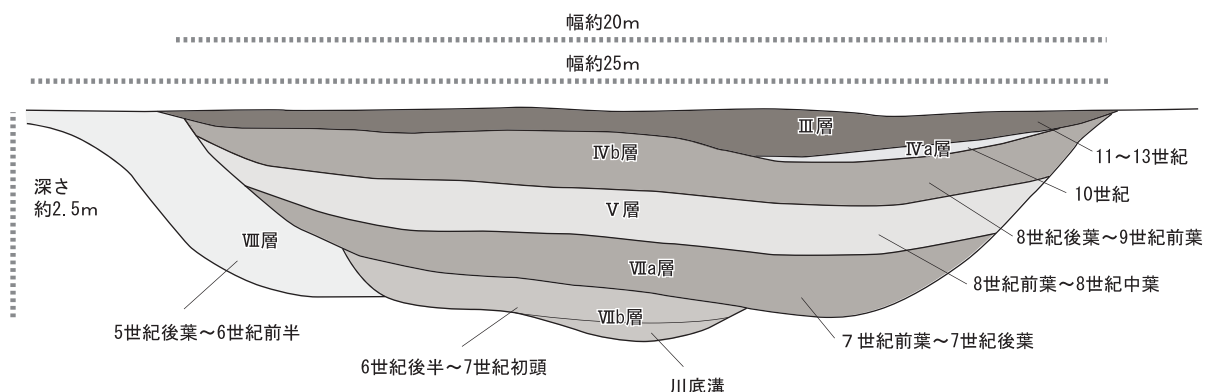
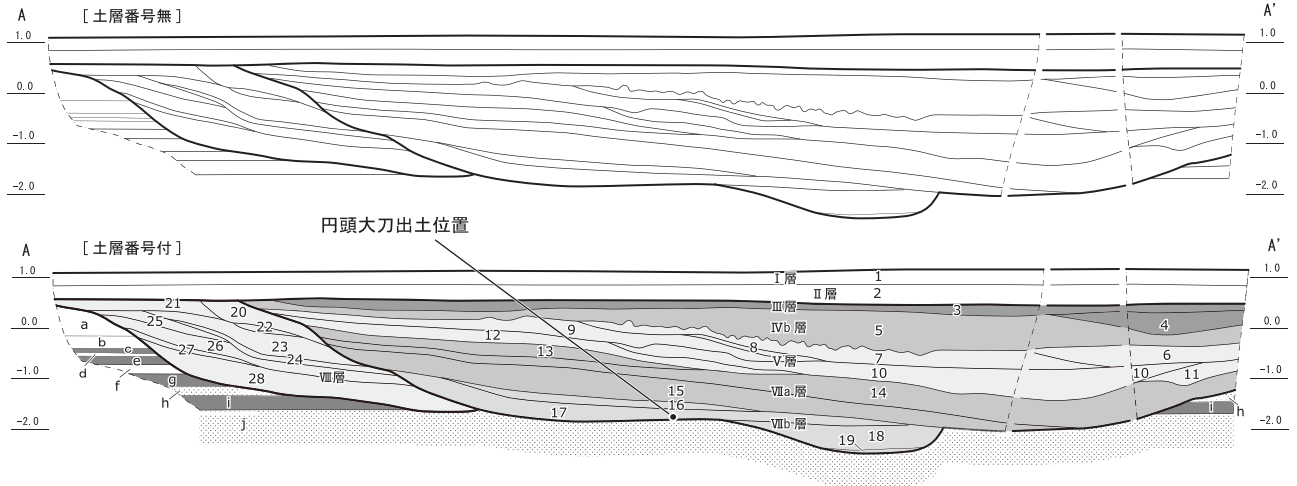
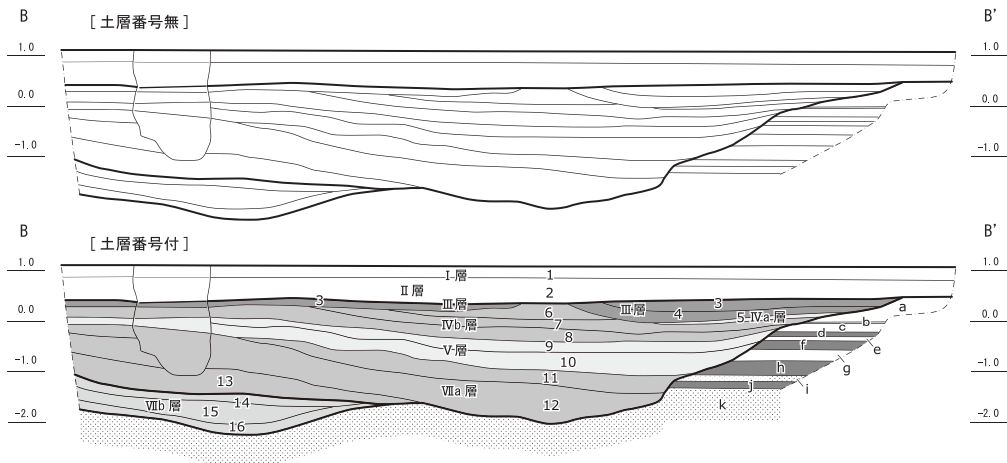


Fig.3 伊場大溝の層位模式図

1 円頭大刀出土地点の概要



大溝上位層	伊場大溝埋土	伊場大溝埋土	伊場大溝埋土	伊場大溝基盤層
I 層	IVb層	VIIa層	VIII層	a (基本層位6層) 暗灰色粘土
1 黒灰色粘土 (水田耕作土)	5 茶灰色粘土	13 灰色シルト	20 緑灰色シルト	b (基本層位7層) 青灰色粘土
II層		14 緑灰色砂と灰色粘土の互層	21 灰色粘土	c (基本層位8層) 黒色粘土
2 青灰色粘土 (水田床土)	V層	15 青灰色砂と黒色粘土の互層	22 青灰色シルト	d (基本層位9層) 白灰色粘土
伊場大溝埋土	6 黄褐色砂		23 灰茶色粘土	e (基本層位10層) 黒色泥炭質粘土
III層	7 灰色粘土	VIIb層	24 灰色粘土 (炭化物を含む)	f (基本層位11層) 白灰色粘土
	8 緑灰色砂 (有機物を多く含む)	16 青灰色砂 (黒色粘土を多く含む)	25 灰茶色粘土	g (基本層位12層) 黒色泥炭質粘土
	9 茶褐色粘土 (有機物を多く含む)	17 灰色粘土 (6世紀の土器を非常に多く含む)	26 灰色砂	h (基本層位13層) 緑灰色砂
3 黒色砂土	10 暗灰色粘土	18 黄色褐色砂 (鉄分着色顕著)	27 黒灰色粘土	i (基本層位14層) 黒色泥炭質粘土
4 茶褐色有機物層 (未分解の植物片を多量に含む)	11 貝層 (貝塚SS04)	19 灰色粘土	28 暗茶褐色粘土 (有機物を多く含む)	j (基本層位15層) 緑灰色砂 (基盤層)
	12 灰白色粘土			



大溝上位置		伊場大溝埋土		伊場大溝基盤層	
Ⅰ層		Ⅴ層		a 暗灰色粘土 (弥生時代水田埋土)	
1 黒灰色粘土 (水田耕作土)		9 暗褐色粘土 (緑灰色砂を多く含む)		b 炭化物層 (弥生時代水田耕作土)	
Ⅱ層		10 暗灰褐色粘土 (有機物を多く含む)		c (基本層位7層) 青灰色粘土	
2 青灰色粘土 (水田床土)				d (基本層位8層) 黒色粘土	
伊場大溝埋土		Ⅶa層		e (基本層位9層) 白灰色粘土	
Ⅲ層		11 暗灰色粘土		f (基本層位10層) 黒色泥炭質粘土 (kg:3100~3200年前を含む)	
3 黒色砂土		12 暗茶褐色粘土 (青灰色砂を多く含む)		g (基本層位11層) 白灰色粘土	
4 茶褐色有機物層 (未分解の植物片を多量に含む)		13 灰色粘土		h (基本層位12層) 黒色泥炭質粘土	
Ⅳa層		Ⅶb層		i (基本層位13層) 緑灰色砂	
5 褐色粘土 (部分的に堆積)		14 青灰色砂		j (基本層位14層) 黒色泥炭質粘土	
		15 青灰色砂と灰色粘土の互層		k (基本層位15層) 緑灰色砂 (基盤層)	
Ⅳb層		16 灰色粘土 (6世紀の土器を非常に多く含む)			
6 灰色粘土 (平安~鎌倉時代水田畦畔)		0		1:150	
7 暗茶褐色粘土 (有機物を多く含む)				10m	
8 暗茶灰色粘土					

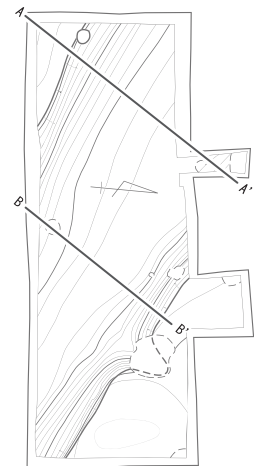


Fig.4 伊場大溝断面図

2 円頭大刀の出土から報告に至る経緯

出土の経過 円頭大刀は、伊場大溝堆積土であるⅦb層（古墳時代後期後半）の精査中、2008年3月18日（火）に出土した。飛鳥時代の堆積土（Ⅶa層）の調査がほぼ完了し、木簡6点の一般公開を含めた現地説明会を実施した2日後の出来事であった。従来調査成果から、飛鳥時代の堆積層の下部に古墳時代中期から後期の遺物を含む堆積層（Ⅶb層、Ⅷ層）があることは明確であったが、重要遺物が出土することは想定していなかった。円頭大刀の出土は全く予想外のことであり、その取り扱いに苦慮したが、発見から取り上げ、保存処理の方針決定まで短期間のうちに進んだことは幸運であった。

Ⅶa層からは大量の土器が出土するが、堆積土の大部分は砂であり、遺物を精査する作業は比較的容易であった。3月18日の午前10時頃、大刀の柄頭部分が砂の中から現れはじめ、午前11時には切先を含めた大刀の全貌が明らかになった。円頭大刀は出土時において柄頭と柄間の木彫の遺存状態が良好であったが、出土地が湿地性の環境下にあるため、その後の取り扱いにかんしては慎重な対応が求められた。このため、出土状態を記録する作業と併行して、取り上げおよび保存処理の方策を探ることになった。さらに、重要遺物の出土を周知するための報道公開も合わせて検討したことから、出土当日は目まぐるしく時間が経過した。

遺物の状態が脆弱であり保存の措置を緊急に施す必要があったことから、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所に円頭大刀の取り扱いについて協力を仰ぐことにし、遺物の取り上げは出土の翌日、3月19日に実施することを決定した。この方針にあわせ、遺物取り上げ作業の直前に報道機関へ現地を公開することを取り決め、調整を進めた。

報道公開 脆弱な出土状態から、遺物の取り上げ作業を最優先したため、円頭大刀の出土状態は報道機関のみに公開した。現地公開は、3月19日（水）午前9時30分から午前11時に実施し、テレビ局2社、新聞社4社の取材を受けた。円頭大刀出土のニュースは、静岡県内では異例の大きさで扱われ、市民の関心も高まった。円頭大刀が出土して数日間は、現場周辺は騒然とした雰囲気にも包まれ、一般の見学者が絶えなかった。



Fig.5 円頭大刀検出作業



Fig.6 報道公開

取り上げ 円頭大刀の取り上げは、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の協力のもと、2008年3月19日に実施した(第3章1)。遺物の状態が脆弱であったことから、硬質発砲ウレタン樹脂で周囲を固め、反転させて取り上げた。円頭大刀の周囲は砂であったことから、取り上げ作業は円滑に進み、作業は1時間程度で完了した。出土の翌日に取り上げるという迅速な対応が、出土時の状態を良好に維持した保存処理を可能にしたといえるだろう。

保存処理 円頭大刀の保存処理は、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所において、2008年5月20日から2009年3月10日にかけて行った(第3章1)。特殊な遺物であることから、遺物の状態と各種分析の結果を受けて、最終的な処理状態をめぐり発注者との協議を繰り返し行った。

保存処理過程では、柄間に張られた銀板、責金具、刀身の彎曲、などの取り扱いについて議論が交わされた。円頭大刀に伴う銀板は遺存状態が劣悪で、砂が除去できないこと、小さな破片に剥離し面的に復元することが困難なことなどの理由で、剥落した状態のままとした。責金具については、出土時の記録から装着位置がほぼ確定できるものの、装着時に隠れてしまう木彫部分があることから、本体との接合はとりやめ、個別に観察できる状態とした。円頭大刀の刀身は、すぐ脇にコンクリート基礎杭が打たれていた関係で圧力がかかり、大きく彎曲していた。このため、保存処理の最終工程において、金属部分の展性を利用して可能な限り彎曲の矯正をはかった。

また、保存処理作業と併行して、木材の樹種同定、金属種の同定にかかわる蛍光X線分析を実施した。分析結果は本書に掲載している(第3章1)。

一般公開 円頭大刀は、保存処理の完了後、2009年6月6日から7月12日の日程で開催した発掘速報展「地下に眠る浜松の至宝－きらめく金装大刀－」(会場:浜松市博物館)において初公開した。また、この企画に合わせた小冊子『浜松の遺跡2』を作成し、発掘調査成果の普及に努めた。展示期間中は、円頭大刀と関連する講演会や展示解説などを開催し、多くの市民の参加を得た。

実測作業 円頭大刀の柄頭や柄間にかんしては、彫刻が極めて精緻であったことから、通常の実測方法を採らず、三次元陰影画像をもとに現物を観察して図化を行った。三次元陰影画像の取得は、株式会社CUBICに委託し、画像は若干の加工を経て本書中にも掲載した(Fig.20)。また、X線透過写真や理化学的な分析結果をもとに、表面に張られた金属板や打ち込まれた鋳の詳細についても図化した。



Fig.7 取り上げ



Fig.8 X線透過写真の検討

第2章 調査成果

1 円頭大刀の出土状態

(1) 出土層位

円頭大刀は自然河川である伊場大溝の底面、 $-1.81 \sim -1.85\text{m}$ の高さから出土した。出土位置は古墳時代後期後半（6世紀後半）を中心とする堆積層、Ⅶb層の底部にあたる。Ⅶb層は青灰色砂と灰色粘土の互層であるが、その下部のほとんどは砂である。堆積層の厚さは50cmほどであり、土器や木製品とともに有機物片が大量に出土する。伊場大溝の形状については、南側斜面から底面にかけてはⅦb層堆積直前の形状を示しているが、北側斜面については、上層のⅦa層によって切り込まれており、本来の形状をうかがうことができない。推定値であるが、円頭大刀埋没時の伊場大溝の規模は幅20～22m、深さ2.5mほどであったとみられる。

Ⅶb層の最下層には川底溝があり、最深部の標高は -2.4m を超える。川底溝は澱みのように所どころに深い部分があり、水流が激しかったことをうかがわせている。この川底溝は短期間のうちに埋没し、なだらかな底面を形成する。円頭大刀が出土したのは川底溝が埋没した直後に堆積した河川の底面上である。円頭大刀が出土した地点の東側には大規模な土器集積SX05が形成されている。また、SX05以外にもⅦb層から出土する土器等の量は極めて多く、685点にのぼる遺物を図示した。

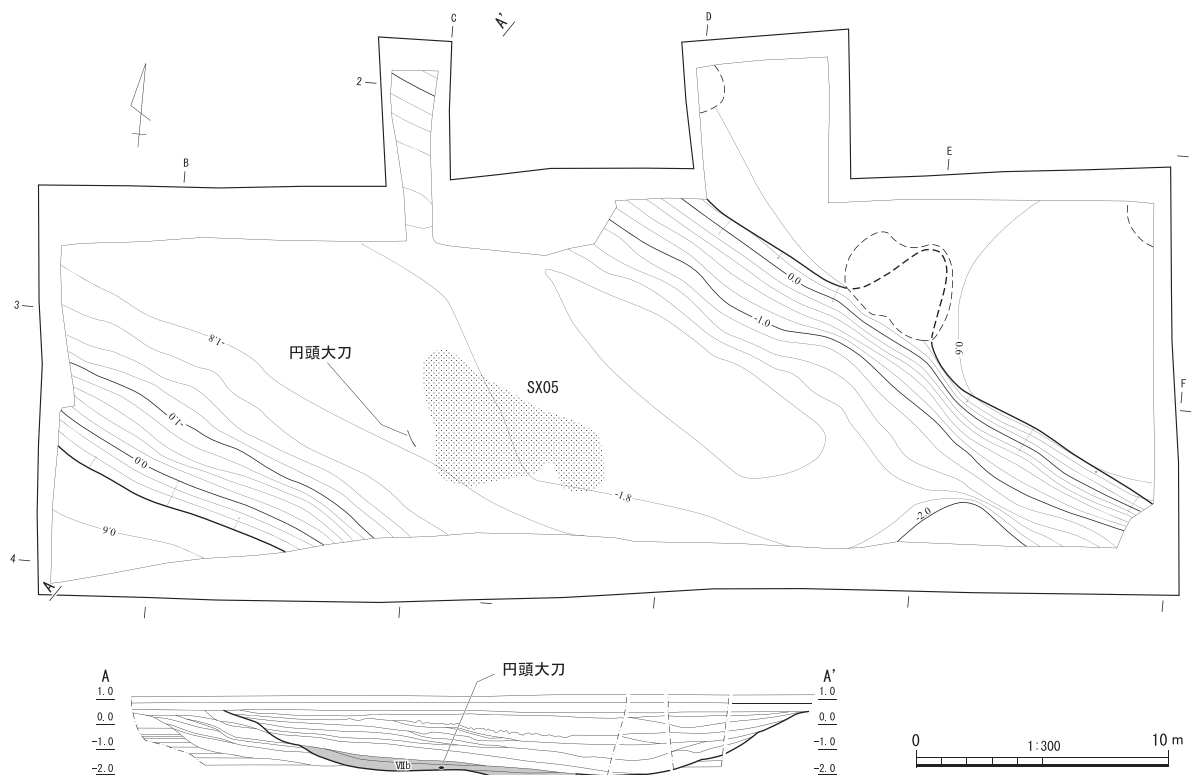


Fig.9 伊場大溝Ⅶb層

(2) 土器集積 SX05

遺物出土状況 (Fig.12・13) 円頭大刀が出土した地点の東に接して、大規模な土器集積 SX05 を検出した。土器がまとまって出土しているのは-1.7m ~ -1.9m の高さであり、その広がり東西 6m、南北 4m ほどである。土器の集積度は非常に高く、隙間無く遺物が広がっている状況である。土器の出土状態は破片も多いが、須恵器の坏蓋・坏身を中心に完形のものも目立つ。また、出土量は僅かであるが、轆羽口や鉄滓が出土している。小破片の土器や轆羽口、鉄滓などは混入品である可能性があるため、すべての出土遺物を SX05 本来の帰属物として捉えないほうがよい。また、時期が異なる遺物も若干ながら出土している。完形の土器が多いこと、出土品の主体的な帰属時期がほぼ限定できることなどを積極的に評価すれば、土器集積 SX05 出土遺物は、なんらかの儀礼に伴い川底に沈めた土器群と捉えることもできる。

出土遺物 (Fig.14) SX05 出土遺物の図示した須恵器のうち、およそ 9 割が坏蓋・坏身であり、その組成が通常の廃棄土器群と比べると特異なものであることが理解できる。古墳時代中期に遡る須恵器も若干、認められるが、大部分は時期的なまとまりがあるといえよう。古い時期の須恵器は下層のⅧ層からの混入品として捉えておきたい。

土師器は煮沸具である甕や甑などを含むが、完形に近い遺存状態を示すのは坏や鉢、高坏である。共伴する須恵器が示す年代観と整合する遺物群といえる。

以上、SX05 から出土した遺物の中心的な時期は陶邑編年の TK43 型式期（遠江Ⅲ期中葉）、実年代でいうなら 6 世紀後葉とみられる。

なお、SX05 からは轆羽口や砥石も出土している。SX05 出土遺物の儀礼的な意義付けを強調するとすれば、これらの生産用具の取り扱いも検討課題である。

円頭大刀との関連 円頭大刀と土器集積 SX05 を一連のものと捉えられる保障は無いが、出土位置に近いことから、両者の同時代性は認めてよいだろう。SX05 出土遺物の年代観によって、円頭大刀の廃棄年代を 6 世紀後葉（TK43 型式期）と捉えることができる。また、SX05 を儀礼に伴う土器集積と解釈するなら、後述するように、円頭大刀を川底に沈めた行為との関連を想定することも許されよう。



Fig.10 SX05 検出状況



Fig.11 SX05 土器出土状態



Fig.12 SX05 遺物出土状態

1 円頭大刀の出土状態

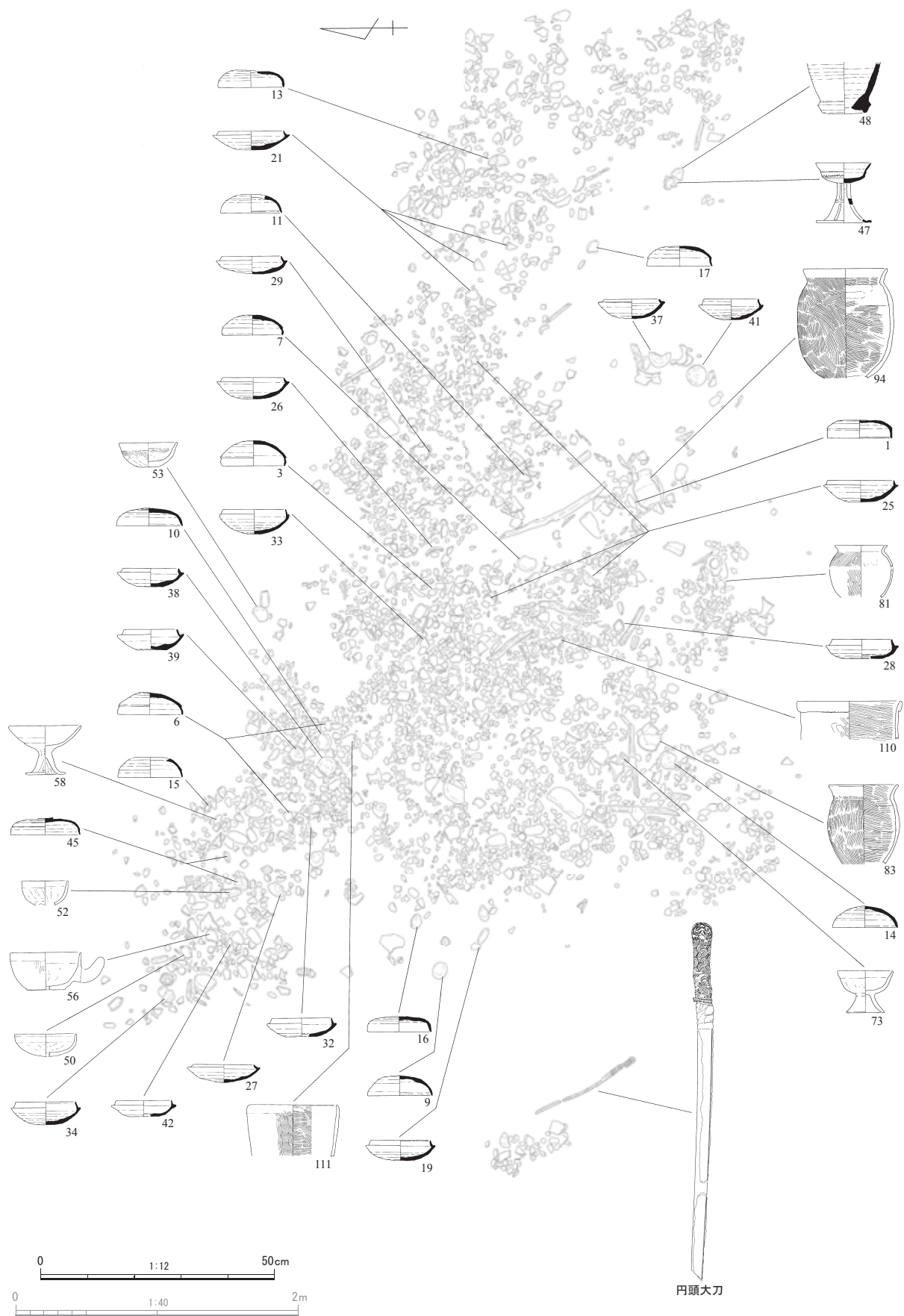


Fig.13 SX05 遺物出土位置対応図

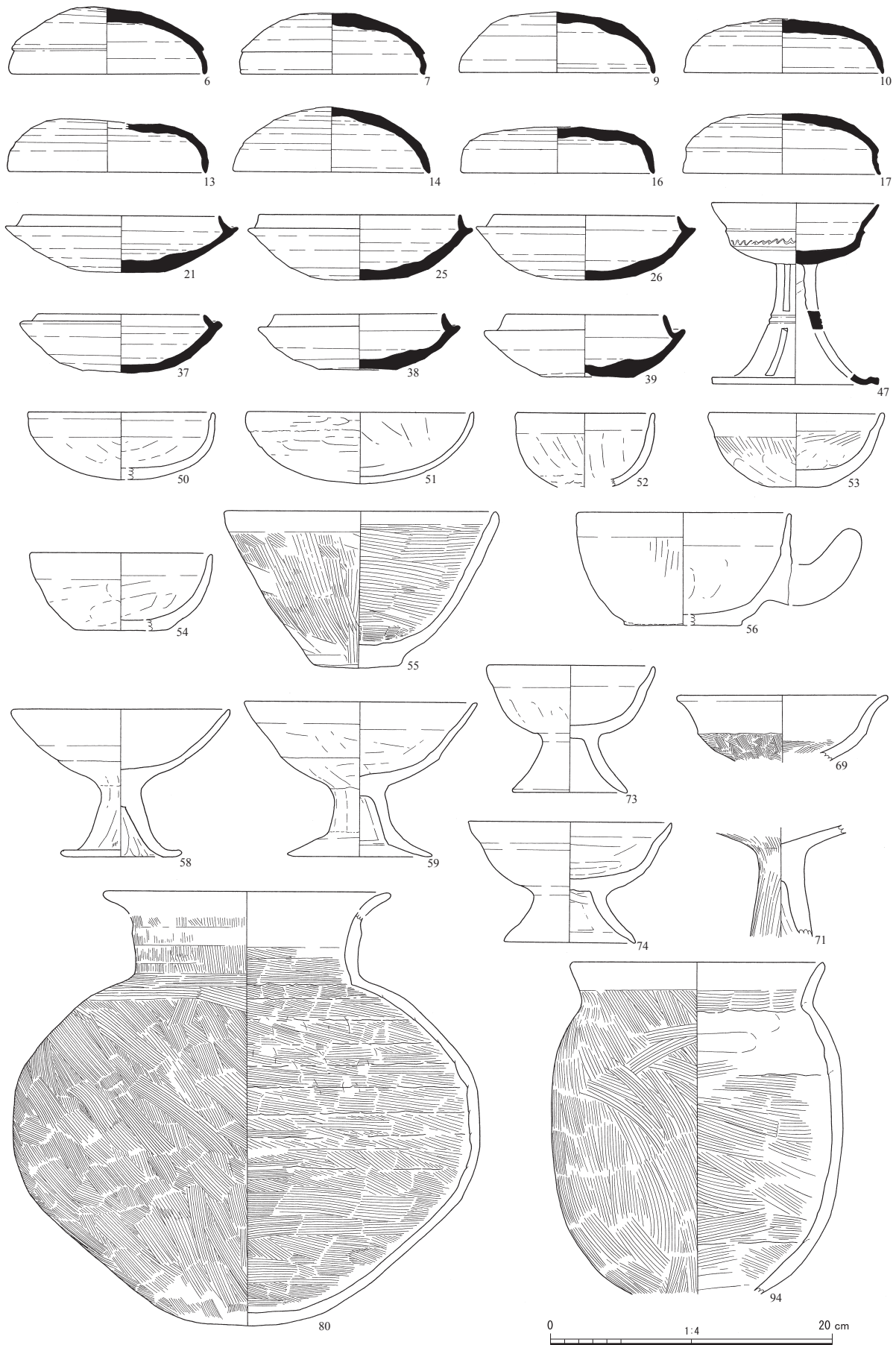


Fig.14 SX05 出土主要遺物

(『伊場大溝編』Fig.19～21より抜粋)

(3) 円頭大刀の出土状態

出土状態 円頭大刀は伊場大溝の南岸に近い底面から、水流の方向に併行して出土した。佩表を上面にして、切先を水源（上流部）に向いている。刀身部分に鞘はみられず、柄頭と柄間のみが遺存していた。柄頭と柄間を含めた先端部分 10cm ほどが本体と遊離していたほか、切先よりの刀身が痩せ細り、欠失していた部分がみられる。これらの欠損は、人為的になされたものではなく、円頭大刀が埋没した後の経年変化によるものと判断できる。刀身は銹化が進んで痩せ細り、大きく彎曲していた。刀身にみられる彎曲は、現代の建物の基礎として打ち込まれていたコンクリート杭の影響とみられ、本来の形状を反映したものではない。

柄間から柄頭の本製部分は遺存状態が比較的良好で、精緻な彫刻模様が観察できた。また、柄頭の金板の遺存状態は極めて良好で、金色の発色が鮮やかであった。いっぽう、柄間を覆っていた銀板の遺存状態は劣悪で、砂との同化が著しく、細かな薄片となってその多くが剥落していた。

柄間の刀身寄りには金板を被せた模様帯がみられたが、模様帯と重なる位置に銅地金張の責金具が遺存していた。責金具は別のところから移動したとは捉えられないことから、柄間の刀身寄りの模様帯の上に重ねてはめられていたものと判断できる。

埋没経緯 大刀の鞘がみられないこと、水流の方向に合わせて伊場大溝の底面から出土していることなど、円頭大刀は何らかの意図をもって扱われていたとみられる。円頭大刀は廃棄処分されたものではなく、儀礼的な意味をもって意図的に伊場大溝内に沈められたものと判断できる。円頭大刀に隣接して検出した土器集積 SX05 も何らかの祭祀の痕跡と捉え、円頭大刀を使用した儀礼との関連を考えてもよいだろう。

川底溝を伴うⅦb層の堆積初期は水流が激しかったと想定できるが、比較的短期間のうちに水量は落ち着いたとみられる。穏やかになった川の底に向かって装飾大刀を抜き身にして沈めた儀礼の意味は、大きな検討課題である。

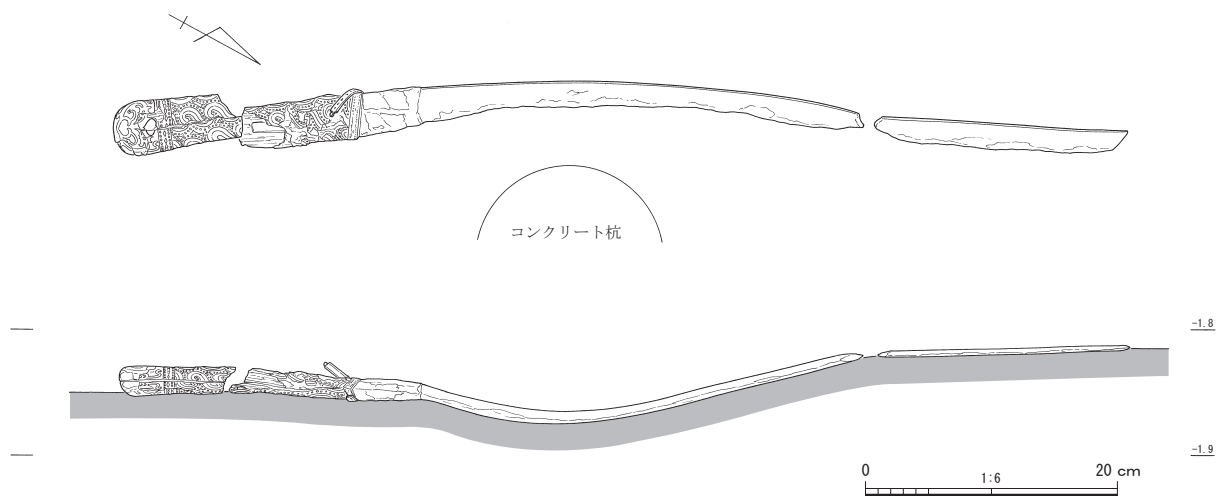


Fig.15 円頭大刀出土状態

2 円頭大刀の詳細

(1) 大刀の概要

大刀の刀身に彎曲がみられるが、ほぼ全体形をうかがうことができる。大刀は刀身、柄、鞘から構成されるが、出土状態からも明確なように、本例には鞘は伴わない。柄には鐐がみられず、呑口式で鞘におさまっていたとみられる。柄は柄頭、柄間、鐐に分けられ、木製の柄木を本体として、金や銀の板が被せられている。柄頭と柄間の木材は一体のものであり、円頭形を呈する柄頭の形状から、本例は円頭大刀に分類できる。

柄頭や柄間は、木芯に彫刻を施し、これに金銀板を押し付けることで模様を浮き出させる木彫金銀張技法によって装飾されている。この特徴から、本例の正式な名称は「金銀装円頭大刀」といえる。なお、本書では記述を簡素化するため、本例を単に「円頭大刀」と呼称している。

(2) 刀身の詳細

概要 (Fig.16) 刀身は刃部と茎に分けられる。刃部と茎の境界には関がある。いずれも復元値であるが、刀身の全長は 76.5cm、刃部長 53.6cm、茎長 14.2cm 程度と推定できる。

刀身は鉄製であり、湿地性の埋没環境の影響で遺存状態が劣悪である。とくに鉄の厚みが少ない刃側や茎は錆により痩せ細り、切先から 20cm 辺りに至っては背側を含めて完全に消失していた。消失部分の補填は、出土状態をもとに復元している。刀身が遺存している部分についても、非常に脆弱であり、砂と表面の錆が同化してかろうじて形状が保たれている状態であった。このため砂を除去するような錆落としは控えている。なお、保存処理の過程で X 線透過写真を撮影したが、刀身には象嵌などは認められない。

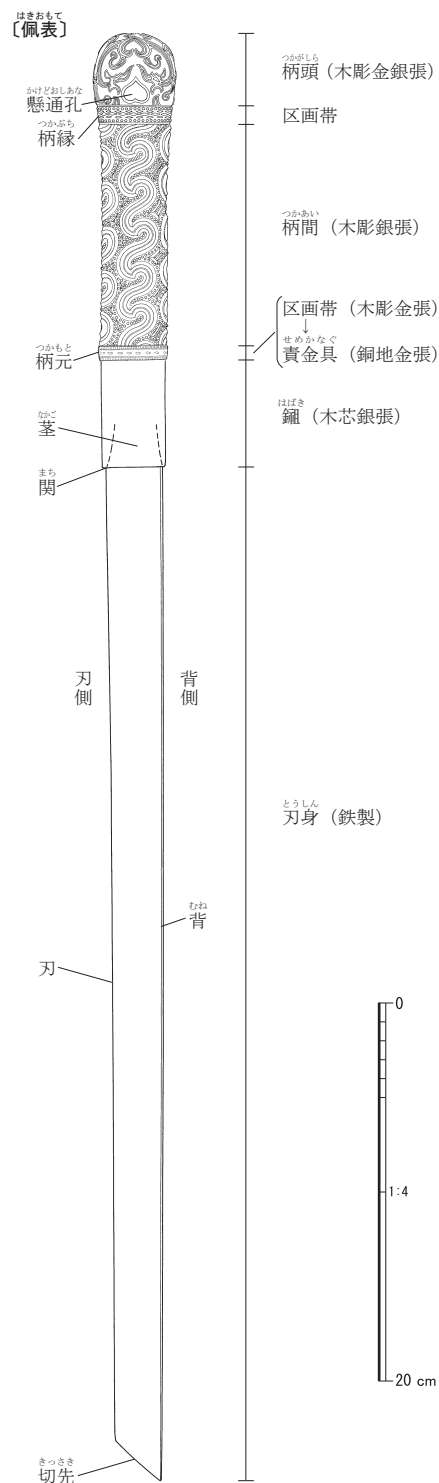


Fig.16 円頭大刀部分名称



Fig.17 円頭大刀実測図

刀 身 刀身は全体的に刃側に反りかえり、いわゆる内反りの状態を呈している。しかし、この遺存形状は、建物基礎杭の打ち込みによる圧力の影響が強く、刀身本来の形状を反映しているものとはいえない。切先の遺存状態も決して良好とはいえないが、直線的な切刃造とみられる。刀身の幅は関の部分が最大で3.2cm、切先部分では推定で2.8cmほどであったとみられる。背の厚さは関の部分で0.8cm程度、切先部分で0.6cm程度である。

関と茎 関の形状は、表面の観察ではまったく不明である。X線透過写真によって、鉾の先端部分に対応して関があることがろうじて判明する(PL.6-1)。関は刃側については確実に認められるが、背側にあるかは必ずしも明確ではない。Fig.17では復元的に両関の可能性を示した。関の形状も明らかにできないが、刃側の関はX線透過写真を判読する限り、なだらかな曲線を描くと推定できる。

茎の形状もX線透過写真によってろうじてうかがえる程度で、正確な形状は不明瞭である。とくに茎の先端は、柄間の分解、接合時に当該部分を観察したが、既に消失していた。茎先端の位置は柄木内部に彫り込まれた茎を挟む挟み込みから推定した。X線透過写真の検討を通じて、明確な目釘の痕跡は見出せなかった。柄木表面の観察でも、目釘の位置は確認できていない。鉄の遺存状態が悪いために目釘の痕跡が観察できない可能性が高く、目釘が当初から設けられていなかったとは判断できない。

(3) 柄頭の詳細

概 要 (Fig.19) 柄頭は柄間と一体の柄木で作られ、表面には金板が被せられている。木芯部分にあたる柄木は表裏二つの部材に分かれ、佩表と佩裏の両側に向かい合う2匹の龍が彫刻されている。柄木の木材は、分析の結果、カエデ属と同定された。柄頭部分の長さは3.7cm、幅は4.4cm、厚さは2.4cmである。佩表、佩裏ともに縦に亀裂が走るが、龍文の詳細は充分にうかがうことができる。また、佩裏の背側を中心に金板を2枚重ねた痕跡がみられ、補修された可能性が指摘できる。

形 状 柄頭は流麗な円頭形を呈する。現状は表裏の柄木の間に僅かな空隙があるが、本来は隙間無く繋がっていたとみられる。柄頭の幅は柄間側がやや狭く、中央部分が最も広い。側面形状は背側が刃側と比べて厚みがあり、卵形を呈している。

懸通孔 柄頭の中央には心葉形(猪目形)の懸通孔があげられている。懸通孔の周囲には縁取りの隆帯がめぐっている。懸通孔内面は本地のままで金属板は被せられていない。

龍 文 柄頭の佩表と佩裏には懸通孔を挟むように2匹の龍が彫り出されている。胴体が円頭部の縁を巡り、尾は2匹の龍が絡み、懸通孔と並ぶような心葉形を描いている。龍文の大部分は、彫り出された細い凸線で表現されている。佩表、佩裏ともにまったく同じ

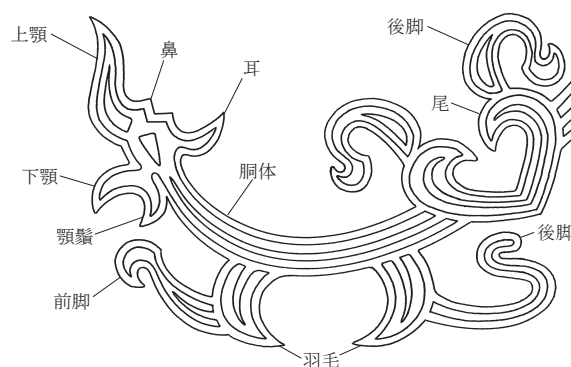


Fig.18 龍文各部名称

2 円頭大刀の詳細



Fig.19 柄頭・柄間詳細図



Fig.20 柄頭・柄間三次元陰影画像

模様が配置されているが、佩表側と佩裏側では、模様の配置に若干の違いがみられる。佩表側は均整がとれた対称形が意識されているが、佩裏側では尾が絡む心葉形の部分や木口面の後脚の位置が中軸上から外れている。また、頭部や脚部などにも細かな表現の違いが認められる。

龍は大きく開いた口が印象的である。口内には牙や舌はみられない。上顎と下顎は緩やかな曲線をもって上下に大きく反り返る。顎鬚は比較的大きく反り返り、下顎と対をなしている。頭部上側には三角形を呈する突起が2箇所みられる。先端側の突起は鼻を、目の上の突起は角の付け根の膨らみを表したものと捉えられる。角は表現されていない。角がない代わりに、耳が頭部の後方に大きく突出している。目は頭部の輪郭線に合わせて、比較的大きな三角形で表されている。

頸から胴体、尾にかけてはすべて3本の凸線で表現されている。タテガミや背鰭などはみられない。尾は対になるもう一匹の龍の尾と絡んでおり、中軸の上端に懸通孔と並ぶような心葉形の装飾

模様を描いている。

前脚は1箇所、後脚は2箇所みられる。脚の先端は屈曲を経て鉤状に描かれているが、明確な鉤爪などは表現されていない。前脚と後脚の一つは、羽毛を伴って側面に対となって配置されている。羽毛は3本の凸線で円頭部側面を楕円形に巡り、脚部より大きく表されている。尾先端に接続する後脚の一つは、龍の頭部上に配置されている。この後脚の付け根の表現は、佩表と佩裏で若干異なる。佩表では、縁取り線の内側が頭部内面と同様に島状に表現されているが、佩裏では線で表現されている。

金板 (Fig.21) 柄頭の表面には、金製の薄い板が張られている。この金板は柄頭の上部を中心に良好に遺存しているが、剥がれた箇所も多く認められる。とくに柄縁の区画帯近くの剥離が顕著であり、柄木の表面が露出している。遺存している金板の縁辺部は銀に由来する錆が付着し、黒色化している。また、柄頭表面には銀板の小破片が遺存している部分もある。後述するように、本例は製作後のある段階で補修されていると判断できるが、製作当初の金板がどのような特徴を備えていたかは不明である。金と銀双方の色調をもつ1枚の金属



Fig.21 金属板の遺存状態

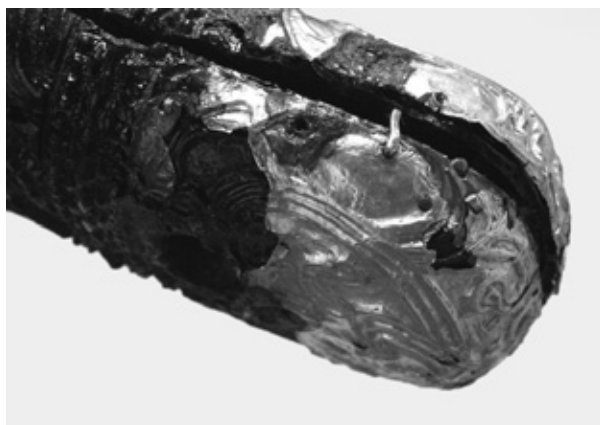


Fig.22 補修痕 (1)

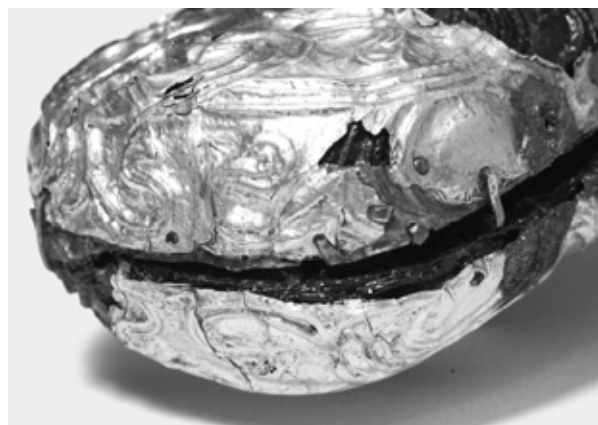


Fig.23 補修痕 (2)

板で覆われていた可能性があるが、製作技法を含め検討課題とせざるをえない。

補修痕 (Fig.22 ~ 24) 柄頭には金板以外に、金と銀の合金や銀を用いた板と鉾がみられる (材質の詳細は第3章1参照)。佩裏の背側から木口面にかけては、金と銀の合金を使用した薄板が金板の剥がれを内側から充てるようにして張られている。また、薄板が充てられた部分を固定するため、同じく金と銀の合金を用いた鉾が打ち込まれている。この鉾の中には鋸状の形状を呈するものがあり、一方の端部は反対の佩表側に至っている。このことから、鋸状の鉾は、佩表と佩裏の柄木を合わせる目的もあったことが知られる。

柄頭に張られた銀板は、佩裏の下端部に数片遺存している。この部分には銀板を固定するための銀製の鉾が打ち込まれている状態が確認できる。この他、金属板は遺存していないが、銀製の鉾が刃側を中心に数多くみられる。この部分に張られていた銀板を固定するためのものとみられよう。

金と銀の合金が張られた部分は、金板の剥がれを内側から充てて補修したものと解釈できる。無造作に打たれた鉾は補修の実態を伝えている。銀板や銀鉾も同じ時に補修された痕跡とみてよいだろう。

(4) 柄間の詳細

概要 柄間は柄頭と一体の柄木で作られ、表面には銀板が被せられている。模様の構成は柄頭と大きく異なる。柄間は4面に連続波頭文が刻まれ、その間の空間は連珠文が施されている。柄間の遺存状態は佩表側がやや悪く、柄縁寄りには縦に亀裂が入り、柄元寄りも細かく分離している。これに対して、佩裏側は比較的遺存状態が良く、連続波頭文の詳細をうかがうことができる。形状の破損は柄元側が顕著で、押し潰されたように破損し、柄縁の端部は大きく変形している。

柄間と柄頭の境界 (柄縁) と柄間と鐔の境界 (柄元) には貴金具状の区画帯がみられる。また柄元の区画帯には貴金具が重ねられている。貴金具は製作後の補修によって装着された可能性があり、現況は大刀本体から外して保管している。



Fig.24 鉾の位置



Fig.25 柄間の詳細

柄間 柄間には連続波頭文と連珠文、およびその間の空間を埋める台形や三角形の模様が施されている。柄間の模様が刻まれている長さは11.5cmほどである。表裏2つの部材に分けられた柄木にこれらの模様が彫刻された後、銀板が被せられ、凹凸が打ち出されている。銀板の遺存部分は僅かであるが、佩裏側で銀板の両端が重ねられ、鋏を打って固定していることがX線透過写真によって判明する。柄間に張られた銀板は遺存状態が劣悪であることから、剥落

した破片のまま保管している (Fig.26)。また、断面構造調査によって、柄木の表面には漆が塗布されていることが判明した。この漆は彫刻の表面を被覆し保護することに加え、銀板を接着するためのものであった可能性がある。

柄間に用いられた主要な模様は、連続波頭文である。連続波頭文は佩表、背側、佩裏、刃側の4方向に同一技法で刻まれている。背側と刃側の連続波頭文は両側の柄木にまたがるが、模様は互いに正確に繋がるように割付がなされている。連続波頭文は中央の沈線を中心にして、その両側に断面がゆるやかな山形を呈する模様帯がめぐっている。このため、連続波頭文は併行する5本の屈曲線によって構成される。山形の模様帯の頂点の線と裾の線は併行しておらず、連続波頭文の収束部分では狭く、円形の部分では広く設定されている。連続波頭文の5本の屈曲線は佩表側が佩裏側と比べ丁寧に割付がなされており、精緻な印象を受ける。



Fig.26 剥落した柄間の銀板
1: 表 2: 裏

連続波頭文に併行して連珠文がみられる。珠文は直径1mm程度であるが、詳細に観察すると、球形を呈しておらず、多面体で表現されている。1本の凸線を彫り出した後、刻みを入れて連珠文を表現した結果であると捉えられる。連珠文の大きさはほぼ一定であり、全体では魚々子文風に観察できる。

連続波頭文と連珠文の間には台形や三角形の図形を描いた模様がみられる。この模様は形態そのものに意味があるわけではなく、連珠文で埋めきれない空閑地を飾るために設けられたものとみられる。ここでは「図形文」と仮称しておきたい。図形文は、模様の空白地に合わせて形態が異なり、台形であったり、三角形であったりしている。また、図形文が大きく形作られる箇所にはその内側を相似形に窪めた彫刻が施されている。

以上の観察結果から、柄間に刻まれた各種の模様

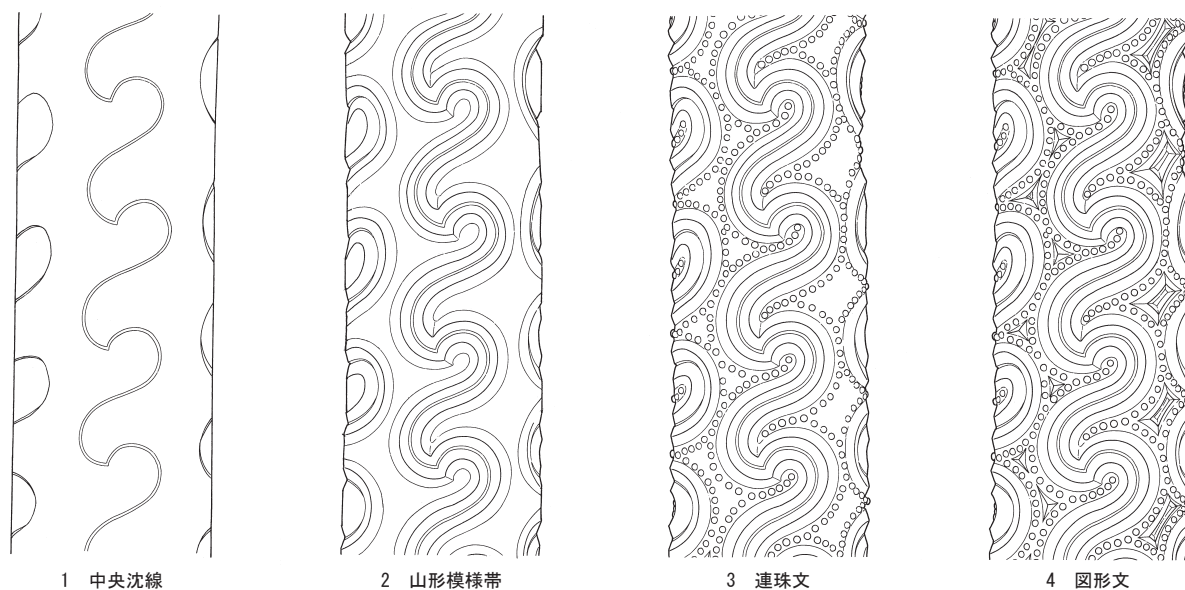


Fig.27 柄間の推定割付順序

の割付は、1) 連続波頭文の中央沈線、2) 連続波頭文の山形模様帯、3) 連珠文、4) 図形文の順であったと想定できる（註1）。

区画帯 柄縁と柄元の2箇所に連続菱形文と連珠文からなる区画帯が認められる。柄縁の区画帯の幅は0.9cm、柄元の区画帯の幅は0.7～0.8cmである。区画帯は連珠文で縁取った中を連続する菱形文で充填している（双連珠菱形文）。菱形文は、中央にやや大型の主列があり、その両側にやや小さめの副次的な列がめぐるといふ3列構成を採用している。

柄縁側の区画帯は表面に張られた金属がすべて剥落しており、金板か銀板のいずれが用いられていたか不明である。いっぽう、柄元側の区画帯は金板が良好に遺存している。対称性を重視していたなら、柄縁側の区画帯にも金板が張られていたと想定できるだろう。

なお、柄縁側の区画帯は木彫部分の特徴が明確に観察できるが、柄元側の区画帯は木彫部分が押し潰され、模様の詳細をうかがうことが難しい。これは、後述するように、柄元側の区画帯に重ねて責金具がはめられたことに起因する可能性が高い。

責金具 銅地金張の責金具が柄元の区画帯と同じ位置から出土した。幅0.7cmほどの帯状の製品で、スカシや刻みを施した銅板を折り曲げ、金板を上から被せて押圧し、銅板の模様を打ち出す技法で製作されている。裏側には金板を巻き込んだ部分が明瞭に観察できる。

責金具の両端には連続した刻文（双連珠文）がめぐり、沈線で区切られた中央には連続する菱形文がみられる（双連珠菱形文）。双連珠文と沈線は芯材となる銅板表面に彫り込んで形成されているが、菱形文は銅板を切り抜き、金板を押し込んでいる。責金具の片側の端部には、刃側で端部どうしを結束するための円形の突起がみられる。円形の突起部分には穿孔がみられ、も

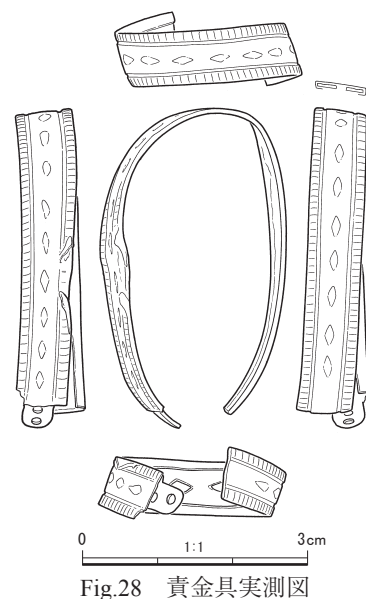


Fig.28 責金具実測図

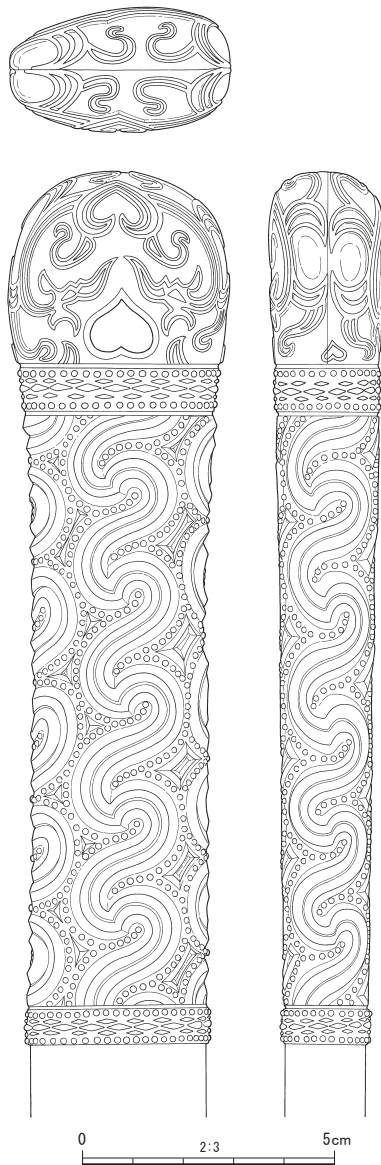


Fig.29 円頭大刀復元図

う一方の端部に孔をはめこんで端部どうしを留めていたことが分かる。X線透過写真では、円形突起がみられない端部に目釘状の突出が観察できる。

この責金具は、出土状態から、柄元の区画帯の上に重ねて装着されていたものと捉えられる。責金具が重ねられていた柄元の区画帯は、表面に張られた金板の遺存状態は比較的良好的なもの、木彫部分は潰れが顕著で模様が不鮮明である。区画帯に重ねた責金具を締めつけた際に、木彫部分が潰れたものと捉えれば、この遺存状態も整合的に説明できる。この解釈が妥当だとすれば、責金具の装着は製作当初のものではなく、製作後のある段階で補修された際になされたものといえるだろう。柄間に用いられた柄木が表裏に分離することを防ぐ目的があったとみられる。責金具を用いた補修の時期は、柄頭における補修と同時期と捉えておくのが穏当であろう。

釦の特徴 釦は木芯部に銀板が被せられている。その長さは5cm程度である。釦の木芯部と柄間の柄木が同一部材であったか、必ずしも明確にできない。釦の表面には銀板が張られている。この銀板も碎片化しており、詳細な構造をうかがうことができない。

(5) 小 結

本例は、日本列島内出土資料では関係が追えない特徴を随所にもつ。鐔をもたない呑口式の構造に加え、全長が短い円頭柄頭の形態的特長、心葉形を呈する懸通孔、龍文の表現方法などは、朝鮮半島南部から出土する装飾大刀に類例が認められる。柄間の連続波頭文は、6世紀末以降の装飾大刀の柄間や鞘にみられる連続渦文の起源になるものと考えられる。連続波頭文における立体的表現の淵源地は不明といわざるをえないが、中国北魏の石製台座や同じく北魏の金銅仏の後背、台座に類似した表現が認められる。ただし、本例と北魏を結びつけるには隔たりが大きいので、中継地を想定するのが妥当であろう。以上のことから、本例は朝鮮半島製と判断できる。製作時期は、朝鮮半島における装飾大刀の変遷観から、6世紀前半とみられる。

本例は製作後に金属板を加え、鋳を打ち、責金具をはめ込むという補修がなされている。双連珠菱形文を用いた責金具は日本列島出土品のみならず、朝鮮半島の出土品にも認められる。補修を行った地域は、朝鮮半島であるか日本列島であるか、確定させることは難しい。

註1 Fig.27に示したものは割付の順序であり、実際の彫刻の順を示すものではない。とくに連珠文と図形文の彫刻の順序は割付順と逆転する可能性もある。

第3章 後 論

1 円頭大刀の保存処理と自然科学的調査

(1) 保存処理の概要

円頭大刀は、財団法人浜松市文化振興財団の依頼により財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所保存処理室が、平成20年3月19日に現地でのり上げを行い、平成20年5月20日から平成21年3月10日まで木製部分および金属部分の保存処理を行った。とり上げおよび保存処理の工程と、それに伴う分析等の結果を記す。

なお、本節にかかわる文責は次のとおりである。

(1)～(3)②・(4):西尾太加二(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所)、(3)③:大森信宏(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所)、(5)・(6)大森信宏・村上隆(京都国立博物館)

(2) 取り上げ

出土時点での円頭大刀の状態は、木製部分の柄部の塗膜および彫刻はよく残存していたが、大きく二分割されており木質自体の強度は低下しているように見受けられた。また、金属部分は鉄製刀身がひどく彎曲し、刀身に交差して接していた木片の影響で、この部分の刀身が3cmほど欠失しているなど、遺存状態はきわめて不良であり、かなり脆弱化しているように見受けられた。

とり上げの工程は、円頭大刀の周辺土を除去して柱状に残し、円頭大刀をアルミ箔等で保護する。次いで、硬質発泡ウレタン樹脂で周囲を固め、反転させてとり上げた。



Fig.30 周辺土の除去作業



Fig.31 柄の劣化状態



Fig.32 アルミ箔での保護



Fig.33 ウレタン樹脂の流し込み作業



Fig.34 ウレタン樹脂による固定



Fig.35 反転取り上げ

(3) 保存処理

① 解体

1) 全体ウレタン解体：出土時の下面方向より鋸、カッター、へらなどを用いウレタンを解体し、遺物を取り出した。



Fig.36 ウレタン解体前



Fig.37 ウレタン解体作業

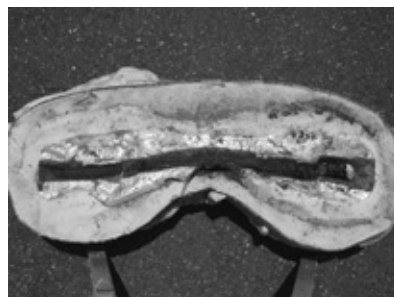


Fig.38 円頭大刀検出後

② 木製部分の保存処理

- 2) 事前調査：処理前写真を撮影し、資料の処理前記録を作成。
- 3) クリーニング：資料に付着している不要な土砂を除去。
- 4) 安定化処理：ポリエチレングリコール（PEG）50%水溶液に約2カ月間浸漬した後、 -40°C で凍結させ、真空状態で乾燥させた。



Fig.39 クリーニング作業



Fig.40 PEG 浸漬作業

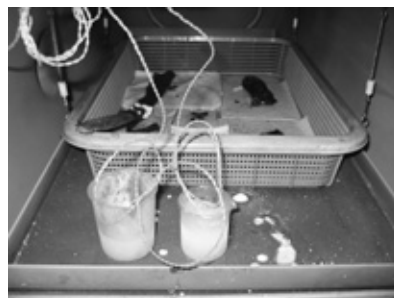


Fig.41 真空凍結乾燥作業

③ 金属部分の保存処理

- 5) 事前調査：処理前写真、X線写真を撮り、資料の処理前記録を作成。
- 6) クリーニング：円頭大刀に付着している不要な土砂および錆等を除去。
- 7) 安定化処理：安定化処理剤を浸透させ、腐食生成物を化学的に安定させた。薬剤および工程は次のとおりである。
 - ① 脱塩処理：水酸化リチウム 0.1%アルコール溶液に1か月間浸漬した。
 - ② 安定化処理剤：ジシクロヘキシルアミン亜硝酸塩（ダイカン）3%アルコール溶液およびチタネートカップリング剤 2%キシレン溶液に浸漬した。
- 8) アクリル樹脂（パラロイド B-72, 10%キシレン溶液、およびプライマル MV-23）を減圧含浸または塗布することで強化処置した。

9) 全体修復：欠失部はガラスクロスを芯材にしてエポキシ樹脂で補填し、整形と補彩を行った。木質部分の遺存状態は比較的良好であり、保存処理による収縮・変形はなく良好な処理結果を得た。

金属部分の遺存状態はきわめて不良であり、保存処理にあたっては現状の維持につとめ、錆等の除去は最小限にとどめた。



Fig.42 金属部分保存処理前

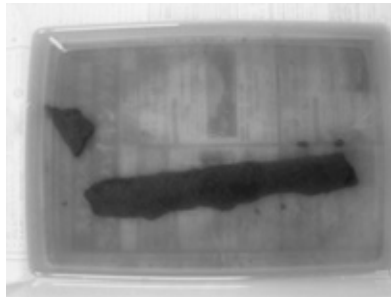


Fig.43 安定化処理作業

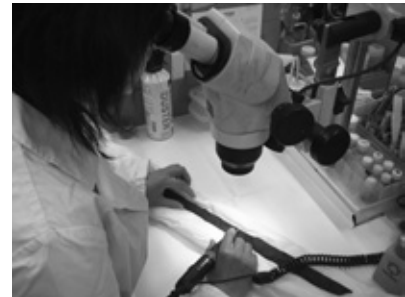


Fig.44 修復作業



Fig.45 保存処理後

(4) 木質部分の調査

① 樹種同定

1) 試料および方法

樹種同定用のプレパラート標本は、柄の合わせ部分から数ミリ四方のブロックを採取し、その試料から両刃カミソリを用いて木口、放射、接線の各断面方向の切片を切り出した。封入はガムクロールで行った。樹種同定は、生物顕微鏡によって40～400倍で観察し、現生標本および文献資料と比較しながら行った。作製した標本は、当研究所保存処理室で保管している。

以下に同定に利用した材の解剖学的特徴を示す。

2) 同定結果

カエデ属 *Acer L.* カエデ科

20～80 μm の丸い道管が単独あるいは放射方向に複合してややまばらに分布する散孔材。道管は単穿孔で、内壁にらせん肥厚が認められる。道管内部にはしばしば褐色のゴム様物質が詰まることがある。木繊維の壁孔は不規則に変化し、横断面で雲紋状を呈する。木部柔細胞は年輪の後半に散在し、シュウ酸



Fig.46 サンプリング箇所とサンプル

1 円頭大刀の保存処理と自然科学的調査

カルシウムの結晶を含むことがある。放射組織は1～数細胞幅である。

以上の形質によりカエデ属と同定した。

カエデ（イタヤカエデ）は北海道から九州、中国、朝鮮半島の温帯に分布する落葉高木で、樹高15~20m、幹径50~60cm。材は緻密で靱性がある。出土材としては建築材、工具などに用いられている。

3) 木材組織の顕微鏡写真

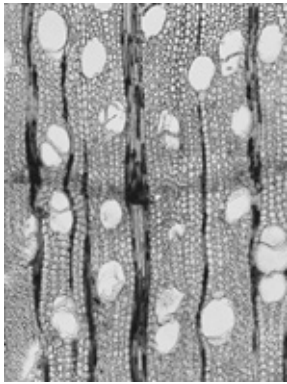


Fig.47 木口 (×50)

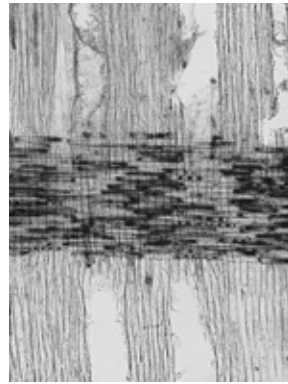


Fig.48 柁目 (×50)



Fig.49 板目 (×50)

② 塗膜断面構造調査

1) 試料および方法

塗膜断面構造調査のために図に示す箇所から2mmほどの切片をサンプリングした。プレパラート標本は研磨法により作製した。研磨法とは、試料小片を透明なエポキシ樹脂に埋め込んだのち、透過光で検鏡できる厚さまで研磨する方法である。作業工程は、目の荒い200番の耐水サンドペーパーから研磨し、番数を上げてゆき2000番までサンドペーパー上で研磨する。その後、研磨粉（アルミパウダー）4000番を溶かした水を含ませた布の上で鏡面仕上げを行う。



Fig.50 サンプリング箇所

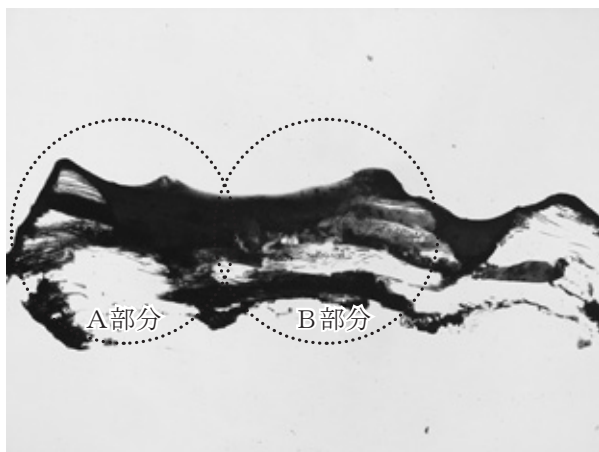


Fig.51 漆塗膜の断面構造

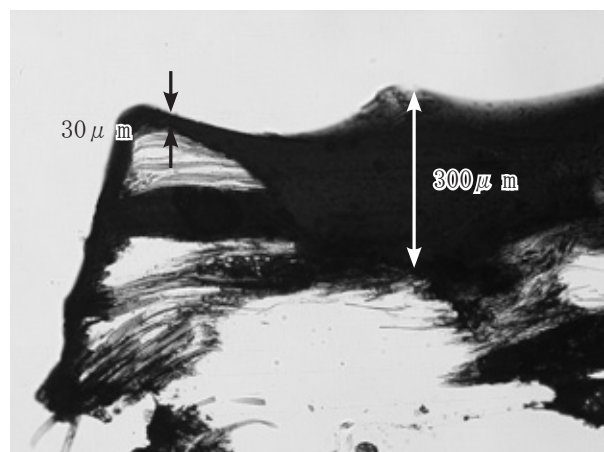


Fig.52 A部分拡大

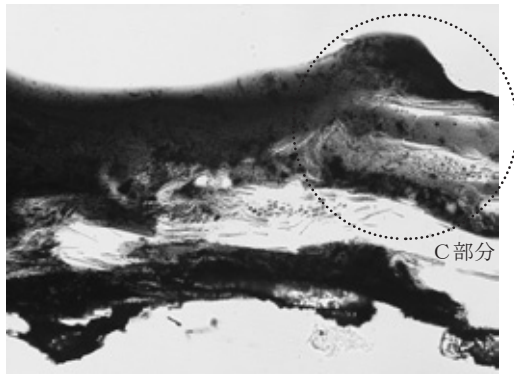


Fig.53 B部分拡大

Fig.54 C部分拡大
(道管と放射組織に浸透する漆)

2) 塗膜の断面構造

木質の直上に黄褐色を呈する漆層が1層塗られている。下地は認められず、木地に直接塗っている。層の厚さは薄いところで $30\ \mu\text{m}$ 、厚いところでは $300\ \mu\text{m}$ を測る。

木材の細胞組織内に漆が浸透している箇所が認められる。

(5) 金属部分の調査

① X線撮影調査

X線写真からは、刀身全体がサビによってやせ細っている様子、柄間には粉碎しているが何らかの金属板が貼られていること、柄頭には金板以外にも何らかの金属板が貼られていること、鍔金具表面の金は薄い板状のものが巻かれていること、などが読み取れる。

これらを踏まえて、それぞれの金属部材に関して材質分析調査を2回実施した。



Fig.55 円頭大刀全形X線写真

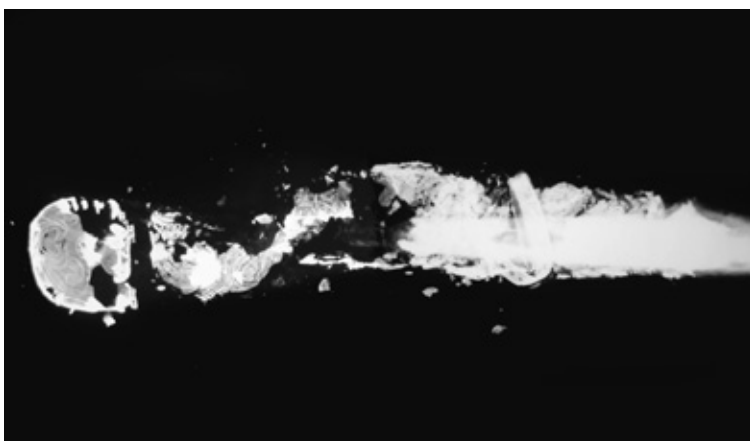


Fig.56 円頭大刀柄部X線写真

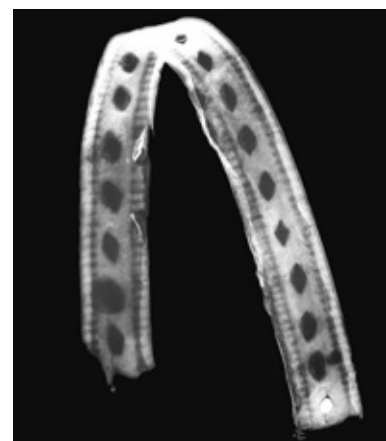


Fig.57 円頭大刀鍔金具X線写真

② 蛍光X線分析調査

材質分析 1 回目 1 回目の材質分析は、円頭大刀の主要部分に対して簡易的な方法で実施した。分析装置はスペクトロ社製小型蛍光X線分析装置、SPECTRO xSORT、蛍光X線はシリコンドリフト検出器で構成元素の分析を行った。

円頭大刀および付属装飾具の材質分析は以下の6箇所を選択して行った。分析の概要を併記する。



Fig.58 蛍光X線分析作業 (1)



Fig.59 蛍光X線分析作業 (2)

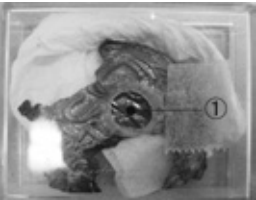


Fig.60 分析測点 (1)

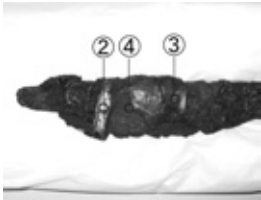


Fig.61 分析測点 (2)

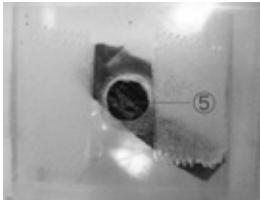


Fig.62 分析測点 (3)



Fig.63 分析測点 (4)

1- ①: 柄頭金装部 (分離)

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	金 (Au)/%	鉛 (P b)/%
2.79	< 0.022	< 0.026	21.2	< 0.044	71.0	0.64

柄頭金装部の中央を狙って測定。少量の銀も検出されているが、おおむね良好に金が検出されている。

1- ②: 金装責金具 (付着)

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	金 (Au)/%	鉛 (P b)/%
11.2	15.4	< 0.029	2.41	< 0.027	70.9	< 0.059

金装責金具は中央を狙って測定。少量の銅が検出されており、責金具の部材として銅が使用されているかもしれないが、観察上は金銅板のようではない。

1- ③: 円頭大刀付着黒色板

銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%
0.31	< 0.016	91.5

円頭大刀付着黒色板は銀板が黒色化したものとみられる。

1- ④: 円頭大刀付着腐食物質

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	スズ (Sn)/%	鉛 (P b)/%
98.2	0.25	< 0.017	0.58	0.12

円頭大刀付着腐食物質は通常の鉄サビとみられる。

1-⑤：金装貴金具（分離）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
< 0.015	< 0.012	< 0.023	4.08	< 0.025	95.7	< 0.054

金装貴金具は中央を狙って測定。ほぼ純粋に金が発見されたが、銅はほとんど検出されなかった。

1-⑥：柄頭金装部（分離）

銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%
< 0.012	0.069	93.6

端部の黒色付着物を狙って測定。これは銀が腐食して生成された物質と判断される。

材質分析 2 回目 2 回目の材質分析は、より詳細なデータ採取を目的として実施した。分析装置はスペクトロ社製微小部蛍光 X 線分析装置、SPECTRO MIDEX M、X 線の照射径は 0.6mm、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（EDX）で検出し半定量分析を行った。

分析箇所は以下の 14 箇所であり、分析の概要を示す。

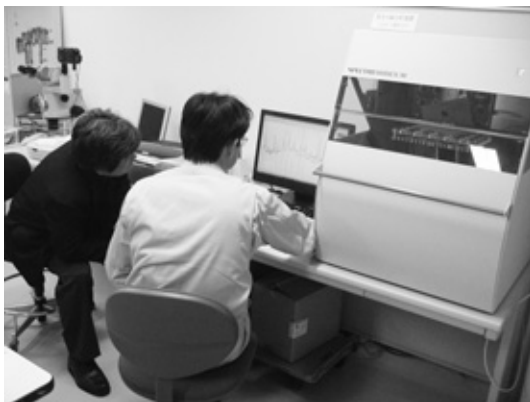


Fig.64 蛍光 X 線分析作業 (1)



Fig.65 蛍光 X 線分析作業 (2)



Fig.66 分析測点 (1)



Fig.67 分析測点 (2)



Fig.68 分析測点 (3)



Fig.69 分析測点 (4)

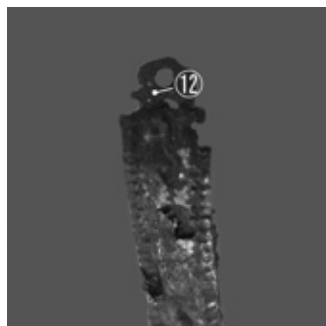


Fig.70 分析測点 (5)

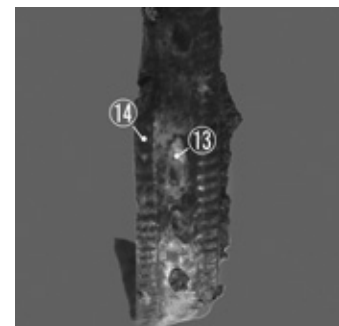


Fig.71 分析測点 (6)

2-①：柄頭金装部（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
0.519	0.036	0.104	3.492	< 0.033	< 0.050	95.780	< 0.020

柄頭金装部の金板を測定。金が約 96%、銀が約 3% 検出されたため、これは純度の高い金と判断される。

2-②：柄頭付着腐食物質（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
3.447	0.085	< 0.010	> 98.6	< 0.062	< 0.050	< 0.002	< 0.020

柄頭部に付着する黒色物質を測定。銀が約 98% 検出されたため、これは銀が腐食した物質と判断される。

2-③：柄頭付着腐食物質（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
0.932	0.031	< 0.001	> 98.6	< 0.062	< 0.050	< 0.002	< 0.020

②と同一物の位置を変えて測定。銀が約 99% 検出されたため、これは銀が腐食した物質と判断される。

2-④：柄頭付着腐食物質（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
3.497	0.751	0.077	55.900	< 0.070	< 0.050	39.390	< 0.020

柄頭部に付着するやや黄色味を帯びた黒色物質を測定。金が約 40%、銀が約 56% 検出されたが、観察上、金板に銀板が乗っていると判断される。

2-⑤：柄頭側面黒色鋳頭（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
4.385	0.297	0.004	94.870	< 0.067	< 0.050	< 0.002	< 0.020

柄頭部側面の黒色鋳頭を測定。銀が約 95% 検出されたため、この鋳の材質は銀と判断される。

2-⑥：柄頭金装部（下側）（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
0.783	0.522	0.074	54.480	< 0.063	< 0.050	44.040	< 0.020

柄頭金装部が重なっている部分で、下側になっているやや赤色を帯びた金板を測定。金が約 45%、銀が約 55% 検出された。色調からも、この材は金と銀の合金と判断される。

2-⑦：柄頭金装部鋳頭（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
0.039	0.393	0.069	32.670	< 0.053	< 0.050	66.750	< 0.020

柄頭金装部が重なっている部分で、この重なりを留める鋳と考えられる。金が約 67%、銀が約 33% 検出された。色調からも、この材は金と銀の合金と判断される。

2-⑧：柄頭金装部（上側）（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
0.923	0.041	0.111	3.242	< 0.027	< 0.050	95.580	< 0.020

柄頭金装部で、上側に重なっている金板を測定。金が約 96% 検出されたため、これは純度の高い金と判断される。

2-⑨：柄頭金装部鋳（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
0.812	0.663	0.062	56.220	< 0.041	< 0.050	42.050	< 0.020

柄頭金装部が重なっている部分でやや赤色を帯びた金鋳の頭部を測定。金が約 42%、銀が約 56% 検出された。色調からも、この材は金と銀の合金と判断される。

2-⑩：柄頭金装部（分離）（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
8.734	0.071	< 0.002	87.510	< 0.054	< 0.050	3.240	< 0.020

柄頭金装金具端部の黒色付着物を測定。銀が約 87% 検出されたため、これは銀が腐食して生成された物質と判断される。

2-⑪：柄頭金装部（分離）（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
< 0.025	0.053	0.124	3.441	< 0.035	< 0.050	96.290	< 0.020

柄頭金装金具端部の金と思われる部分を測定。金が約 96% 検出されたため、これは純度の高い金と判断される。

2-⑫：金装責金具（分離）（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
1.390	> 94.62	< 0.004	0.431	0.124	0.235	< 0.020	0.610

金装責金具地板と考えられる部位を測定。銅が約 94% 検出されたため、責金具の地板は銅製であると判断される。

2-⑬：金装責金具（分離）（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
1.358	2.063	0.095	2.495	< 0.026	< 0.050	93.890	< 0.020

金装責金具の金と思われる部分を測定。金が約 94% 検出されたため、これは純度の高い金であると判断される。

2-⑭：金装責金具（分離）（※アン：アンチモン）

鉄 (Fe)/%	銅 (Cu)/%	亜鉛 (Zn)/%	銀 (Ag)/%	スズ (Sn)/%	アン (Sb)/%	金 (Au)/%	鉛 (Pb)/%
15.460	34.69	< 0.006	1.759	< 0.016	< 0.050	47.990	< 0.020

金装責金具の端の黒色部を測定。これは金板上に地板の銅および刀身の鉄が溶出して黒く沈着したものと判断される。なお水銀は検出されておらず、金装責金具は銅板に金板を巻いて装飾したものと判断される。

(6) 自然科学的調査から明らかにされる金銀装飾

① 鋳材質の相違

柄の木質彫刻は現状では木質がむきだしの状態であるが、柄頭部に金板、柄間部に銀板を被せて全体的に装飾されていたことが痕跡からうかがえる。しかし、柄頭に残存する金板は形状が破かれたようにいびつであり、銀板は埋蔵中の劣化によってほとんど残存していないため、オリジナルの柄が金板と銀板でどのように装飾されていたのか、現状では不明確であった。

柄頭の X 線写真 (Fig.72) には、金銀装飾を留めていたとみられる鋳が写っている。柄頭 X 線写真左上側の金板を留めている鋳は通常の鋳・コの字形鋳ともに形状が鮮明であるが (▷で表記)、柄頭 X 線写真右側および左

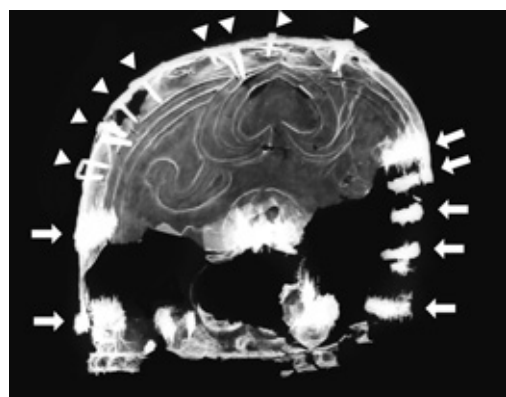


Fig.72 柄頭 X 線写真

下で金板が残っていない部分の鍔は、にじんで形状が不鮮明である（⇒で表記）。このことから、このにじみは鍔の腐食によるものと判断され、この鍔は銀製ではないかと推測された。つまり、金板が存在しない部分は銀板で装飾がなされており、その銀板を留めるために銀鍔が用いられたと考えられる。金板を留めるのは金鍔、銀板を留めるのは銀鍔というように、装飾の材質ごとに鍔も使い分けがなされていたとX線写真からは推測されるのである。

蛍光X線分析の結果として、形状が不鮮明な鍔（2-⑤：柄頭側面黒色鍔頭）はほぼ純粋な銀であること、形状が鮮明な鍔（2-⑦：柄頭金装部鍔頭および2-⑨：柄頭金装部鍔）は金と銀の合金であることが確かめられ、また、柄頭の木質部にわずかに残る金属板（2-②・③：柄頭付着腐食物質）は銀であることが確かめられた。

② 柄頭の金銀装飾

これらの情報を総合すると、不明確であった柄の金銀装飾の様子がみえてくる。まず、いびつな形状で残存する柄頭の金板は、円頭大刀の使用時点ではすでにこの形状であり、破れたような形状の金板裾部を覆い隠すような形で、銀板が斜めに貼られていたと考えられる。これはX線写真にみられる、にじんで不鮮明な銀鍔の位置と一致し、金板裾部に付着する黒色化した銀は、金板を被覆していたなごりと判断される。つまり柄頭の金銀装飾は、頂部の金が銀装飾の間から斜めに頭を見せる状態で施されていたと考えられるのである。

今回の保存処理を通して繊細な古代の木彫を保存することができ、自然科学的調査を通じて金銀装大刀の装飾を復元することができた。しかし、柄頭に残る金板の不自然な形状や雑な補修痕跡からみて、製作当初はまた違った金銀装飾が施されていたのかもしれない。保存処理の成果を踏まえ、今後も研究の余地が残る。

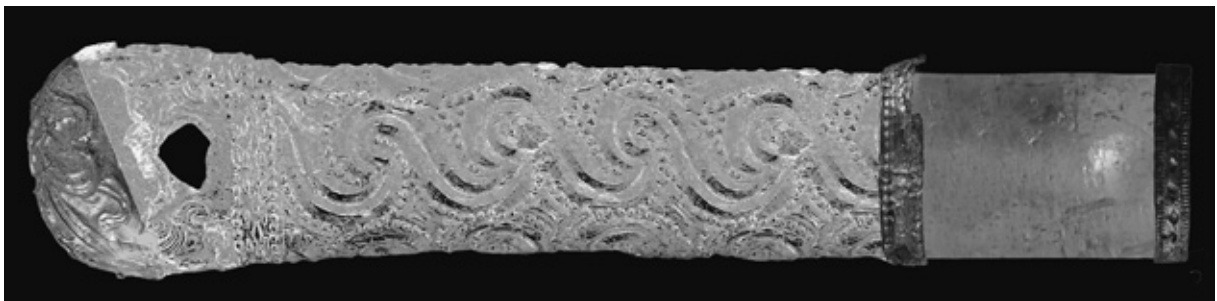


Fig.73 柄頭金銀装飾の復元想定



Fig.74 円頭大刀の全形復元想定

付 記

本節中に紹介されている責金具は、前章に示した柄元の区画帯上ではなく、鐙の鞘側に置かれている（Fig.45・73・74）。本例に伴う責金具は、保存処理の過程において鞘口金具の可能性が考慮されていた結果であるが、前章に示す位置が正しいことを付記しておきたい（鈴木）。

2 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

(1) はじめに

鳥居松遺跡から出土した金銀装円頭大刀（以下、円頭大刀とする）は、日本国内出土の装飾大刀に系譜が求められない諸特徴を有している。ここでは、比較対象資料を朝鮮半島もしくは中国に広げ、この大刀にみられる諸特徴の系譜を明らかにし、本例の帰属時期について触れておきたい。

(2) 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

鳥居松遺跡出土の円頭大刀の諸特徴を確認しておく。柄頭および柄間は一体の柄木で形成されており、木芯部に彫刻を施した後、金銀板を押し込んで文様を立体的に表現している。柄木は表裏2枚合わせである。鐔をもたない呑口式の構造で、鞘は外されていたため詳細を知ることができない。柄頭は比較的短く、中央部に心葉形の懸通孔があげられている。柄頭には懸通孔を挟むように双龍文がみられ、柄間には連続波頭文と連珠文が施されている。柄縁の区画帯には、双連珠菱形文が用いられ、柄元の区画帯には同じ模様原理をもつ銅製金張りの責金具がはめられている。なお、責金具は製作後のある段階で補われた可能性がある。以下、鳥居松遺跡例にみられる諸特徴について類例をあげ、その系譜関係を検討しておきたい。

柄頭の形態 鳥居松遺跡例の柄頭の正面形は、柄縁側が若干狭く、柄頭先端側にむかって緩やかに膨らんでいる。柄頭は、幅（4.4cm）よりも全長（3.7cm）が短く、長幅比（長／幅の値）は0.84を示す。日本国内で出土する円頭大刀の柄頭は、幅よりも全長が長いものがほとんどで、鳥居松遺跡例のように短い柄頭をもつ事例は知られていない。

鳥居松遺跡例と類似した形態の円頭柄頭は、朝鮮半島南部から出土する事例に見出すことができる。朝鮮半島から出土する円頭大刀は5世紀末から6世紀前葉頃の製品とみられ、日本国内から出土する円頭大刀と比べて製作時期が遡る事例が数多く含まれる。公州宋山里4号墳（旧1号墳）例や、慶州金冠塚古墳例、慶山林堂6A号墳例などが最古段階の製品とみられ（Fig.82）、その長幅比は0.75～1.0程度の値を示している。後述するように、円頭大刀の柄頭は短いものから長いものへと変遷する傾向が指摘でき、柄頭が短い鳥居松遺跡例は古相を示しているといえる。

心葉形懸通孔 鳥居松遺跡例の懸通孔は心葉形（猪目形）を呈している。心葉形懸通孔も日本国内出土の円頭大刀には認められず、朝鮮半島からの出土例のみに散見できる。心葉形懸通孔をもつ円頭大刀としては、宋山里4号墳例、金冠塚古墳例、昌寧校洞11号墳例があげられ（Fig.75）、羅州新村里9号墳乙棺から出土した円頭刀子にも心葉形懸通孔が認められる。これらの事例はいずれも、5世紀末から6世紀初頭頃（TK47型式期～MT15型式期）

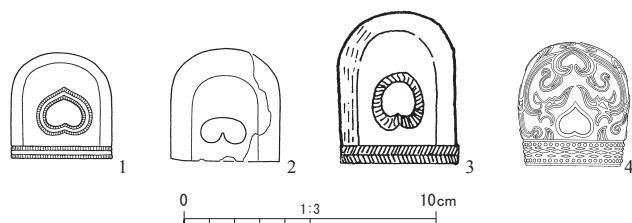


Fig.75 心葉形懸通孔をもつ円頭柄頭

1: 宋山里4号 2: 金冠塚 3: 校洞11号 4: 鳥居松

に位置づけられ、鳥居松遺跡例の製作時期の一端がうかがえる。

柄木の製作技法 鳥居松遺跡例の柄木は表裏2つの材を合わせて成形しており、柄頭には表裏2枚の金（銀）板を張っている。金属板を表裏2枚合わせて柄頭を作り出す手法は、町田章が示すA型（町田1987）に相当し、古式の製作技法が採用されている。茎は柄頭まで至らず、柄間の中間付近程度でおさまる点も、装飾大刀としては古相といえる。

木彫金銀張技法 本例の柄頭と柄間は木芯に彫刻を施し、これに金銀板を押し付けることで模様を浮き出させる木彫金銀張技法によって装飾されている。木彫金銀張技法によって製作されている装飾大刀として、奈良県藤ノ木古墳4号刀や群馬県綿貫観音山古墳例（Fig.76）、栃木県別処山古墳例などが知られる。これらは、倭系大刀を祖形に朝鮮半島にみられる金属装大刀の要素を取り入れて試作的に製作されたもので、しばしば折衷系統と評価されている（大谷1999、橋本2006）。

木彫金銀張技法は、勝部明生・鈴木勉によって、倭において生み出された技法と評価された（勝部・鈴木1998）。この解釈は、綿貫観音山古墳例にみられる「双直線刻文」（三本の凸線の中央1本を刻む模様帯）が、倭系遺物である鹿角製刀装具の直弧文の縁飾りに系譜が認められることから導き出されたものである。

いっぽう、鳥居松遺跡例にみられる木彫金銀張技法は、先にあげた諸例と基本構造は同じであるが、龍文や連続波頭文といった模様は倭製とみられる事例に系譜が求められない。木彫金銀張技法をもつ装飾大刀を、すべて同一系譜として捉えることは困難である。木彫金銀張技法を採用する点

だけでは、本例の製作地を倭と評価することは難しい。むしろ、倭製装飾大刀の木彫金銀張技法に影響を与えたような外来系譜の事例として位置づけるほうが妥当とみられる。

柄頭における龍文 鳥居松遺跡例には柄頭の表裏に双龍が配置されている。金銀装円頭大刀に龍文を施した事例は知られていないが、関連する資料は若干ながら認められる（Fig.77）。金銀装円頭大刀は懸通孔周りの装飾を除いて特別な模様をもたないことを基本とするが、金冠塚古墳例（金製、Fig.77-3）や伝高霊出土資料（銀製、湖巖美術館蔵、Fig.77-4）に、獣面文もしくは鬼面文が表現されたものが知られる。後者と酷似する資料は、出土地が不明瞭ながら朝鮮半島南部出土と伝えられる小倉コレクション中にもある。これらの柄頭の長幅比はすべて1.0以下を示しており、円頭大刀の中でも最古相の一群に含めることができる。金銀装円頭大刀に獣面文を施す系譜は、円頭大刀の出現期から存在していたことが分かる。

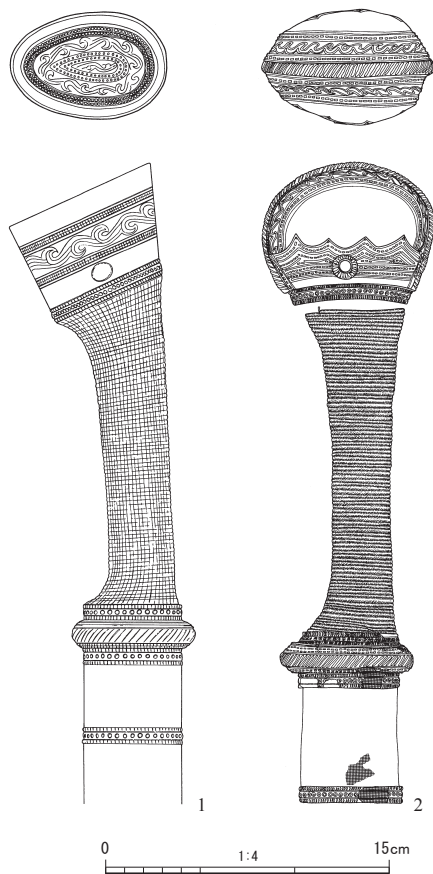


Fig.76 木彫金銀張技法をもつ装飾大刀

1: 藤ノ木 2: 綿貫観音山

金銀装円頭大刀は無文のものが多く、鉄製円頭大刀においては銀象嵌で柄頭に模様を施すことが一般的である。銀象嵌で表現される模様の多くは亀甲繫鳳凰文や心葉文であるが、龍文や鬼面文が描かれた資料がある。滋賀県北谷7号墳例 (Fig.77-2) には、柄頭表裏それぞれに2匹の向かい合う龍が描かれている。龍文には省略傾向が認められるが、中央で口を開けた龍が向かい合う様子がうかがえる。昇り龍か降り龍かという違いはあるが、鳥居松遺跡例との類似性が最も高い構図といえるだろう。北谷7号墳例は鉄製銀象嵌円頭柄頭の中でも全長が短く (長幅比 1.05)、朝鮮半島製の可能性も考えられる資料である。鳥居松遺跡例のような龍文を施した金銀装円頭大刀を元に、銀象嵌で類似した構図を描いたものと評価できる。

鉄製銀象嵌円頭柄頭には、香川県母神山古墳群例 (Fig.77-5) のように、鬼面文をもつものも知られる。柄頭の形態は伸長化しているが、象嵌模様は日本国内での出土品と比べると写実的である。横断面が隅切り長方形 (八角形) である点も古相の様相であり、町田章はこの大刀を加耶もしくは百濟製と評価している (町田 1991)。母神山古墳群例の構図も、獣面文をもつ金銀装円頭大刀との関連を認めてよいだろう。以上の事例から、鳥居松遺跡例のように金銀装円頭大刀の柄頭に龍文や獣面文などを施すことは、朝鮮半島の出土品もしくは朝鮮半島製と想定できる製品に認められる特徴と評価できる。

龍文の特徴 鳥居松遺跡例の柄頭に表現された龍文について、検討しておきたい (Fig.78)。龍文は全身が明確であり、2本ないしは3本の凸線によって表現されている点が特徴である。

凸線を用いた龍の表現は、加耶地域で多く出土する環頭大刀の環体のそれと類似している (Fig.78-1～4)。陝川玉田 M3 号墳出土例では、龍の羽毛が3～4本の凸線で表現され、鳥居松遺跡例との関連が指摘できる。加耶系環頭大刀の環体の龍文は、表現の簡略化によって凸線を多用する傾向が認められ (町田 1997)、こうした変化の延長上に鳥居松遺跡例の龍文の表現を位置づけることも可能であろう。ただし、加耶系環頭大刀にみられる龍文は、舌や角が長く表されていること、タテガミや背鱗、腹部などが連続する弧線で表現されていること、脚部の形態が明確であることなど、鳥居松遺跡例との違いも多く、両者は全く同一系譜のものとはいえない。なお、日本国内から出土する単龍鳳環頭大刀の環体にも龍文がみられるが、その表現は環体そのものを龍の体にみたもので、加耶系環頭大刀のそれとは異なるものである。

日本国内から出土する龍文関連遺物の中では、銀象嵌大刀に表現上の関連が見出せる。銀象嵌された龍は、刀身や鞘口・鞘尻金具にみられる。宮崎県島

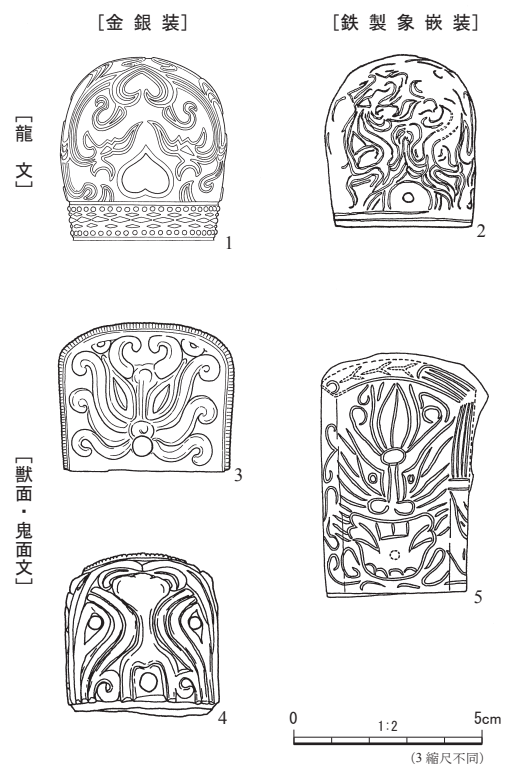


Fig.77 龍文・獣面文を表現する円頭大刀
1: 鳥居松 2: 北谷7号 3: 金冠塚 4: 伝高霊 5: 母神山

内 114 号地下式横穴例や奈良県新沢 327 号墳例にみられる龍文は、刀身に象嵌されたもので、龍の全身の特徴をよく伝えている (Fig.78-5)。これらの事例は、共伴遺物から 6 世紀前葉に位置づけられ、舌や角、下顎、羽毛、脚、尾など多くの部位を 3 本線で表現している点で鳥居松遺跡例との類似点が指摘できる。鳥居松遺跡例と近接する製作時期が想定できるだろう。ただし、この 2 例の龍文は、頸部から胴部の内部を弧線で充填する点が、鳥居松遺跡例と異なる。舌や角が長く表されていることも相違点に加えられよう。

銀象嵌の龍文は、鞘口・鞘尻金具にもみられ (Fig.78-6・7)、6 世紀前葉から 6 世紀後葉の間において表現の簡略化過程がうかがえる (小林・有井 1996)。ただし、これらの事例においても、胴部を連続する弧線で表現することや、舌や角をもつことは変わらない。

以上、鳥居松遺跡例の龍文と関連する事例として、加耶系環頭大刀の環体と銀象嵌大刀にみられる龍文とを比較した。双方とも、併行する数本の線によって模様を描く点では鳥居松遺跡例との関連が見出せるが、胴部の表現と舌や角をもつ点が本例と異なる。類似した表現が採用されていることから、先に紹介した諸例は互いに近い時期に製作されたものと捉えられるが、細部の表現に違いがあることを考慮すると、製作地や工人の系譜は異なるとみられよう。

双連珠菱形文 責金具や区画帯の特徴は、柄頭形式の違いを超えて製作時期や製作地の系譜がうかがえる属性として注目できる。鳥居松遺跡例には、柄縁の区画帯と柄元の責金具に双連珠菱形文が採用されており、類例との比較が可能である。なお、責金具は先述のとおり補修の際に追加され



Fig.78 鳥居松遺跡例と類似する龍文の諸例

1: 玉田 M3 号 1 号刀 2: 同 2 号刀 3: 同 3 号刀 4: 伝朝鮮 (安宅コレクション)
5: 鳥内 114 号地下式横穴 6: 井田川茶臼山 7: 明ヶ島 15 号 8: 鳥居松

た可能性が高いが、当初から刻まれた模様と同じ構成原理が採用されている。

責金具の両端部に刻みを入れて連珠状に表現し（双連珠）、中央部に円形文（魚々子文）や菱形文を並べる装飾技法は、日本国内から出土する環頭大刀の属性として注目されている。責金具の模様は、A類）双連珠円形菱形文、B類）双連珠菱形文、C類）双連珠円形文の三種に分類され、単龍鳳環頭大刀の責金具を整理した新納泉によると、日本国内出土資料による比較では、A類（単龍鳳Ⅲ式）→B類（単龍鳳Ⅳ式）→C類（単龍鳳Ⅴ式）の順に推移することが示されている（新納 1982）。

鳥居松遺跡例に採用されているB類は、奈良県珠城山1号墳出土の三葉文環頭大刀（Fig.79-7）にみられるほか、静岡県宇洞ヶ谷横穴例や千葉県山王古墳例、千葉県城山1号墳例など、新納が示す単龍鳳Ⅳ式に集中する（Fig.79-4～6）。鳥居松遺跡例における責金具を伴う補修が日本国内で行われたと解釈するなら、その時期は単龍鳳Ⅳ式の時期に併行すると捉えることも可能である。

いっぽう、比較例を朝鮮半島出土資料に求めると、B類は玉田 M3 号墳出土の単鳳環頭大刀や羅州伏岩里3号墳 96 石室出土大刀に認められ、公州武寧王陵出土の円頭刀子（王妃共伴）にも同様の表現が見出せる（Fig.79-1～3）。C類にかんしても、おなじく武寧王陵出土の円頭刀子（王妃共伴）をはじめ、金冠塚古墳出土の円頭刀子、羅州伏岩里3号墳 96 石室出土の三葉文環頭刀などにみられる。これらの資料は、国内出土の単龍鳳Ⅳ式の時期を遡る事例である。鳥居松遺跡例の製作地を朝鮮半島に求めるなら、責金具の模様構成のみから製作時期を細かく絞り込むことは困難といえる。なお、C類の双連珠円形文は伝連山里例や、鳥根県岡田山1号墳例、藤ノ木古墳例など、古式の円頭大刀にも散見でき、その模様系譜をうかがう上でも注目できる。

鳥居松遺跡例の柄縁の区画帯は、双連珠文の間に3列の菱形文が巡る点で一般的なB類の模様構成とは異なる。本例にみられる模様は、双連珠菱形文の中でも装飾的要素が高く、古相の特徴を示しているとみなせよう。3列の菱形文は、主模様である中央の菱形文と両端の空間を埋めるための副次的な模様列の集合とみなせ、武寧王陵から出土した単鳳環頭大刀の鞘飾り金具との関連も指摘できる。

以上を示した双連珠菱形文の比較資料から、鳥居松遺跡例の製作時期の上限を武寧王陵出土資料（武寧王、523 年没）に、下限を新納が示す単龍鳳Ⅳ式（TK43 型式期前半併行、6 世紀後葉）に求めることができる。このうち、下限の時期を、責金具を伴う補修の時期とみれば、倭における補修の可能性も充分考えられる。

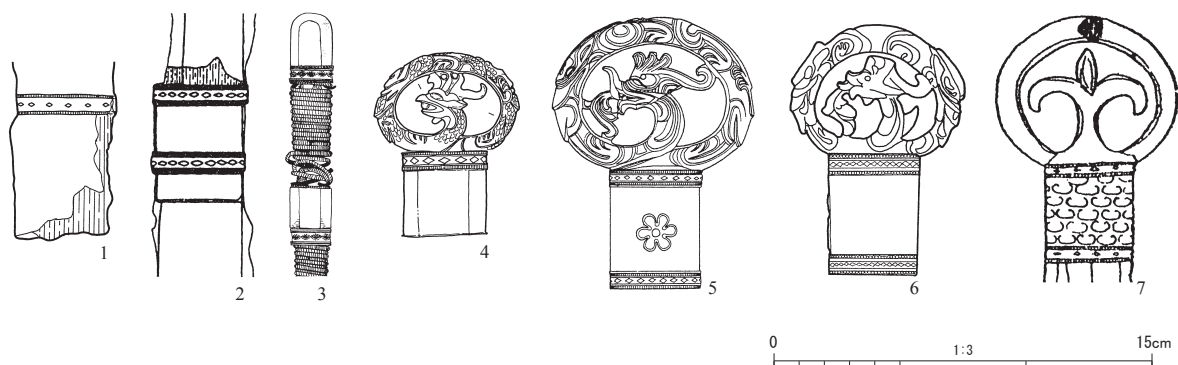


Fig.79 双連珠菱形文の諸例

1: 玉田 M3 号 2: 伏岩里 3 号 96 石室 3: 武寧王陵 4: 宇洞ヶ谷 5: 山王 6: 城山 1 号 7: 珠城山 1 号

連続波頭文の系譜 鳥居松遺跡例の柄間には、魚々子文状に広がる連珠文と連続波頭文が立体的に表現されている。連珠文は、朝鮮半島南部から多く出土する金製装身具の粒金細工を彷彿とさせる。いっぽう、連続波頭文を立体的に表現する手法は、日本国内や朝鮮半島には類例が知られず、外来系譜の模様とみられる。鳥居松遺跡例と類似した連続波頭文をもつ資料として、中国北魏から隋代に特有の寝台形石製装具があげられる (Fig.80-1・2)。山本忠尚が整理したように (山本 2006)、棺を置くための石製の台 (圀屏石牀) を構成する石製台座 (石牀) の正面板には、立体的な平行線で充たされた連続波頭文がみられる。類似した模様は、大同南郊出土の人物文硯 (解 1979) や北魏製金銅仏の台座 (金 1994) にも見出せる (Fig.80-3・4)。平行線表現の立体的な連続波頭文は金銅仏に古い時期のものが認められるが、およそ北魏平城期の太和年間 (477 ~ 494 年) を中心とするものと捉えられる。古式の円頭大刀の製作時期と比較しても時期的に隔たりはない。これらの事例が示すように、連続波頭文は台座の縁模様と関連があり、格座間の外形に取り入れられていく。高句麗の事例として、南浦双楹塚の壁画に描かれた格座間模様を関連資料としてあげておく (Fig.80-5)。関連資料が少なく不明確な要素が多いが、鳥居松遺跡例にみられる平行線表現の立体的な連続波頭文は、中国北朝 (北魏) に系譜が求められる可能性を指摘しておきたい。

単線で表現される連続波頭文は、装飾大刀に好んで用いられている。朝鮮半島出土品では、慶州鷄林路 14 号墳出土の装飾剣のほか、装飾大刀の銀象嵌模様に比較的多くの事例が知られる (Fig.80-6 ~ 9)。日本国内においても、朝鮮半島製の可能性が高い京都府穀塚古墳出土の単鳳環頭大刀 (Fig.80-10) にみられる。これらの資料は、5 世紀に遡る事例が多く、鳥居松遺跡例が製作さ

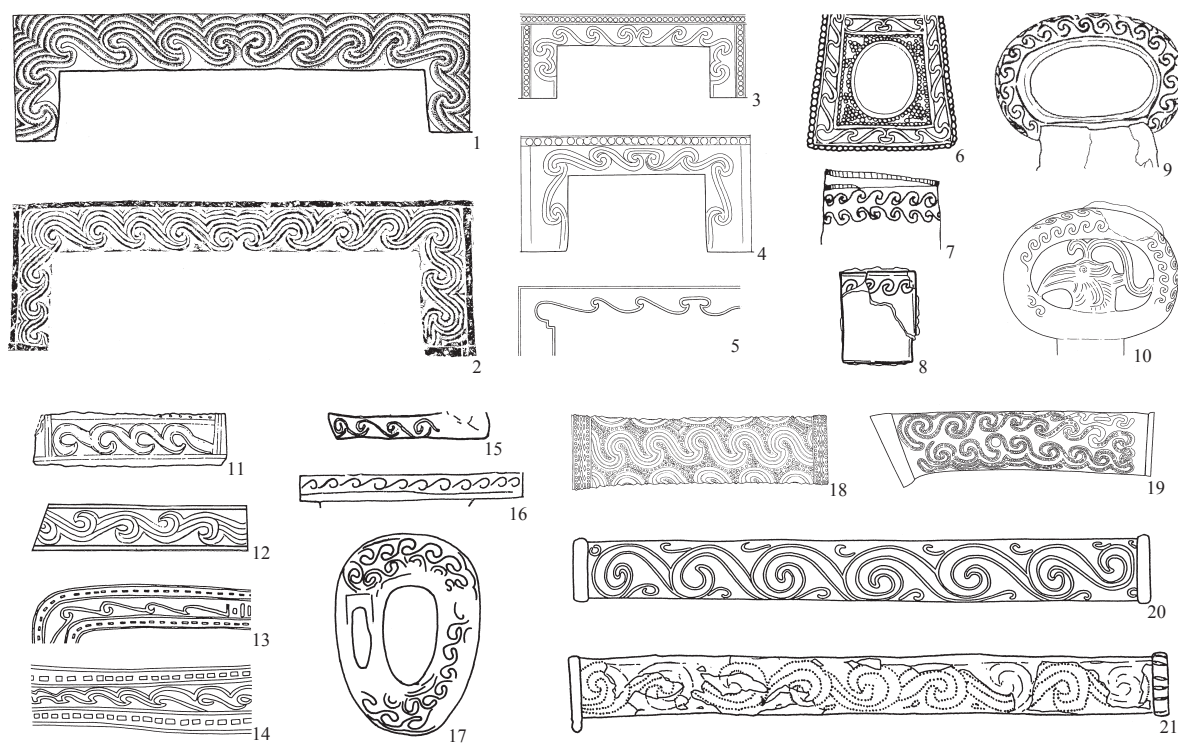


Fig.80 連続波頭文の諸例

1: 大同南郊 M112 2: 大同北師院 M5 (太和元年 (477) 銘) 3: 大同南郊出土 4: 新田グループコレクション 5: 南浦双楹塚 6: 鷄林路 14 号 7: 伝朝鮮 (東博蔵) 8: 玉田 M3 号 9: 花城里 A1 号 10: 穀塚 11: 生実所在 12: 藤ノ木 13: 別処山 14: 綿貫観音山 15: 芝塚 16: 井田川茶臼山 17: 台所山 18: 鳥居松 19: 金鈴塚 20: かわらけ谷横穴墓群 21: 伝藤岡市小林

れる以前から、連続波頭文が装飾大刀と関連が深い模様として採用されていたことが知られる。

装飾大刀と連続波頭文との関連は、6世紀代の日本国内出土資料にも数多く認められる。連続波頭文は、木彫金銀張技法で製作された装飾大刀（Fig.80-11～14）や、銀象嵌大刀の模様（Fig.80-15～17）に多用されており、後者においては、C字形やS字形、円形などへ変化していく（橋本1989・1993）。6世紀末以降、倭製装飾大刀の装具が斉一化すると、金銅板を張った柄間や鞘に連続する渦文が施されるようになる。鳥居松遺跡例の出土によって、装飾大刀の柄間や鞘金具に施される渦文の原形は連続波頭文にあることが示せるようになった（Fig.80-18～21）。倭で製作された装飾大刀の柄間や鞘金具の模様は形態変容が顕著で、連続渦文や唐草文的な要素を取り入れた模様も数多い。

柄間に金属板を巻きつける技法についても、鳥居松遺跡例からの系譜が想定できる。ただし、鳥居松遺跡例の柄間には木彫銀張技法が用いられていることに対して、倭製の装飾大刀は金銅板を用いて鑿で模様を打ち出す技法が採用されており、その技術系譜は大きく異なる。鳥居松遺跡例は柄間に金属板を巻きつける初源的な事例とみなせるが、倭において金銅板巻の柄間が出現するまでの開きは、なお大きいといえるだろう。

鳥居松遺跡例の系譜 円頭大刀の形態的特長と製作技法、模様の検討を通じ、鳥居松遺跡例が日本国内出土品より、朝鮮半島出土品との関連が高いことを示すことができた。木彫金銀張技法や立体的な連続波頭文の遡源など今後の検討課題は多いが、現状の資料による限り鳥居松遺跡例は朝鮮半島製と捉えてよいと判断できる。その製作時期の上限は、武寧王陵出土資料に求めることができるが、省略傾向をもつ龍文や連続波頭文といった従来ほとんど知られていない模様を採用していること、柄間を金属張にするという新しい様相をもつことから、武寧王陵出土資料の次段階、6世紀前葉の新しい時期（TK10型式古相期併行）に位置づけるのが妥当であろう。

心葉形懸通孔や双連珠菱形文を用いる大刀や刀子の事例は百濟熊津期（475～538年）の資料に散見できる（金2007）。また、龍文の特徴から、本例は加耶との関連も指摘できた。鳥居松遺跡例の製作地を絞り込むことは難しいが、現状の資料による限り、百濟もしくは加耶にその候補地を求めておきたい。

なお、この大刀は、製作後において責金具の後補を伴う補修が行われているが、この補修が、朝鮮半島で行われたか、倭で行われたかは明らかでない。仮に倭で補修されたとすると、責金具の類例が単龍鳳Ⅳ式（新納1982）に位置づけられることから、同型式の想定時期である6世紀後葉（TK43型式期前半）に実施されたものと捉えられる。

（3）円頭大刀の型式分類と変遷

前節に行った円頭大刀の諸属性の検討をふまえ、円頭大刀の型式分類とその変遷観について触れておきたい。

研究史 円頭大刀の型式分類および編年については、瀧瀬芳之（瀧瀬1984・1986）および町田章（町田1987）による体系的な論考がある。瀧瀬は、佩用方法と鐔の有無をもとに円頭大刀を5型式に分け、Ⅰ式）無鐔釣手佩用、Ⅱ式）有鐔釣手佩用、Ⅲ式）八窓鐔二足佩用、Ⅳ式）無窓鐔二足佩用金銅装鞘、Ⅴ式）無窓鐔二足佩用準素鞘とした。各型式の年代については、Ⅰ式を5世紀後葉～6世紀中葉に、

Ⅱ式、Ⅲ式を6世紀第3四半期に、Ⅳ式を6世紀末～7世紀初頭に、Ⅴ式を7世紀前半にそれぞれあてはめている。いっぽう、町田は儀杖大刀全体の変遷観を示した上で、円頭大刀（頭椎大刀を含む）を2系統11型式に細分した。町田が重視するのは、柄頭を構成する金属板の成形技法であり、A型）表裏分離型、B型）一体袋状型に分離した。同時に町田は円頭大刀にみられる「加耶式」と「倭式」の系統差を重視し、それぞれの推移を示した。

型式分類 滝瀬や町田の分類は、円頭大刀の変遷を示す重要な指摘であるが、全体の装具や細かな製作技法が判明しない事例については適用が難しい。ここでは環頭大刀など装飾大刀の検討で一般的な柄頭に着目した型式分類を行い、製作技法や付属する装具、佩用方法などの特徴を補足的に捉えて、円頭大刀の変遷を素描しておきたい。本稿では、円頭大刀の柄頭を形態と材質から次のように型式分類する。

円頭Ⅰ式 金銀装短頭 長幅比 1.2 未満 柄頭に装飾をもつものを含む

円頭Ⅱ式 金銀装長頭 長幅比 1.2 以上 柄頭に装飾をもつものを含む

円頭Ⅲ式 金銅装無文 長幅比 1.2 以上 金銅板を用い無文のもの

円頭Ⅳ式 鉄製象嵌装 短頭と長頭の双方 鉄製柄頭に金銀象嵌を施す

円頭Ⅴ式 木芯漆装 長幅比 1.2 以上 木芯で表面に漆を塗布する

柄頭の長短にかんしては、Tab.1の比較で明確なように、懸通孔が心葉形を呈する一群と、懸通孔の周りに花形装飾をもつ一群の違いを重視する。前者の長幅比は0.84～1.11であり、比較的短いものが多いことに対し、後者の長幅比は1.24～1.31と、相対的に長い。両者を分ける基準として長幅比1.2という値の妥当性がうかがえる。後述するように、この違いは時期差を反映するものと捉える。なお、鉄製銀象嵌円頭柄頭にも懸通孔の周りに花形模様が描かれるものがあるが、こうした個体の長幅比も1.33～2.00の値を示しており、先の想定を補強する。以上のことから、懸通孔の形状やその周りの装飾の有無が円頭柄頭の細分上、有効な指標と捉えられる。以下、円頭柄頭各型式の細分案と諸属性について触れておく。

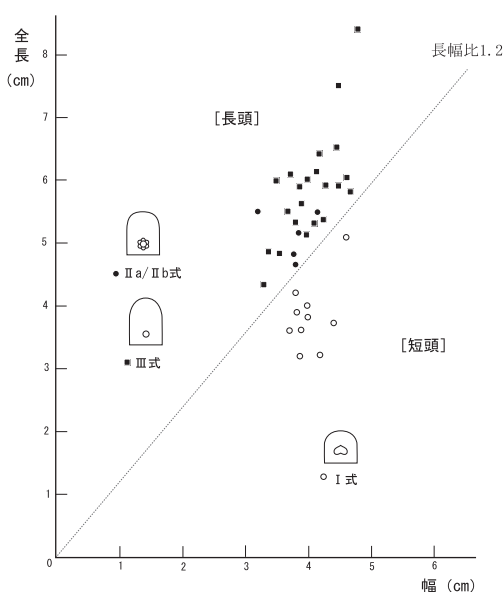


Fig.81 円頭柄頭の形態比較

円頭Ⅰ式 円頭Ⅰ式は、Ⅰa式）懸通孔が心葉形のもの、Ⅰb式）懸通孔が円形のものの2種に細分できる。また、Ⅰb式には獣面文などの装飾をもつものが含まれる。円頭Ⅰ式は、柄頭が銀装であることが一般的である。柄間は金属線巻にするものも多く、鞘との関係が判明するもの全てが鍔をもたない呑口式である。佩用方法がうかがえる事例をみると、吊手佩用（縦佩）が大多数とみられる。円頭Ⅰ式の出土地は朝鮮半島に集中し、彼の地で製作されたものと判断できる。

円頭Ⅱ式 円頭Ⅱ式は、Ⅱa式）円形懸通孔の周りに花形装飾が施されるもの、Ⅱb式）懸通孔の周りに特別な細工が施されないもの、に細分できる。円頭Ⅱ式も柄頭本体を銀装にするものがほとんどであるが、藤

ノ木古墳例のように金銅装のものがある。藤ノ木古墳例は、材質の点では後述するⅢ式と同じであるが、花形装飾や拵えの類似から、Ⅱ a 式に含めて捉えておきたい。

なお、島根県古天神古墳例や島根県上塩冶築山古墳例、別処山古墳例など、円頭Ⅱ式の中には柄の刃側が弧状に彎曲する倭系大刀との関連が見出せるものが知られる（町田 1987、大谷 1999、橋本 2006）。これらをⅡ c 式として分離しておきたい。Ⅱ c 式は柄頭の形態や大きさが他の円頭大刀と異なり、系譜を異にする試作品的な側面が強い。

円頭Ⅱ式も柄間を金属線巻にするものが多く、鞘との関係は、鐔をもたない呑口式（Ⅱ a 式、Ⅱ b 式）と鐔をもつ合口式（Ⅱ c 式）の双方がみられる。前者が外来系で古相、後者が倭系で新相の特徴である。佩用方法は縦佩であることが多いが、Ⅱ c 式には横佩とみられるものが含まれる。円頭Ⅱ式の多くも朝鮮半島で製作されたものとみられるが、倭系の要素をもつⅡ c 式は日本国内で製作されたとみられる。

円頭Ⅲ式 円頭Ⅲ式は柄頭に金銅板を用いるものである。懸通孔に金具が嵌められたものがあるが、柄頭本体は無文である。金属装の拵えが残存するものが多く、その特徴から細分が可能である。ここでは、柄間の特徴を重視し、Ⅲ a 式) 柄間を金属線巻にするもの、Ⅲ b 式) 柄間を金銅板張にするもの、に分類する。前者が古相、後者が新相の特徴である。また、円頭Ⅲ式の中には、金銅製の覆輪を用いたものが知られる。柄頭本体の表裏は金銅板を充てたものと、木芯が露出したものがあるが、こうした特徴を有する柄頭をⅢ c 式として分離する。円頭Ⅲ式は合口式であり、喰出鐔や無窓鐔を伴う。Ⅲ a 式の中に縦佩にするものが若干知られるが、円頭Ⅲ式のほとんどは横佩であり、Ⅲ b 式やⅢ c 式には佩用金具として吊手孔付佩用金具が附属する事例が多い。また、柄間を金銅板張にするⅢ b 式やⅢ c 式は、鞘も金銅板張にすることが一般的である。

円頭Ⅳ式 鉄製象嵌装の円頭Ⅳ式は、柄頭の大きさと形態の違いによって、Ⅳ a 式) 長幅比 1.2 未満の短頭のもの、Ⅳ b 式) 長幅比 1.2 以上の長頭のもの、Ⅳ c 式) 長頭で幅 3.5cm 以下の小型のもの、の 3 種に分類できる。Ⅳ a 式は金銀象嵌によって、龍文や双鳳凰文が表現されるものが含まれる。これらの資料は、模様が明確で、古相を示している。Ⅳ b 式は亀甲繫鳳凰文をもつ円頭柄頭の大部分が含まれる。銀象嵌模様の簡略化から 5 ～ 6 段階程度の細分が可能である（橋本 1986・1993）。Ⅳ c 式は心葉形文をもつものが多く、小型の刀に附属するとみられる。また、Ⅳ c 式は鞘尻金具である可能性も考慮される。

Ⅳ b 式の群馬県平井 1 号墳例や岡田山 1 号墳例は柄間が金属線巻で、刃側が弧状に彎曲し、断面蒲鉾状鐔や無窓鐔を伴う。柄の形状から倭に伝統的な落とし込み技法が採用されているとみられる点で、先にⅡ c 式とした一群との関連がうかがえる資料である（町田 1987）。奈良県布留遺跡や静岡県山ノ花遺跡からは、5 世紀代に遡る木製の円頭形柄頭や頭椎形柄頭をもつ装具が出土しており、倭の中に存在した木製円頭形の柄頭をもつ大刀（置田 1985）との関連も考慮すべきであろう。

円頭Ⅳ式の多くは柄頭が遊離して出土しており、柄間の詳細をうかがうことができない。古相を示すⅣ a 式は呑口式であった可能性が高いが、新相を示すⅣ b 式は有窓鐔を伴うことが多く、合口式であったことが知られる。円頭Ⅳ式には、外来系と倭系の双方が混在している可能性がある。佩用方法も明確でないものがほとんどであるが、横佩にされるものが大多数であったと想定できる。

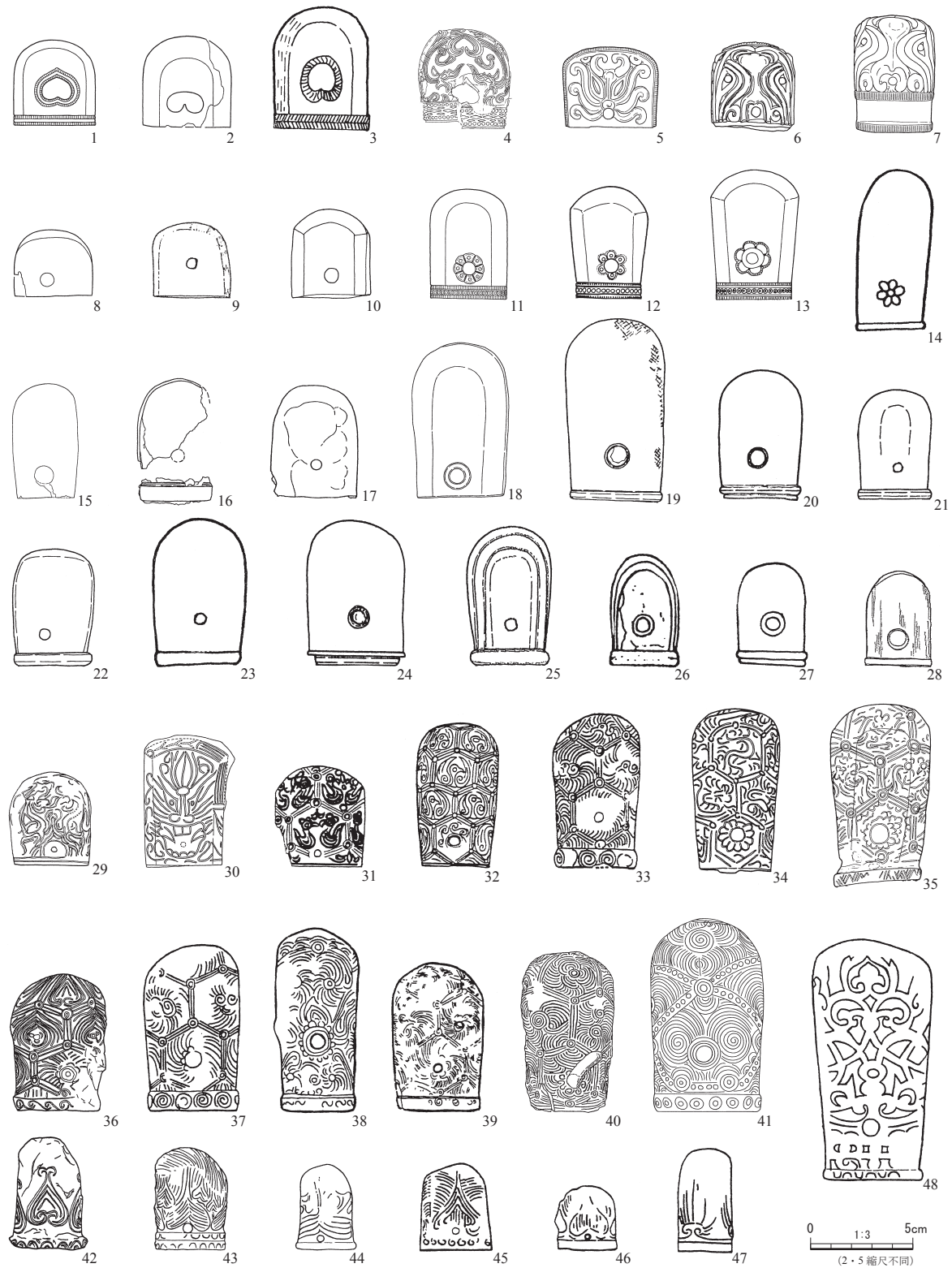


Fig.82 円頭大刀柄頭の諸例

1: 宋山里4号 2: 金冠塚 3: 校洞11号 4: 鳥居松 5: 金冠塚 6: 伝高霊(金東鉉コレクション) 7: 伝朝鮮(小倉コレクション) 8: 宋山里6号 9: 校洞7号 10: 伝朝鮮(李養璿コレクション) 11: 伝連山里(小倉コレクション) 12: 岡田山1号 13: 藤ノ木 14: 古天神 15: 宇洞ヶ谷横穴 16: 穴が澄 17: 狐塚 18: 鶴巻塚 19: 風返稲荷山(1) 20: 風返稲荷山(2) 21: 風返稲荷山(3) 22: 平等寺向原I-1号 23: 川内天王山 24: 宮口11号 25: 御山SX015 26: 六万部 27: 岡本1号横穴 28: フゴッペ洞窟 29: 北谷7号 30: 母神山古墳群 31: 星塚2号 32: 権現山 33: 伝藤岡市北郷 34: 平井1号 35: 岡田山1号 36: 芝塚 37: 伝高崎市岩鼻 38: 鷹ノ巣 39: 梶山 40: 塚花塚 41: 原分 42: 芝塚 43・44: 鬼塚2号 45: 中田横穴 46: 赤麻 47: 久ヶ原48号横穴 48: トトコチ山

Tab.1 円頭大刀属性分析表

Fig. 82	出土地等	型式	材質	長	幅	長幅 比	柄頭	懸通孔	柄間	合せ・鐔	佩 用	鞘 尻
円頭Ⅰ式（金銀装短頭）												
1	公州 宋山里4号	I a	銀装	3.6	3.9	0.92	無文	心葉形	—	—	—	平尻・蟹目釘
2	慶州 金冠塚	I a	銀装?	—	—	1.00	無文	心葉形	—	—	—	—
3	昌寧 校洞11号	I a	銀装	5.1	4.6	1.11	無文	心葉形	銀線巻	呑口	吊手切込（縦佩）	—
4	静岡 鳥居松	I a	金銀装	3.7	4.4	0.84	龍文	心葉形	銀板張	呑口	—	—
5	慶州 金冠塚	I b	銀装?	—	—	0.89	獸面文	円形	—	—	—	—
6	高靈 伝高霊（金東銘コレ）	I b	銀装	4.0	4.0	1.00	獸面文	円形	銀線巻	呑口	縦佩	—
7	韓国 伝朝鮮（小倉コレ）	I b	銀装	3.8	4.0	0.95	獸面文	円形	—	—	—	—
8	公州 宋山里6号	I c	銀装	3.2	4.2	0.76	無文	円形	—	—	—	—
—	慶山 林堂6A	I c	銀装	3.2	3.9	0.82	無文	円形	有機質	—	—	—
9	昌寧 校洞7号	I c	銀装	3.6	3.7	0.97	無文	円形	—	—	—	—
—	梁山 夫婦塚	I c	銀装	3.9	3.8	1.03	無文	円形	有機質	呑口	吊手切込（縦佩）	平尻
10	韓国 伝朝鮮（李義璋コレ）	I c	銀装	4.2	3.8	1.11	無文	円形	—	—	吊手切込（縦佩）	—
円頭Ⅱ式（金銀装長頭）												
11	韓国 伝連山里（小倉コレ）	II a	銀装	4.8	3.8	1.26	無文	円形花形飾	銀線螺旋巻	呑口	縦佩か	平尻
12	鳥根 岡田山	II a	銀装	4.7	3.8	1.24	無文	円形花形飾	銀線巻	呑口	縦佩か	平尻・蟹目釘
13	奈良 藤ノ木	II a	金銅装	5.5	4.2	1.31	無文	円形花形飾	銀線巻	呑口	縦佩か	平尻
15	静岡 宇洞ヶ谷横穴	II b	銀装	5.5	3.2	1.72	無文	円形	（有機質）	（喰出鐔）	（横佩か）	—
16	岡山 穴ヶ辻	II b	銀装	5.2	3.8	1.37	無文	円形	銀線螺旋巻	呑口	—	—
—	静岡 石川 T3号	II b?	銀装	—	3.3	—	無文	—	—	—	—	—
14	鳥根 古天神	II b	銀装	7.5	3.5	2.14	無文	円形花形飾	銀線巻	無窓鐔	環付佩用金具	平尻・蟹目釘
—	鳥根 上塩治築山	II c	銀装	9.2	5.8	1.59	無文	円形	銀線巻	八窓鐔	横佩か	—
—	栃木 別処山	II c	銀装	7.0	6.8	1.03	模様帯	円形	銀線巻	蒲鉾鐔	吊手	平尻・蟹目釘
円頭Ⅲ式（金銅装無文）												
17	宮崎 狐塚	III a	金銅装	5.4	4.2	1.29	無文	円形	銀線巻	無窓鐔	—	—
—	茨城 伝舟塚	III a	金銅装	5.3	4.1	1.29	無文	円形	銀線巻	無窓鐔	横佩	丸尻
18	千葉 鶴巻塚	III a?	金銅装	7.5	4.5	1.67	無文	円形	—	—	吊手孔付佩用金具	丸尻
19	茨城 風返稲荷山（1）	III a	金銅装	8.4	4.8	1.75	無文	円形	金銅線巻	無窓鐔	横佩	丸尻
20	茨城 風返稲荷山（2）	III a	金銅装	5.6	3.9	1.44	無文	円形	金銅線巻	喰出鐔	吊手切込	平尻
21	茨城 風返稲荷山（3）	III b	金銅装	4.8	3.5	1.37	無文	円形	金銅板張	—	吊手孔付佩用金具	平尻・蟹目釘
22	福岡 平等寺向原 I -1号	III b	金銅装	5.1	4.0	1.28	無文	円形	金銅板張	—	—	—
23	群馬 川内天王山	III b	金銅装	6.5	4.5	1.44	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
24	新潟 宮口11号	III b	金銅装	6.4	4.2	1.52	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	群馬 伝旧多野郡八幡村	III b	金銅装	5.5	3.7	1.49	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	平尻・蟹目釘
—	千葉 新坂1号	III b	金銅装	5.3	3.8	1.39	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	平尻
—	大阪 三田市13号	III b	金銅装	6.0	4.6	1.30	無文	円形	金銅板張	八窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	長野 塚穴原1号	III b	金銅装	4.8	3.4	1.41	無文	円形	金銅板張	—	—	—
—	群馬 伝高崎市上豊岡	III b?	金銅装	5.9	4.5	1.31	無文	円形	—	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
—	東京 塚越14号横穴	III b?	金銅装	6.1	4.1	1.49	無文	円形	—	無窓鐔	横佩か	—
—	千葉 伝富津市飯野	III b?	金銅装	5.9	3.9	1.51	無文	円形	—	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	千葉 白姫塚	III b?	金銅装	6.1	3.7	1.65	無文	円形	—	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
25	千葉 御山 SX015	III b	金銅装	6.0	4.0	1.50	横畦目	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
—	群馬 綜三郷村88号	III c	金銅覆輪装	5.9	4.3	1.37	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	横佩	平尻
—	鳥根 鷲の湯病院跡	III c	金銅覆輪装	6.0	3.5	1.71	無文	円形	—	—	吊手孔付佩用金具	—
—	茨城 赤浜	III c?	金銅覆輪装?	—	—	—	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	丸尻
26	長野 六万部	III c	金銅覆輪装	4.3	3.3	1.30	無文	円形	金銅板張	無窓鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	群馬 伝渋川市豊秋	III c	金銅覆輪装	5.8	4.7	1.234	無文	円形	—	—	—	—
円頭Ⅳ式（鉄製金銀象嵌） ※主要例のみ												
29	滋賀 北谷7号	IV a	鉄製	4.2	4.0	1.05	龍文	—	—	—	—	—
31	奈良 星塚2号	IV a	鉄製	4.9	4.4	1.11	亀鳳文	—	—	—	—	—
—	大阪 山畑22号	IV a	鉄製	5.2	4.4	1.18	花文	—	—	—	—	—
30	香川 母神山	IV b	鉄製	6.3	3.9	1.62	鬼面文	—	—	—	—	—
—	兵庫 勝福寺	IV b	鉄製	4.8	3.6	1.33	—	—	銀線巻	呑口	—	—
32	愛知 権現山	IV b	鉄製	7.0	4.1	1.71	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌無窓鐔	—	—
33	群馬 伝藤岡市北郷	IV b	鉄製	6.7	4.3	1.56	亀鳳文	円形	—	—	—	—
34	群馬 平井1号	IV b	鉄製	7.8	4.2	1.86	亀鳳文	円形	銀線巻	象嵌蒲鉾鐔	横佩か	平尻・蟹目釘
35	鳥根 岡田山1号	IV b	鉄製	7.8	4.2	1.86	亀鳳文	円形	銀線巻	象嵌無窓鐔	横佩か	—
36	大阪 芝塚（1）	IV b	鉄製	6.1	4.6	1.33	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌無窓鐔	—	—
37	群馬 伝高崎市岩鼻	IV b	鉄製	7.2	4.2	1.71	亀鳳文	円形	—	—	—	—
38	宮城 鷹ノ巣	IV b	鉄製	8.2	4.1	2.00	亀鳳文	円形	—	—	—	—
39	茨城 梶山	IV b	鉄製	6.6	4.5	1.47	亀鳳文	円形	有機物か	—	—	—
40	福岡 塚花塚	IV b	鉄製	7.8	4.5	1.73	亀鳳文	円形	—	—	—	—
41	静岡 原分	IV b	鉄製	8.5	5.4	1.57	亀鳳文	円形	—	象嵌八窓鐔	—	—
—	埼玉 秋山古墳群	IV b	鉄製	10.0	5.6	1.79	亀鳳文	円形	—	象嵌八窓鐔	—	—
—	千葉 瓢塚40号	IV b	鉄製	6.0	4.1	1.46	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌無窓鐔	—	—
—	石川 蝦夷穴	IV b	鉄製	6.9	3.8	1.82	亀鳳文	円形	有機物か	象嵌八窓鐔	吊手孔付佩用金具	銀象嵌平尻
42	大阪 芝塚（2）	IV c	鉄製	4.8	3.5	1.37	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
43	福岡 鬼塚2号（1）	IV c	鉄製	4.2	3.5	1.20	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
44	福岡 鬼塚2号（2）	IV c	鉄製	3.8	2.6	1.46	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
45	福島 中田	IV c	鉄製	4.2	3.5	1.20	心葉文	円形	有機物か	—	—	—
46	栃木 赤麻	IV c	鉄製	2.7	2.9	0.93	心葉文	円形	—	—	—	—
47	東京 久ヶ原48号	IV c	鉄製	5.0	2.7	1.85	心葉文	円形	—	—	—	—
48	栃木 トトコチ山	IV b	鉄製	12.2	6.3	1.94	唐草文	円形	有機物か	象嵌八窓鐔	—	平尻
円頭Ⅴ式（木芯塗装）												
—	三重 平田14号	V	木芯塗装	—	—	—	無文	—	有機物巻	板状鐔	—	銀象嵌丸尻
27	東京 岡本1号横穴	V	木芯塗装	4.8	3.7	1.30	無文	円形	銅線巻	喰出鐔	吊手孔付佩用金具	—
—	福島 阿弥陀壇土坑	V	木芯塗装	4.2	3.1	1.35	無文	円形	糸巻	喰出鐔	吊手孔付佩用金具	平尻
28	北海道 フゴッパ洞窟	V	木芯塗装	4.3	3.1	1.39	無文	円形	糸巻	喰出鐔	—	—
—	奈良 正倉院	V	木芯塗装	4.1	2.8	1.46	無文	円形	糸巻	喰出鐔	（双脚佩用金具）	（平尻）

(バーレン内は不確実な情報であることを示す)

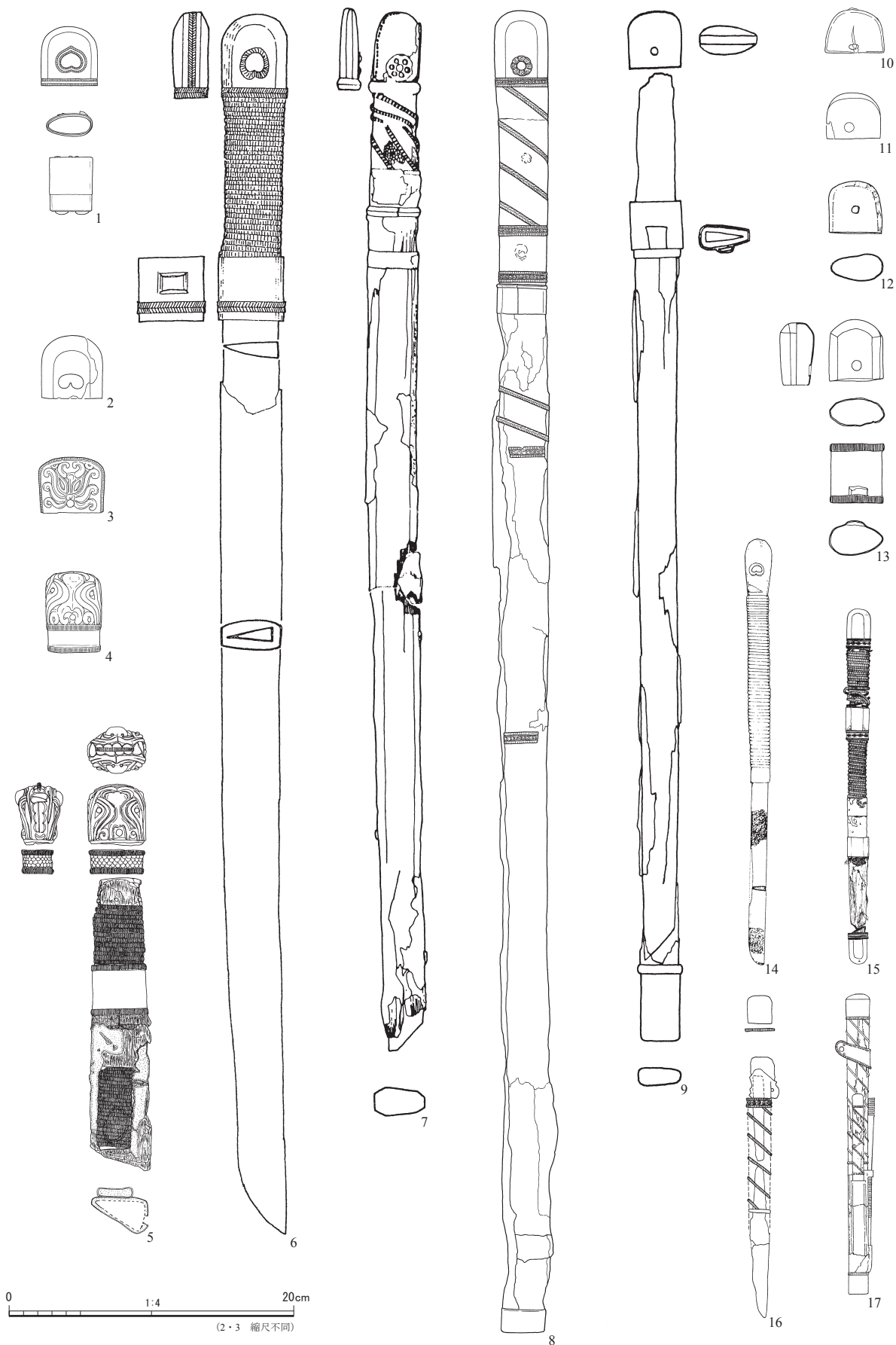


Fig.83 朝鮮半島出土円頭大刀・刀子の諸例

1: 宋山里4号 2・3: 金冠塚 4: 伝朝鮮 (小倉コレクション) 5: 伝高靈 (金東鉉コレクション) 6: 校洞11号 7: 伝朝鮮 (神林淳雄資料) 8: 伝連山里 (小倉コレクション) 9: 夫婦塚 10: 林堂6A号 11: 宋山里6号 12: 校洞7号 13: 伝朝鮮 (李養璿コレクション) 14: 新村里9号乙棺 15: 武寧王陵 16: 金冠塚 17: 金鈴塚

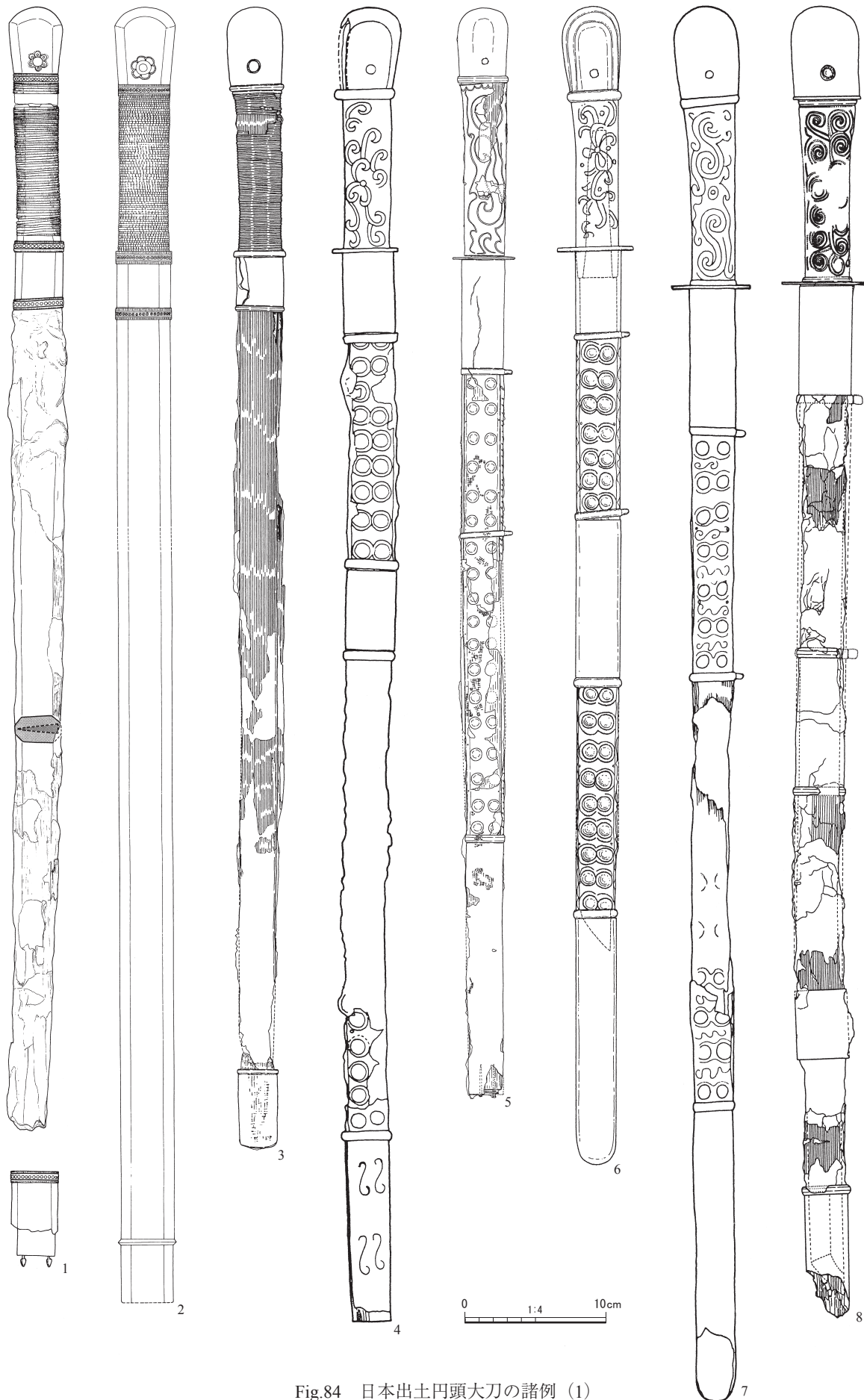


Fig.84 日本出土円頭大刀の諸例 (1)

1: 岡田山1号 2: 藤ノ木 3: 風返稻荷山 (2) 4: 綜三郷村88号 5: 風返稻荷山 (3) 6: 御山 SX015 7: 川内天王山 8: 宮口11号

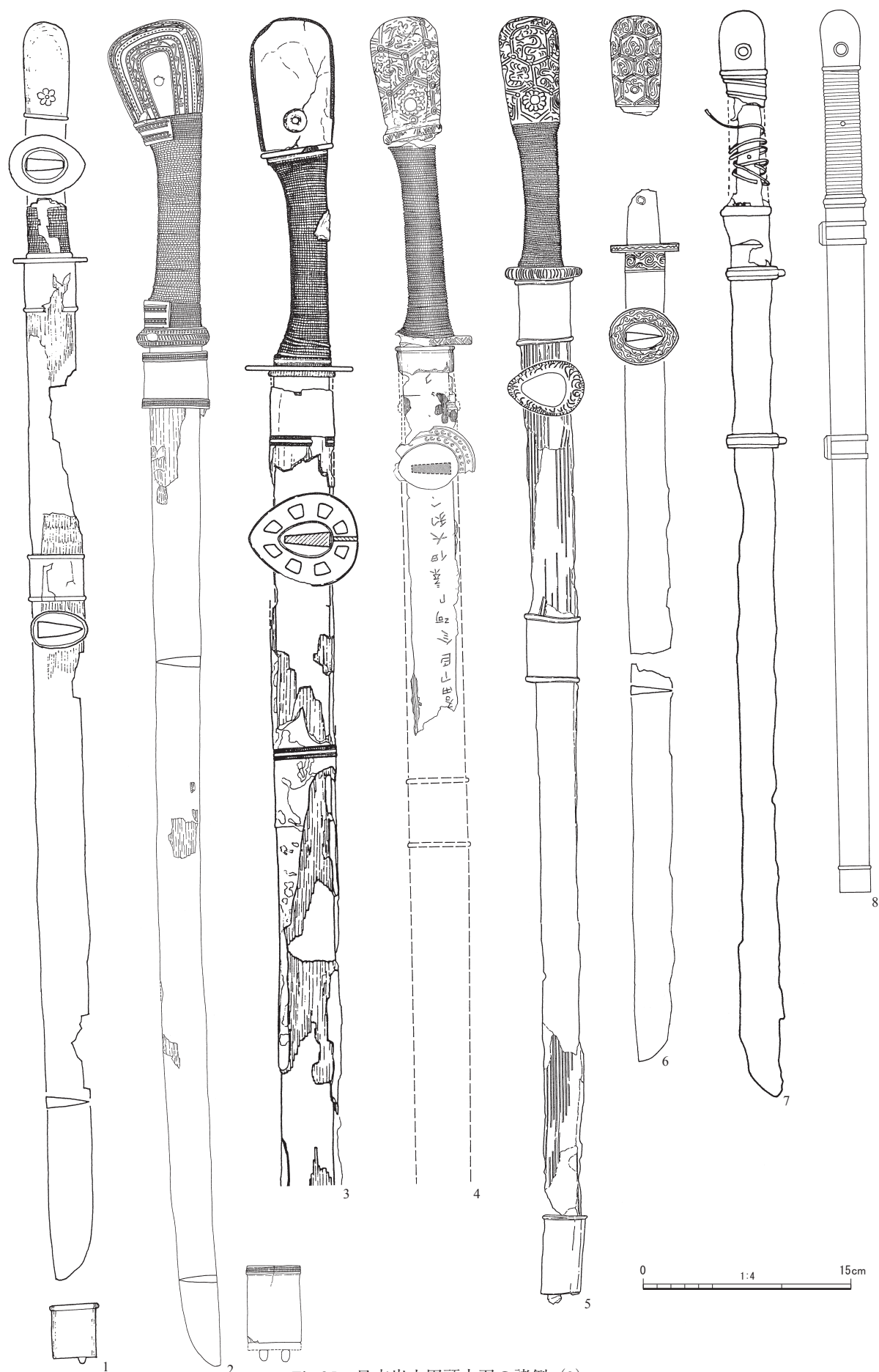


Fig.85 日本出土円頭大刀の諸例 (2)

1: 古天神 2: 別処山 3: 上塩冶築山 4: 岡田山1号 5: 平井1号 6: 権現山 7: 岡本1号横穴 8: 正倉院

円頭Ⅴ式 木芯漆装の円頭Ⅴ式には、三重県平田14号墳例のように鉄製銀象嵌の鞘尻金具が伴うものがある。柄間は糸巻きにされるものが多く、板状鏝や喰出鏝が伴う。吊手孔付佩用金具が附属する個体があり、横佩にされていたことが分かる。円頭Ⅴ式はここに設定した各型式と比べて新しい段階に出現したものとみられ、奈良時代の正倉院宝物の中にも類例を見出すことができる。

各型式の変遷 円頭大刀各型式の大まかな変遷観を示しておきたい。円頭Ⅰ式の初現は、宋山里4号墳例や金冠塚古墳例、林堂6A号例などの事例から5世紀末（TK47型式期）に位置づけられる。円頭大刀出現の当初から、Ⅰa式とⅠb式の双方が並存していたとみられる。円頭Ⅰa式の下限は鳥居松遺跡例で検討したように武寧王陵出土資料（527年以前、MT15型式期）を若干降る時期、6世紀前葉（TK10型式古相期）に求めておきたい。

円頭Ⅱ式の出現時期は、武寧王陵から出土した2点の円頭刀子柄頭の長幅比が1.24と1.64であることから、MT15型式期とみられる。その下限は岡田山1号墳例や藤ノ木古墳例、宇洞ヶ谷横穴例が示すTK43型式期前半と捉えられる。円頭Ⅱa式にみられる花形飾りは単龍鳳Ⅲ式からⅣ式（新納1982）の筒金具にみられる装飾に通じ、およそその併行関係（TK10型式新相期～TK43型式期前半）を示すことができる。円頭Ⅱ式の中心的な時期を示すものと捉えておきたい。

円頭Ⅲ式は、銀線巻柄間（円頭Ⅲa式）→金銅線巻柄間（円頭Ⅲa式）→金銅板張柄間（円頭Ⅲb式）といった変遷の傾向が指摘できる（日高2000）。鞘尻金具も平尻から丸尻へ変化し、円頭Ⅲb式には吊手孔付佩用金具が伴うものが多い。円頭Ⅲa式は他の金属線巻柄間をもつ装飾大刀との併行関係（単龍鳳Ⅴ式など）からTK43型式期後半に併行すると捉えられる。いっぽう、円頭Ⅲb式は装飾大刀外装の斉一化以後の製品であり、単龍鳳Ⅵ式併行段階、6世紀末（TK209型式期前半期）におおよその年代を求めうる。また、覆輪を伴う円頭Ⅲc式の出現時期は、鳥根県鷺の湯病院跡横穴例や長野県六万部古墳例などの拵えの特徴から、円頭Ⅲb式と同時期と捉えられる。

円頭Ⅳ式の存続期間は比較的長い。古相を示す短頭の円頭Ⅳa式の時期については円頭Ⅰ式との形態的な類似から、TK47型式期～TK10型式古相期に接点が見出せる。いっぽう、円頭Ⅳb式は古相段階にみられる象嵌には、懸通孔の周りに花形模様をあしらうものがあることから、円頭Ⅱa式の時期（TK10型式新相期～TK43型式期前半）に重なることが知られる。円頭Ⅳc式は、円頭Ⅳb平井1号式の象嵌模様との関連から6世紀末（TK209型式前半期）以降に出現したものと捉えられる。

円頭Ⅴ式は最も遅れて出現した系列で、正倉院宝物に知られることから8世紀代まで系譜が追える。その初源期は、東京都岡本1号横穴例にみる吊手孔付佩用金具の特徴や、平田14号墳例にみる銀象嵌鞘尻金具の模様構成などから、7世紀初頭（TK209型式後半期）とみて大過ない。

（4）結 語

以上、鳥居松遺跡出土の円頭大刀の分析を通じ、朝鮮半島と日本列島の双方から出土する円頭大刀の変遷をあとづけることができた。鳥居松遺跡例は諸属性にみられる類例から、加耶もしくは百済で製作されたとみられること、その製作時期は6世紀前葉（TK10型式古相期）を前後する頃とみられることを示した。鳥居松遺跡例に採用されている木彫金銀張技法についても、従来の認識の

2 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

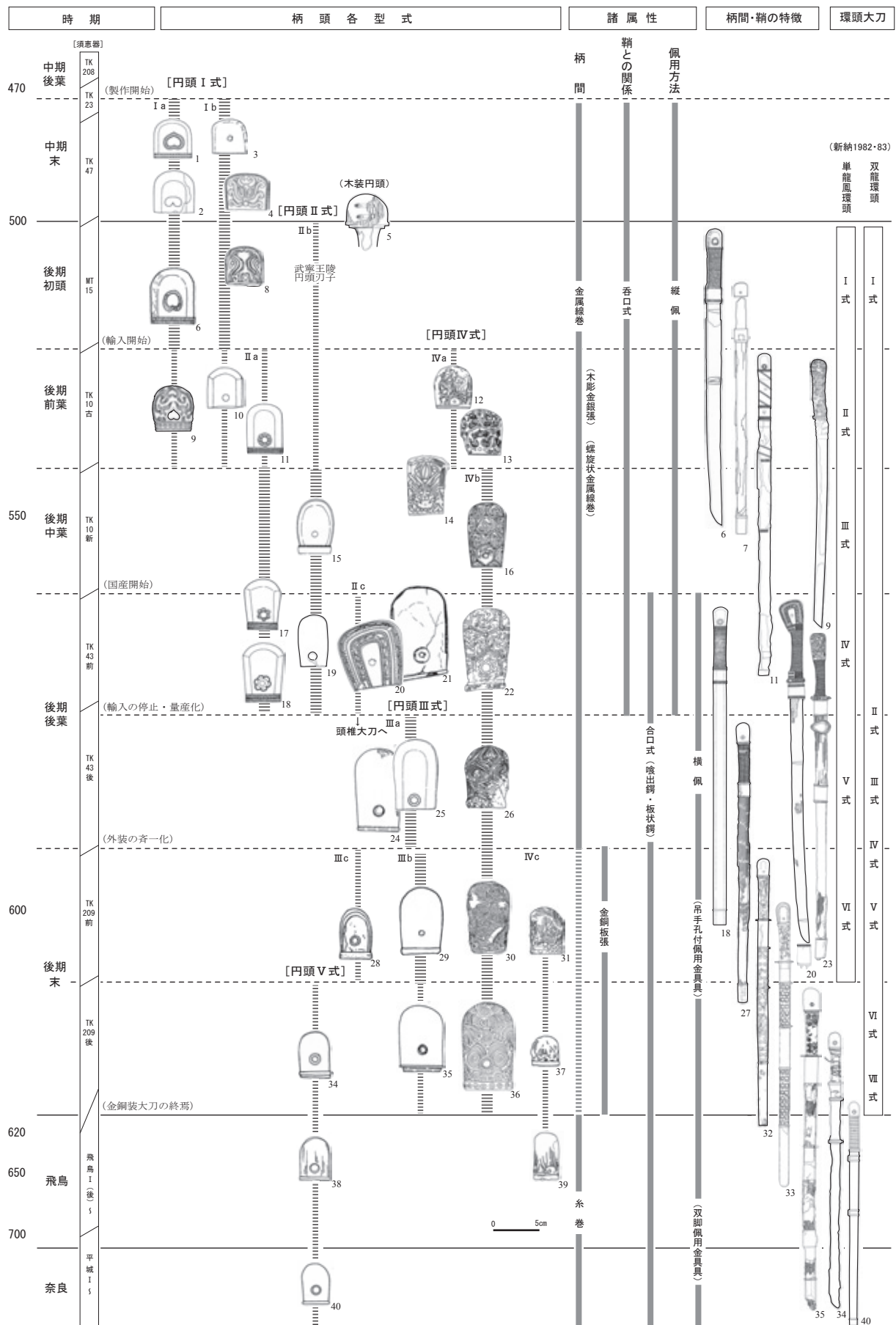


Fig.86 円頭大刀変遷図
(出土地：P.52 参照)

ように、倭における独自性と捉える必要がなくなったことも特筆できる。鳥居松遺跡例の埋没時期は、同一層位から出土した土器（SX05 出土遺物）から、6 世紀後葉（TK43 型式期）であることが判明しており、その使用期間は比較的長期であったことが分かる。使用期間中に、柄頭への金銀板の鈹打ちや責金具の追加といった補修が行われたとみられる。

鳥居松遺跡例の出土により、従来、系譜が不明瞭であった装飾大刀の柄間や鞘にみられる渦文は、連続波頭文に遡源のひとつが辿れることが明確になった。連続波頭文そのものの起源は今後の検討課題であるが、北魏の石製台座や金銅仏にみられる模様に源流の一端を求めることができる可能性を示した。柄間を金銅板で覆う技法の遡源を辿る上でも、鳥居松遺跡例がもつ重要性は高い。

円頭大刀の型式分類と時期は概略を示したに過ぎないが、分布の時期的な変遷をあとづける上でも必要な作業である。今後は、各型式の円頭大刀に伴う装具などの相互比較を通じ、他形式の装飾大刀との関係を追求する姿勢が求められるだろう。

【参考文献】

- 置田雅昭 1985「古墳時代の木製刀柄装具」『天理大学学報』第 145 輯 天理大学学術研究会
- 大谷晃二 1999「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 勝部明生・鈴木 勉 1998『古代の技―藤ノ木古墳の馬具は語る―』吉川弘文館
- 小林義孝・有井宏子 1996「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀―龍文銀象嵌鞘金具付振り環頭大刀―」『研究紀要』第 7 号 八尾市歴史民俗資料館
- 瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬芳之 1986「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』No.266 ニューサイエンス社
- 新納 泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第 65 巻第 4 号
- 新納 泉 1983「武器」『湯舟坂 2 号墳』久美浜町教育委員会
- 新納 泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾大刀の編年」『考古学研究』第 34 巻第 3 号
- 西山要一・山口誠治・李午熹 1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（一）」『青丘学術論集』第 9 集 （財）韓国文化研究振興財団
- 橋本博文 1986「金銀象嵌装飾円頭大刀の編年」『考古学ジャーナル』No.266 ニューサイエンス社
- 橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
- 橋本英将 2006「『折衷系』装飾大刀考」『古代武器研究』Vol.7 古代武器研究会
- 日高 慎 2000「風返稲荷山古墳出土の飾大刀と佩用方法について」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 町田 章 1986「環頭大刀二三事」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 町田 章 1987「岡田山 1 号墳の儀杖大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
- 町田 章 1991「鬼面紋象嵌柄頭について」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要』第 6 号
- 町田 章 1997「加耶の環頭大刀と王権」『加耶諸国の王権』仁済大加耶文化研究所（韓国）
- 松尾充晶 2003「装飾付大刀」『考古資料大観』第 7 巻 弥生・古墳時代 鉄・金属製品 小学館
- 山本忠尚 2006「囲屏石牀の研究」『中国考古学』第 6 号 日本中国考古学会
- 金 洛中 2007「6 世紀栄山江流域の装飾大刀と倭」『栄山江流域古代文化の成立と発展』学研文化社（韓国）
- 李 漢祥 2006「漢城百濟装飾大刀の製作技法」『漢城から熊津へ』國立公州博物館（韓国）

〔古墳・遺跡文献〕

中 国

大同南郊 M112：山西大学歴史文化科学院ほか 2006『大同南郊北魏墓群』科学出版社（中国）

大同雁北師院 M5：劉俊喜（編） 2008『大同雁北師院北魏墓群』大同市考古研究所 文物出版社（中国）

大同南郊人物文硯：解廷琦 1979「大同市郊出土北魏石彫方硯」『文物』1979-7（中国）、曾布川寛ほか 2005『中国☆美の十字路展』大広新田グループコレクション（北魏金銅仏）：金子啓明・山本勉（編） 1987『特別展金銅仏—中国・朝鮮・日本—』東京国立博物館

朝鮮・韓国

南浦双楹塚：共同通信社 2005『高句麗壁画古墳』

天安花城里 A1 号：金吉植ほか 1991『天安花城里百濟墓』國立公州博物館（韓国）

公州宋山里 4 号（旧 1 号）：野守健・神田惣蔵 1935「公州宋山里古墳調査報告」『昭和二年度古蹟調査報告』第 2 冊 朝鮮総督府

公州宋山里 6 号：有光教一・藤井和夫（編） 2002『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅱ』（財）東洋文庫

公州武寧王陵：金元龍ほか 1973『武寧王陵』文化財管理局（韓国）

羅州新村里 9 号：穴沢咏光・馬目順一 1973「羅州潘南古墳群—梅原考古資料による谷井済一氏発掘遺物の研究—」『古代学研究』第 70 号、國立文化財研究所 2001『羅州新村里 9 號墳』（韓国）

羅州伏岩里 3 号：國立文化財研究所 2001『羅州伏岩里 3 號墳』（韓国）

慶州金冠塚：濱田耕作・梅原末治 1924・1927『慶州金冠塚と其の遺寶』古蹟調査特別報告 第三冊 朝鮮総督府

慶州金鈴塚：梅原末治 1931・1932『慶州金鈴塚飾履塚』『大正十三年度古蹟調査報告』第一冊 図版・本文 朝鮮総督府

慶州鷄林路 14 号：穴沢咏光・馬目順一 1980「慶州鷄林路 14 号墓出土の嵌玉金装短剣をめぐる諸問題」『古文化談叢』第 7 集 九州古文化研究会

慶山林堂 6A 号：鄭永和ほか 2003『慶山林堂地域古墳群Ⅶ 林堂 5・6 號墳』嶺南大學校博物館（韓国）

伝高靈（金東鉉コレクション）：湖巖美術館 1997『湖巖美術館所蔵金東鉉蒐集文化財』（韓国）

昌寧校洞 7・11 号：穴沢咏光・馬目順一 1975「昌寧校洞古墳群—「梅原考古資料」を中心とした谷井済一氏発掘資料の研究—」『考古学雑誌』第 60 巻第 4 号

梁山夫婦塚：小川敬吉 1927「梁山夫婦塚と其遺物」『古蹟調査特別報告』第 5 冊 朝鮮総督府、沈奉謹 1991『梁山金鳥塚・夫婦塚』東亞大學校博物館（韓国）

陝川玉田 M3 号：趙榮濟・朴升圭 1990『陝川玉田古墳群Ⅱ M3 號墳』慶尚大學校博物館（韓国）

伝朝鮮（李養瑿コレクション）：國立慶州博物館 1987『菊隠李養瑿蒐集文化財』（韓国）

伝連山里・伝朝鮮（小倉コレクション）：東京国立博物館 1982『寄贈小倉コレクション目録』、國立文化財研究所 2005『日本東京国立博物館所蔵小倉コレクション韓国文化財』（韓国）

伝朝鮮（東京国立博物館蔵）：早乙女雅博・東野治之 1990「朝鮮半島出土の有銘環頭大刀」『MUSEUM』第 467 号 東京国立博物館、李漢祥 2006「漢城百濟装飾大刀の製作技法」『漢城から熊津へ』國立公州博物館（韓国）

伝朝鮮（神林淳雄資料）：瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会

日 本

北海道フゴッペ洞窟：野村崇・瀧瀬芳之 1990「北海道余市町フゴッペ洞窟前庭部出土の鉄製武器」『古代文化』第 42 巻第 10 号

宮城県鷹ノ巣：村山斌夫 1987「出土金属製遺物の自然科学的調査と保存処理について」『東北歴史資料館研究紀要』第 13 巻

福島県阿弥陀壇：佐藤千春・高松俊雄 1979『阿弥陀壇』郡山市教育委員会

福島県中田横穴：馬目順一ほか 1971『中田装飾横穴』いわき市史・別巻 いわき市、西山要一 1981「X線透過試験による古墳時代円剣の調査」『出土遺物・民俗文化財へのX線透過試験の応用』元興寺文化財研究所

栃木県別処山：斎藤光利ほか 1992『別処山古墳』南河内町教育委員会

栃木県トトコチ山：佐野市 1975「トトコチ山古墳」『佐野市史』資料編 1、佐野市郷土博物館 1986『よみがえる古墳—佐野とその周辺—』

- 栃木県赤麻：橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
- 茨城県風返稻荷山：千葉隆司（編）2000『風返稻荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 茨城県伝舟塚：本田伸之 2006「伝舟塚資料」『玉里村の歴史』玉里村
- 茨城県梶山：汀安衛ほか 1981『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会
- 茨城県赤浜：長谷川聡 2009『平成21年特別展 かがやきにこめた権威と莊厳—金と銀の考古学—』茨城県立歴史館
- 群馬県伝渋川市豊秋：末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂
- 群馬県台所山：町田章 1986「環頭大刀二三事」『山本清先生喜寿記念論文集 山陰考古学の諸問題』
- 群馬県綿貫観音山：徳江秀夫（編）1999『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』群馬県教育委員会
- 群馬県伝旧多野郡八幡村（高崎市八幡町）・伝高崎市上豊岡・綜三郷村88号（伊勢崎市安堀町）：瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 群馬県伝藤岡市小林：山内紀嗣 1992「天理参考館所蔵の金銅装銀頭大刀」『天理参考館報』第5号、山内紀嗣 1996「天理参考館所蔵の双龍銀頭柄頭」『天理参考館報』第9号
- 群馬県平井1号：志村哲 1993『平井地区1号古墳』藤岡市教育委員会
- 群馬県伝高崎市岩鼻・伝藤岡市北郷：西山要一・山口誠治・李午憲 1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（一）」『青丘学術論集』第9集（財）韓国文化研究振興財団
- 埼玉県秋山古墳群：瀧瀬芳之・野中仁 1995「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌大刀—」『研究紀要』第12号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉県金鈴塚：酒巻忠史 2007『木更津市文化財調査集報 金鈴塚古墳出土遺物の再整理2 —大刀の実測—』木更津市教育委員会
- 千葉県山王山：小出義治ほか（編）1980『上総山王山古墳』市原市教育委員会、新納泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号
- 千葉県生実所在：白井久美子ほか 1992『房総考古学ライブラリー6』（財）千葉県文化財センター
- 千葉県新坂1号：石本俊則ほか 1995『新坂遺蹟・東風吹山遺蹟・蒲野遺蹟・西後藤遺蹟』（財）山武郡文化財センター
- 千葉県白姫塚、鶴巻塚：白石太郎・白井久美子・山口典子 2002『千葉県史編さん資料 千葉県古墳時代関係資料』千葉県
- 千葉県瓢塚40号：安藤鴻基 1990「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」『千葉県立房総風土記の丘年報』13
- 千葉県城山1号：丸子亘ほか 1978『城山第一号前方後円墳』小見川町教育委員会
- 千葉県御山SX015：渡辺修一・矢本節朗 1994『四街道市 御山遺蹟（1）』（財）千葉県文化財センター
- 東京都岡本1号横穴：桜井清彦・大川清 1959「東京都世田谷区岡本町横穴古墳調査報告」『古代』第32号、瀧瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 東京都塚越14号横穴・久ヶ原48号横穴：野本孝明（編）1994『考古学からみた大田区—横穴墓・古代・中世 資料編—』大田区教育委員会
- 新潟県宮口11号：泰繁治ほか 1976『宮口古墳群』牧村教育委員会
- 長野県塚穴原1号：塩入秀敏・米山一政ほか 1976『塚穴原第1号古墳発掘調査報告書』上田市教育委員会
- 長野県六万部：片桐村誌編纂委員会 1966『片桐村誌』、長野県 1988『長野県史』考古資料編 全1巻（4）遺構・遺物
- 石川県蝦夷穴：富田和気夫ほか 2001『史跡 須曾蝦夷穴古墳Ⅱ』能登島町教育委員会
- 静岡県原分：井鍋誉之（編）2008『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 静岡県石川T3号：滝沢誠・菊池吉修 2002「石川古墳群」『沼津市史』資料編 考古 沼津市
- 静岡県宇洞ヶ谷横穴：向坂鋼二ほか 1971『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』静岡県教育委員会
- 静岡県明ヶ島15号：室内美香ほか 2003『東部土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 静岡県山ノ花：（財）浜松市文化協会 1998『山ノ花遺蹟』
- 愛知県権現山：小笠原久和 2005「権現山古墳」『愛知県史』資料編3 古墳 愛知県
- 三重県井田川茶白山：小玉道明（編）1988『井田川茶白山古墳』三重県教育委員会
- 三重県平田14号：竹内英昭ほか（編）1987『平田古墳群』安濃町遺跡調査会

2 鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜

- 滋賀県北谷7号：西田弘 1992「草津市北谷古墳群の調査」『平成2年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会
- 大阪府芝塚：高萩千秋 1993『芝塚古墳』（財）八尾市文化財調査研究会
- 大阪府山畑22号：西山要一 1986「古墳時代の象嵌一刀装具について」『考古学雑誌』第72巻第1号
- 大阪府三日月13号：尾谷雅彦・鳥羽正剛 1994『三日月市遺跡調査報告書Ⅲ』河内長野市遺跡調査会
- 京都府穀塚：京都大学総合博物館 1997『王者の武装』
- 兵庫県勝福寺：木村次雄 1929「摂津の鈴鏡出土の古墳」『考古学雑誌』第19巻第11号
- 奈良県星塚2号：小島俊次 1955「奈良県天理市上之庄 星塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第7輯 奈良県教育委員会、町田章 1987「岡田山1号墳の儀杖大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会
- 奈良県珠城山1号：伊達宗泰・小島俊次 1956『珠城山古墳』奈良県教育委員会
- 奈良県藤ノ木：前園実知雄 1995『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次発掘調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良県新沢327号：千賀久 1989「新沢千塚の鉄刀剣」『大和考古資料目録16』X線調査資料（1）奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館
- 奈良県布留：山内紀嗣ほか 1995『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団
- 奈良県正倉院：正倉院事務所（編）1977『正倉院の大刀外装』小学館
- 岡山県穴が澄：上橋武 2008「穴が澄古墳」『岡山県埋蔵文化財調査報告書213』岡山県教育委員会
- 鳥根県古天神：高橋健自 1919「出雲国八束郡大草古天神山古墳発掘遺物」『考古学雑誌』第9巻第5号、山本清 1968「古天神古墳」『鳥根県文化財調査報告書』第5集 鳥根県教育委員会
- 鳥根県かわらけ谷横穴墓群：松尾充晶（編）2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』鳥根県古代文化センター
- 鳥根県上塩冶築山：松本岩雄（編）1999『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター
- 鳥根県岡田山1号：松本岩雄（編）1987『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会
- 鳥根県鷺の湯病院跡横穴：山本清 1984「横穴被葬者の地位をめぐって」『鳥根県考古学会誌』第1集、大谷晃二・松尾充晶 2004「鳥根県 装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧（改訂版）」『鳥根県考古学会誌』第20・21集合併号
- 香川県母神山古墳群：町田章 1991「鬼面紋象嵌柄頭について」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要』第6号
- 福岡県鬼塚：橋本博文 1993「亀甲繫鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集
- 福岡県平等寺向原Ⅰ-1号：安部裕久 1992『平等寺向原Ⅰ』宗像市教育委員会
- 宮崎県狐塚：東憲章・岡本武憲・柄本久子 2006「宮崎県日南市風田に所在する狐塚古墳の出土遺物」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第2号
- 宮崎県島内114号地下式横穴：中野和浩（編）2009『島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡元遺跡』えびの市教育委員会

〔図出典等〕

Fig.75～77、79、80、82～85：各報告文献より引用、一部改変再トレース Fig.78:1～3は〔町田1997〕、4は〔町田1986〕より、左記以外は各報告文献より引用 Fig.86：各報告文献より引用のうえ筆者作成

Fig.86の出土地

- 1: 宋山里4号 2: 4: 金冠塚 3: 校洞7号 5: 布留 6: 校洞11号 7: 夫婦塚 8: 伝高霊（金東鉉コレクション） 9: 鳥居松 10: 伝朝鮮（李養璫コレクション） 11: 伝連山里（小倉コレクション） 12: 北谷7号 13: 星塚2号 14: 母神山古墳群 15: 穴が澄 16: 権現山 17: 22: 岡田山1号 18: 藤ノ木 19: 宇洞ヶ谷横穴 20: 別処山 21: 上塩冶築山 23: 平井1号 24: 風返稲荷山（1） 25: 鶴巻塚 26: 芝塚 27: 風返稲荷山（2） 28: 六万部 29: 川内天王山 30: 塚花塚 31: 鬼塚2号 32: 風返稲荷山（3） 33: 御山SX015 34: 岡本山1号横穴 35: 宮口11号 36: 原分 37: 赤麻 38: フゴッペ洞窟 39: 久ヶ原48号横穴 40: 正倉院

3 伊場大溝における円頭大刀出土の意義

(1) はじめに

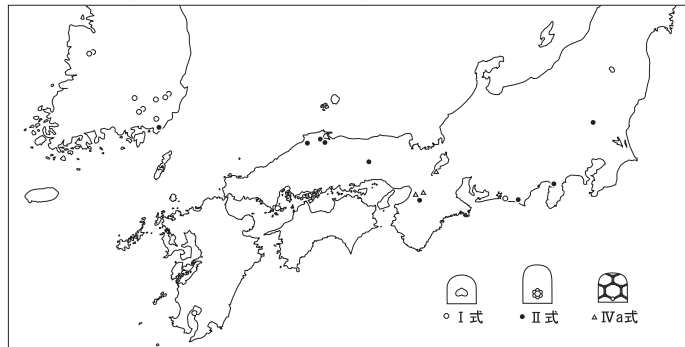
前節までの検討によって、鳥居松遺跡出土例の系譜と製作時期を明らかにし、円頭大刀の推移を示した。ここでは、時期別にみた円頭大刀出土地の検討を通じ、この大刀が西遠江地域にもたらされた経緯について触れる。鳥居松遺跡例は、自然河川（伊場大溝）の川底で検出されるという装飾大刀としては極めて異例の出土状態が確認された。本例の出土状態からうかがえる河川祭祀の実態について整理するとともに、伊場大溝に稀少な装飾大刀が沈められた意義について検討しておくたい。

(2) 円頭大刀保有の意味

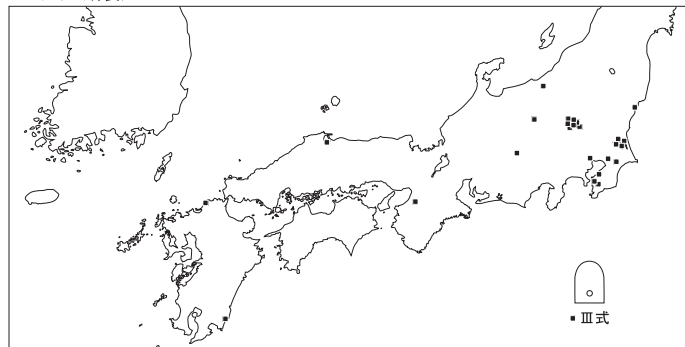
円頭大刀の出土地 鳥居松遺跡で出土した円頭大刀は、前節で明らかにしたように、6世紀前葉（TK10 型式古相期）に朝鮮半島の加耶もしくは百済で製作された可能性が高く、彼の地から倭にもたらされたと考えられる。円頭大刀が伊場大溝に沈められたのは6世紀後葉（TK43 型式期）であるので、その使用期間は比較的長いといえる。鳥居松遺跡例の柄頭や柄間には数多くの補修の痕跡が認められるが、装飾大刀の長期間の使用をうかがわせる特徴として認識できよう。

前節に示した円頭Ⅰ式やⅡ式、Ⅳa式といった古い段階の円頭大刀の出土地は、朝鮮半島南部のほかに、日本国内では近畿地方中枢部と出雲に集中する。古い段階の円頭大刀が近畿地方中枢部に比較的多くみられることを勘案すると、古式の円頭大刀は、倭王権中枢部やその周辺勢力が、朝鮮半島から積極的に入手していたとみられる。鳥居松遺跡から出土した円頭大刀も、倭王権との関係を通じて、西遠江地域の有力者の手に渡されたものと想定してよい。

Ⅰ・Ⅱ式（金銀装）、Ⅳa式（古式鉄製象嵌装）



Ⅲ式（金銅装）



Ⅳb式（新式鉄製象嵌装）

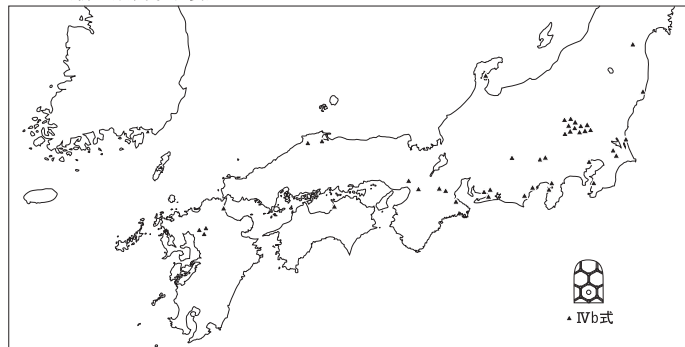


Fig.87 円頭大刀の分布

円頭大刀は、Ⅱ式もしくはⅣb式の古い段階で倭において試作的な製品が作られるようになり、Ⅲ式（金銅装）やⅣb式（鉄製銀象嵌装）の新しい段階において大量生産される。円頭Ⅲ式出現以降、円頭大刀の出土地は、関東に集中する傾向を強めるが、円頭Ⅲb式にみられる装具の画一性と、西日本地域でも少ないながら円頭Ⅲ式の出土例がみられることから、その製作地は近畿地方と捉えてよいだろう。

円頭大刀所有の意味 金銅装である円頭Ⅲ式は、上野、常陸、上総、下総の出土例が圧倒的に多く、これらの地域の出土例だけで、円頭Ⅲ式全出土量の6割を超える。円頭Ⅲ式の分布から明らかのように、円頭大刀においても他の装飾大刀で注目されているような分布の偏在性が指摘できる。

特定の装飾大刀にみられる分布の違いと、出土古墳の特徴、文献上における有力氏族の勢力基盤などの分析から、単龍鳳環頭大刀と大伴氏、双龍環頭大刀と蘇我氏、頭椎大刀と物部氏との関連が指摘されている（桐原 1969、清水 1983、新納 2002）。特徴的な分布状況から、円頭大刀の保有についても、同様に有力氏族との結びつきを想定することも許されよう。円頭大刀と同様に関東地域に出土例が集中する装飾大刀として、頭椎大刀があげられる。円頭大刀と頭椎大刀は形態変化の上でも親縁性が高く、佩用者の性格も近似したものであった可能性がある。

東海における装飾大刀の分布 視点を地域史に移し、東海における装飾大刀の分布状況について触れておこう（岩原 2001、大谷編 2006）。東海では西部と東部で装飾大刀の分布に差が認められる。東海西部における装飾大刀の分布は、近畿中枢部と同様に希薄な傾向が見出せる。東海西部は、倭王権の安定的な勢力基盤であったことがその要因としてあげられるだろう装飾大刀の多量配布を必要としない地域秩序が形成されていたとみられる。

いっぽう、渥美半島基部から遠江、駿河にかけての東海東部は、装飾大刀の集中が顕著である。東海西部に想定した安定的な勢力基盤とは異なり、倭王権が地域の中小勢力を直接的に掌握する必要から、数多くの装飾大刀が下賜された結果と捉えられる（向坂 1971）。単龍鳳環頭大刀が東遠江や東駿河に集中するほか、獅噛環頭大刀や頭椎大刀が東海東部に数多くみられる点が特徴としてあげられる（Fig.88、鈴木 2006）。東海東部は関東地域に至る主要経路上にあたり、倭王権から重視されていた表れとみなせる。

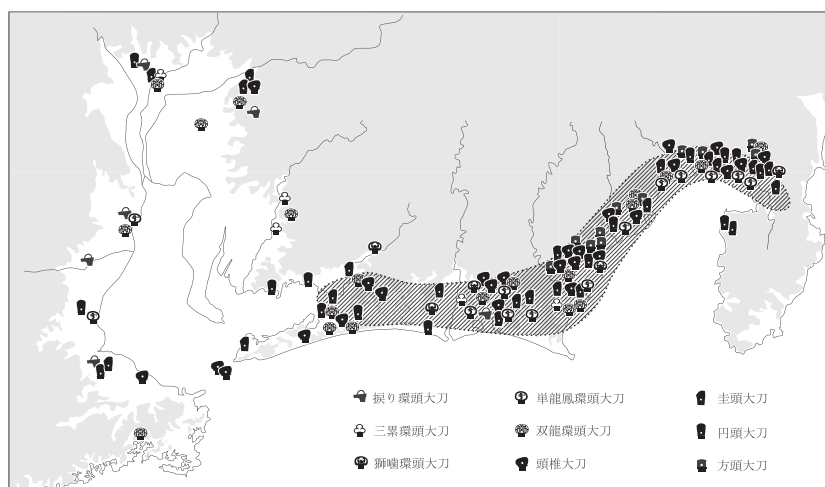


Fig.88 東海における装飾大刀の分布

古式の円頭大刀にかんしては、掛川市宇洞ヶ谷横穴（向坂ほか 1971）に円頭Ⅱ式の出土が確認できる。同横穴からは、単龍鳳Ⅳ式（新納 1982）に位置づけられる単龍環頭大刀や金銅装馬具が共伴し、その被葬者像として地域を統括する中核的な首長層が想定できる。鳥居松遺跡例のような稀少品

を入手しえた有力階層の具体像をうかがう事例として特筆できるだろう。

(3) 自然河川に対する儀礼

鳥居松遺跡例は、自然河川（伊場大溝）の川底から出土した。円頭大刀は鞘から抜かれた抜き身の状態で川の流れの方向に併行して出土しており、単に廃棄されたものではないことが明確である。川底に沈めた行為の背景には、何らかの儀礼的な意味があったことは十分に予想できる。装飾大刀の拵えの一部が自然河川や集落内の遺構から出土することはあっても、本例のような稀少品が、完全な形を保ったままで自然河川から出土することは全国的にみても例がない。川底から装飾大刀が出土する意味について、儀礼行為と共伴遺物をもとに考えてみたい。

鞘を抜く行為 鳥居松遺跡から出土した円頭大刀は、鞘を抜いた状態で川底に沈められていた。刀剣類が鞘から抜かれて扱われることは、前期から中期の古墳副葬品に見出すことができる。滋賀県雪野山古墳では、竪穴式石室内に副葬された7点の刀剣類のうち、被葬者を囲む中央区画の刀1点と剣2点には鞘がなく、布が直接巻かれていた。被葬者の足元にあたる棺内南区画の刀1点と剣1点および棺外から出土した剣2点は鞘に納められていた。被葬者を取り囲む最も重要な位置に置かれる刀剣のみが鞘から抜かれていたことが分かる。鞘から刀剣を抜く行為には、刀剣がもつ呪力を強調する意味があったとみられよう。

古墳時代後期になると、金や銀で飾った装飾大刀が古墳副葬品として広く普及し、刀の取り扱い方も大きく変化する。古墳時代後期の装飾大刀は鞘入りの状態で扱われることが一般的であり、鞘を抜いて副葬していると想定できる事例は皆無に等しい（註1）。古墳時代後期の装飾大刀は、柄頭や柄間の造形のみならず、鞘にも多様な装飾が施される。刀の象徴性を強調する際にも、外見的特徴が重視され、鞘入りの外装がもつ意味が増していたとみられる。

鳥居松遺跡の事例にみられた金銀装の装飾大刀を鞘から抜く行為は、後期古墳への副葬概念とは異なる祭儀的な意味が強かったことを示唆している。鞘を抜くことによって、儀礼に用いる刀の呪力を高めることが期待されたと考えられ、前期古墳の葬送儀礼に通底する伝統的な祭儀意識の表れとみなせる。

川底の出土状態 鳥居松遺跡から出土した円頭大刀の出土位置は、伊場大溝の底部ほぼ中央、標高-1.8mにあたる。刀身が川の流れの方向とほぼ一致し、切先が上流に向けられていた。現代の建物基礎杭による影響がみられるものの、ほぼ水平を保った出土状態といえ、川底に丁寧に沈められたものと判断できる。円頭大刀が沈められた6世紀後葉の伊場大溝は、ある程度の水量があったとみられ、大刀を用いた祭儀の対象は川の精霊であったと推測できる。

円頭大刀と近接した位置で検出した土器集積（SX05）も、円頭大



Fig.89 雪野山古墳における刀剣の出土状況

刀を沈めた行為との関連をどの程度見積もるか検討の余地はあるものの、同じ時代に執り行われた河川に対する祭祀の痕跡とみてよい。SX05 から出土した遺物には、祭祀具として特化した特別な器物はみられないが、完形の状態に近い須恵器坏類や土師器高坏が多い点は注目できる。伊場大溝の一般的な堆積層から出土する遺物群には、土師器の甕が多く含まれることと対照的なあり方を示している。SX05 出土遺物は、同時期の古墳に副葬する土器組成との類似点が指摘でき、飲食物を供献する儀礼がなされた可能性がある。

装身具の出土 伊場大溝は、上流部から梶子遺跡（9 次調査地点）、伊場遺跡、鳥居松遺跡の 3 箇所の調査地点で底面まで調査されているが、それぞれ 6～7 世紀の堆積土から耳環や玉類などの装身具の出土が確認されている。

耳環は梶子遺跡（浜文協 1994）と伊場遺跡（浜松市教委 1997）でそれぞれ 3 点が出土している。鳥居松遺跡の調査で出土した 2 点を合わせて、伊場大溝からの耳環の出土数は合計 8 点を数える。東西 1km ほど離れた地点でそれぞれ出土が確認できることから、伊場大溝内に含まれる耳環は相当数にのぼると捉えられる。

玉類にかんしては、梶子遺跡で碧玉製管玉 1 点の出土が知られ、鳥居松遺跡では碧玉製管玉 2 点、蛇紋岩製管玉 1 点、ガラス小玉 4 点、滑石製小玉 2 点、蛇紋岩製小玉 1 点を確認できた。鳥居松遺跡では、玉類はいずれも伊場大溝底面に近い湧水が顕著な層位から出土している。湧水を伴う環境下で、検出作業が困難であったことを考慮すると、伊場大溝内にもたらされた玉類はさらに多かったと想定できよう。

これら装身具も、円頭大刀と同様、何らかの祭儀に伴って川底に沈められたものが多かったと捉えられる。装飾大刀、飲食物を入れる須恵器や土師器、耳環、玉類などは同時代の古墳副葬品と共

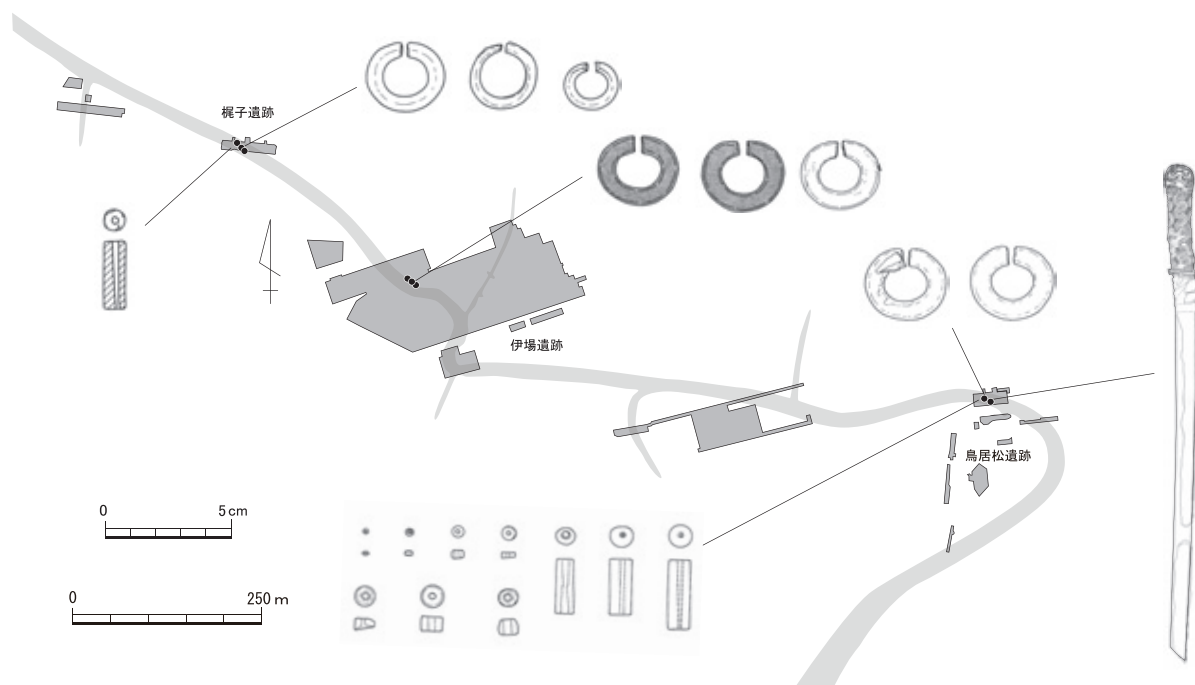


Fig.90 伊場大溝における装身具の分布状況

通する品目である。伊場遺跡群周辺の浜松市南部地域では、古墳の造営数が少なく、従来、6～7世紀の地域勢力の動態が不明瞭であった。しかし、今回確認された装飾大刀をはじめ、耳環、玉類など数多くの稀少品が伊場大溝内に沈められていることに注目すると、この地域にも有力古墳を築きうるような実力をもった有力階層がいたことがうかがえる。

6～7世紀の伊場大溝の堆積層からは、大量の土器とともに、韃羽口や鉄滓、漆が付着する土器などが出土している（第2分冊『伊場大溝編』第3章6）。小規模ながら鉄器や漆に関連する物品が生産されていたとみられる。韃羽口や鉄滓は、梶子遺跡でも出土しており、伊場大溝に沿った広範囲で鉄器が生産されていたと考えられる。6～7世紀の伊場遺跡群で想定できる手工業生産は、有力階層の経済基盤の一つであった可能性が高い。

伊場遺跡群の隆盛 鳥居松遺跡を含む伊場遺跡群には、7世紀後葉には評に関連する施設が置かれ、奈良時代から平安時代にかけて敷智郡家として地域社会の中心地となる（浜松市教委2008）。古代国家は地元の有力者を郡司に任命し、郡家の経営にあたらせている。敷智郡家が置かれる浜松南部地においても、後に郡司に任命されるような古墳時代の有力階層の存在が推測されていたが、周辺地域には有力な古墳や飛鳥時代の寺院などは見られず、その具体的な姿は明らかにされていなかった。

鳥居松遺跡における円頭大刀の出土によって、伊場遺跡群を勢力基盤とした6世紀代の有力者が具体的に想定できるようになった意義は大きい。また、伊場大溝から出土する豊富な遺物から、7世紀に至るまで伊場遺跡群において地域の有力階層の勢力が維持され続けたと想定できる。円頭大刀を入手した有力者の末裔が、後の郡家経営の有力な担い手となったと想定することは充分許されよう。

（4）結 語

ここまでの検討によって明らかにされた伊場大溝における円頭大刀出土の意義は、次の3点に集約できる。

- 1) 円頭大刀の編年や装飾大刀の模様系譜、製作技術の検討に重要な情報を提供した。
- 2) 装飾大刀を川底に沈める儀礼の痕跡を日本国内で初めて確認した。
- 3) 6世紀の浜松南部地域に、有力階層の存在が具体的に示せるようになった。

1) の具体的内容は、前節において展開したとおりである。鳥居松遺跡から出土した円頭大刀は朝鮮半島の加耶もしくは百済で製作され、倭王権の膝下である近畿地方中枢部を経て、当地にもたらされたと想定できる。稀少な装飾大刀が西遠江地域の有力者に与えられたのは、6世紀における倭王権の東国掌握の足がかりとして、当地の重要性が高まったことの反映とみる。

2) の評価にかんしては、今後の類例の増加を待って慎重に議論を重ねる必要がある。装飾大刀を川に沈めることは、河川に宿る精霊への供儀の意味があったとみられるが、具体的な儀礼の目的までは明確にできない。装飾大刀が鞘を除いた抜き身の状態で扱われることも異例である。刀剣を鞘から外す行為には、前期古墳の副葬行為に通底する伝統的な祭儀意識の表れと捉えられる。

なお、円頭大刀に表された龍には、水神や馬との関連が数多く見出せる（石田1966）。伊場大溝

の奈良時代の堆積層からは馬骨を始め、土製・木製の馬形が数多く出土している。装飾大刀とこれら古代の祭祀関連遺物との関連についても検討を進める必要がある。

3) については地域史を再構成する上で、重要な意味をもつ。円頭大刀の保有には、単龍鳳環頭大刀などとは異なる佩用者の性格が反映されているとみられ、6世紀代の西遠江勢力の具体像をうかがう上で重要な検討材料になりうる。7世紀後葉以降、敷智郡（測評）の役所が伊場遺跡群に置かれる前提となる勢力基盤が、6世紀代の当地にあったと捉えることも可能になった。

今回実施した鳥居松遺跡の調査によって、伊場遺跡群の内容は空間的にも、時期的にも従来の認識を超える広がりをもつことが明確になった。円頭大刀の出土という調査結果を経て、伊場遺跡群の探求は、新たな段階に突入したといえるだろう。

【註】

1 岡山県穴が辻古墳から出土した円頭大刀は、鞘から抜かれた状態で副葬された可能性が指摘されているが（上村 2008）、こうした事例は極めて珍しい。

【参考文献】

- 上村 武 2008「穴が辻古墳」『岡山県埋蔵文化財調査報告書 213』岡山県教育委員会
石田英一郎 1966『新版 河童駒引考—比較民族学的研究—』東京大学出版会
大谷宏治（編） 2006『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
岩原 剛 2001「東海の飾大刀」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会
桐原 健 1969「頭椎大刀佩用者の性格」『古代学研究』第 56 号 古代学研究会
清水みき 1983「湯舟坂 2 号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂 2 号墳』久美浜町教育委員会
鈴木一有 2006「東海の馬具と飾大刀にみる地域性と首長権」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
新納 泉 1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第 65 巻第 4 号
新納 泉 2002「古墳時代の社会統合」『倭国と東アジア』日本の時代史 2 吉川弘文館
浜松市教育委員会 1997『伊場遺跡遺物編 7』
浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』
（財）浜松市文化協会 1994『梶子遺跡Ⅸ』
向坂鋼二 1971「飾大刀について」『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』静岡県教育委員会
向坂鋼二ほか 1971『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』静岡県教育委員会

【図出典】

Fig.89 福永伸哉・杉井 健（編） 1996『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 より改変のうえ引用

Fig.90 梶子遺跡 9 次調査出土品：浜文協 1994、伊場遺跡出土品：浜松市教委 1997 より引用のうえ、筆者作成

第4章 総括

本書で報告した金銀装円頭大刀は、装飾大刀研究にかかわる多くの情報と、地域史における新たな視点をもたらした。発掘調査と遺物の分析を通じて得られた成果は多岐にわたるが、さいごに報告の内容を要約するとともに、後論で明らかにされた内容を総合し、今後の展望を示したい。

1 発掘調査の成果

出土状態 発掘調査で検出した自然河川「伊場大溝」は、幅 20m、深さ 2.5m 以上におよぶ。円頭大刀は、伊場大溝の底面、-1.81 ~ -1.85m の高さから出土した。出土層位は、6 世紀後半を中心とする堆積層（Ⅶb 層）である。円頭大刀は川の流れと並行し、佩表を上、切先を上流部に向けていた。鞘は存在せず、抜き身の状態で沈められていたことが判明している。完形の円頭大刀を川底に沈める儀礼が執り行われたものと捉えられる。

円頭大刀の東に接して、大規模な土器集積（SX05）を検出した。出土遺物の主体的な時期は 6 世紀後葉（TK43 型式期）に位置づけられ、円頭大刀が廃棄された年代が判明する。SX05 の形成と円頭大刀を沈めた儀礼との関連は明確でないが、SX05 出土遺物も河川にかかわる何らかの儀式に用いられた可能性がある。

円頭大刀の特徴 円頭大刀の全長は 76.5cm である。一部刀身に欠損があるものの、ほぼ完全な形態がうかがえる。刀身の切先は切刃造で両関と推定できる。柄頭と柄間は一体の柄木（カエデ属）で作られ、表裏 2 枚の材を合わせている。柄頭の長さは 3.7cm、幅は 4.4cm、厚さは 2.4cm である。柄頭と柄間には木彫金銀張技法によって装飾が施され、柄頭には龍文が、柄間には連続波頭文と連珠文がみられる。龍文は 2 ~ 3 本の凸線を用いて表し、連続波頭文は並行線を立体的に表現している。柄縁の区画帯には双連珠菱形文が彫り出され、柄元にも同じ模様の責金具がはめられている。柄頭には金板が、柄間には銀板が張られており、柄頭を中心に鋳を伴う補修の痕跡が認められる。柄元の責金具についても、補修の際に追加されたと捉えられる。

2 特筆すべきことから

円頭大刀の材質 柄頭と柄間にみられる金属装飾の材質を調べるため、蛍光 X 線分析を行った。この結果、柄頭には純度が高い金板が、柄頭の柄縁側や柄間には銀板が用いられていることが判明した。また、柄元の区画帯には金板が張られていること、柄元の責金具は銅地金張であることも合わせて確認できた。なお、柄頭にみられる補修には、金と銀の合金、および銀の板と鋳が用いられている。柄頭本来の姿については検討の余地があるが、補修後には柄頭に金と銀の双方が使用されていたことが分かる [第3章1]。

本例の時期と系譜 本例は、柄頭の全長が短いこと、心葉形懸通孔をもつこと、柄木が表裏2枚合わせて呑口式にされること、龍文や連続波頭文などの模様がみられることといった諸特徴から、朝鮮半島製の可能性が高いと判断できる。その製作地は、円頭大刀の出土が集中する加耶もしくは百済と推定できる。製作時期の上限は、区画帯や貴金具にみられる双連珠菱形文の特徴から、武寧王陵出土資料（武寧王、523年没）の段階（MT15型式期）に求めることができるが、簡略傾向をもつ龍文をもつことや、柄間を金属張にするという新しい様相から、武寧王陵出土資料の次の段階、6世紀前葉の新しい時期（TK10型式古相期併行）に位置づけることが妥当とみられる〔第3章2〕。

河川と装飾大刀 装飾大刀を川底に沈める儀礼の痕跡を日本国内で初めて確認した。その行為には、河川に宿る精霊への供儀の意味があったとみられるが、具体的な儀礼の目的までは明確にできない。また、本例は、鞘を除いた抜き身の状態で沈められていたが、その行為には前期古墳の副葬行為に通底する伝統的な祭儀意識の表れを読みとることができる〔第3章3〕。

本例の入手経路と首長層 古式の円頭大刀の出土地が近畿地方に集中することから、本例は朝鮮半島から近畿地方中枢部を経て当地にもたらされたと推定できる。稀少な装飾大刀が下賜されたことは、倭王権の東国経営の足がかりとして、6世紀の西遠江の重要性が高まったことの反映と評価できよう。円頭大刀の保有には、佩用者の性格が反映されているとみられ、6世紀の西遠江勢力の具体像をうかがう上で重要な検討材料になりうる。従来、様相が不明確であった6世紀代の浜松南部地域に、倭王権との結びつきを強めた有力者がいたことが具体的に示せる意義は大きい。6世紀の当地に有力な地域勢力がいたことが、7世紀後葉以降、数智郡（測評）の役所が伊場遺跡群に置かれることに繋がると捉えることも可能になった〔第3章3〕。

3 今後の展望

本書において報告した円頭大刀は、従来知られていた古墳出土の装飾大刀とは異なる考古学的情報を数多くもたらした。本書で明らかにした事実は、装飾大刀の総合的な編年や技術系譜の解明に少なからず寄与するものがあるといえるだろう。自然河川に装飾大刀を沈める儀礼の痕跡についても、今後の調査で類例が確認される可能性がある。古墳への副葬とは異なる装飾大刀の呪術的側面にかんして、さらなる認識の深化に期待したい。

伊場大溝出土遺物の重要性は、6世紀代に遡る円頭大刀の出土によって、古代文字資料が出土する7世紀後葉から8世紀にとどまらないことが示された。今後は、古墳時代にはじまる伊場大溝の豊富な歴史資料を総合的に検討し、地域史を再構成する姿勢が求められよう。

〔謝 辞〕

本書の作成にあたり、以下の方々や機関のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい。
穴沢咏光、石井千絵里、井鍋誉之、上野祥史、大谷晃二、太田宏明、大谷宏治、賀来孝代、風間栄一、川江秀孝、木村友則、菊地芳朗、田村隆太郎、辻川哲朗、徳江秀夫、中山清隆、中尾麻由実、新納泉、土生田純之、平野吾郎、広瀬和雄、松尾充晶、向坂鋼二、宗広睦子、山岸晃子、山口耕一、金洛中、掛川市教育委員会、佐野市郷土博物館、下野市教育委員会

図 版

PLATE



円頭大刀出土状態（南東から）



柄頭・柄間詳細 (1: 佩表 2: 佩裏)



1 円頭大刀 (1: 佩表 2: 佩裏)



2 柄頭・柄間側面 (1: 背側 2: 刃側)



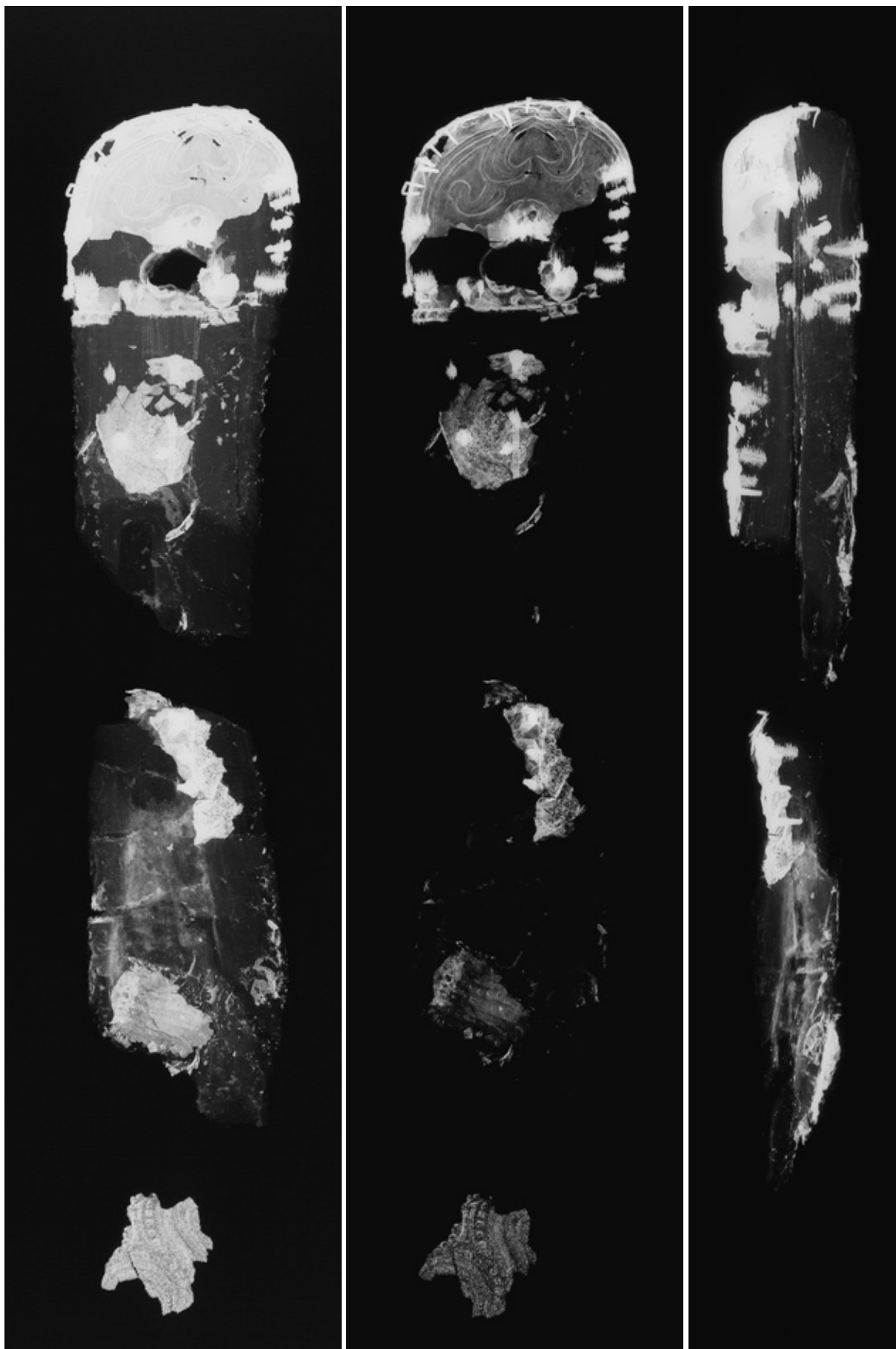
3 貴金具 (1: 詳細 2: 装着状態)



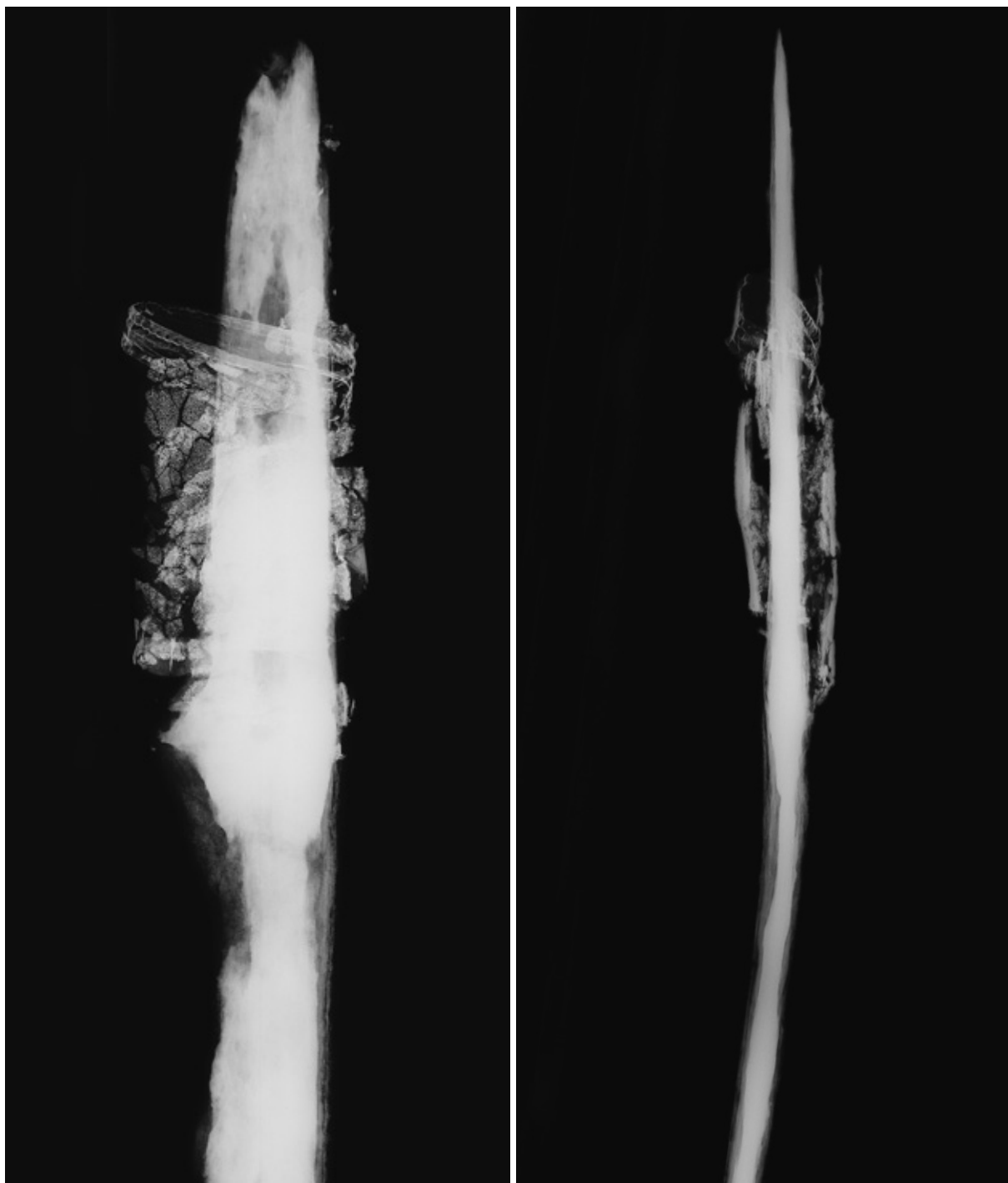
1 柄頭詳細 (1: 金板を外した状態 2: 金板表側 3: 金板裏側)



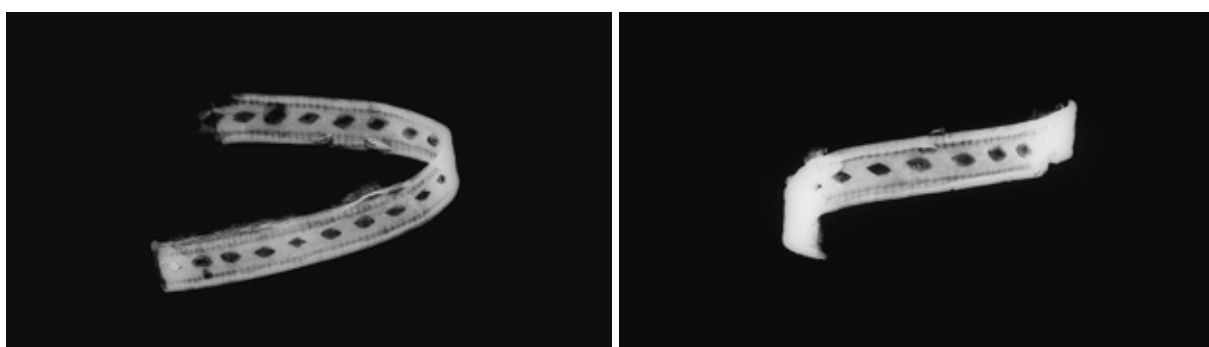
2 柄頭・柄間詳細



柄頭・柄間X線透過写真



1 関部X線透過写真



2 責金具X線透過写真

報告書抄録

書名（ふりがな）	鳥居松遺跡 5 次 円頭大刀編 （とりいまついせき 5 じ えんとうたちへん）							
編著者名	鈴木一有（編集）、大森信宏、西尾太加二、村上隆							
編集機関	浜松市教育委員会 〒 430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466 FAX（053）457-2563							
発行機関	（財）浜松市文化振興財団							
発行年月日	2009 年 12 月 25 日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とりいまついせき 鳥居松遺跡	静岡県 浜松市中区 森田町	22202	01 04 28	34 度 41 分 35 秒	137 度 43 分 11 秒	2008 年 1 月 4 日 ～ 2008 年 6 月 16 日	1200 m ²	宅地造成に先 立つ事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鳥居松遺跡	河川跡	古墳時代	自然河川 （伊場大溝） 土器集積		金銀装円頭大刀		幅 20m、深さ 2.5m の 自然河川（伊場大溝） から完形の装飾大刀が 出土した。	

北緯、東経は世界測地系の数値である

鳥居松遺跡 5 次

円頭大刀編

2009 年 12 月 25 日

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当

(教育委員会の補助執行機関)

〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2

発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団

印刷 松本印刷株式会社

Toriimatsu Site

The 5th excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 6th Century
Sword with a Pommel having a Rounded Hilt End



December, 2009

Hamamatsu Cultural Foundation